

イリュージョン

大晦日の奇跡

夕輝文

敏

夕輝文敏の あたたかく 詩情あふれる作品集。
名作『イリュージョン／大晦日の奇跡』をはじめ
『海岸列車の女』『バス停』等 全8編収録。

短編集

イリユージョン

大晦日の奇跡

夕輝文敏著

短編集

イリュージョン 大晦日の奇跡 目次

夢見地区金田屋食堂

もう一度・あの海で

イタヤカエデの木の下で

イリュージョン 大晦日の奇跡

約 束

海岸列車の女(ひと)

赤いポスト

バス停

夢見地区金田屋食堂

ナナカマド

病院の帰り道、何気なく空を見上げると、ナナカマドの赤い実が目に入ってきた。

「この真冬の二月に、まだ実がついているなんて・・・」

今年の冬は雪が多く、何度も吹雪にも襲われている。なのに、ナナカマドの梢には、赤い実がしっかりとついていた。秋に色づいた実が、寒さに朽ちることもなく風雪にも耐え、二月の寒空に輝いている。この小さな実のどこに、そんな力が秘められているのだろうか。

私は、驚きの目でナナカマドの赤い実を見ていた。

この街路は、私の通勤経路で毎日通り過ぎていた。だが、いつも時間に追われ足早に通り過ぎ、四季の移ろいに目をくれることもなかった。

私は、ナナカマドの赤い実を見ながら、そのことにも気づかずにいた自分の日常に落胆していた。

「こんなことにも気づかず、自分は毎日何をしていたのだろう・・・」

私はそう自分に問いかけながら、ナナカマドの木の前に佇んでいた。

前の会社を辞め、函館から札幌へ来て三年が過ぎようとしていた。

夕張の炭坑育ちの私も、朝夕の雑踏の中地下鉄に揺られ、いつのまにか足早に歩く都会の風景の一部になっていた。毎朝寝不足の目で雑踏の光景を眺め、ネオンの下を疲れた足取りで家路につく。何か欠けているような気がしていた。

時折そんな気持ちで沸き起こってくるが、それも日々の生活の中に埋もれてしまい、それ以上深く考えることもなかった。

だが、今日は風邪で仕事を休み、時間の拘束から開放され、ナナカマドの赤い実を見た瞬間、私はその答えを探しはじめた。

私は、最近読んだ本や、音楽のことを考えてみた。以前は、沢山本を読みCDも多く聞いて心を震わせていたが、近頃は、その機会さえなくなっていた。

「いつから、こうなってしまったのだろう」

夕張にいた頃は、受験勉強を抜け出しても貪るように本を読み、レコードを聞いていた。

あの頃の自分と、今の自分はどこが違うのだろうか。

私は、そんなことを考えているうちに、急に夕張へ帰りたくなってきた。夕張にはもう十年以上帰っていないかった。もっとも帰るとはいつても、そこにはもう親兄弟も友人も住んでいなかった。

夕張市夢見地区、そこが私の故郷である。

バス停

私は、熱っぽい体で夕鉄バスに乗っていた。十二年前と同じように大通り公園のバス停から、夢見行きのバスに乗った。閉山により便数は減ったものの、夢見地区への直行便は一本が残っていた。

この十数年、大通り公園に來ると、バス停の前に佇んでいた。そして、時刻表を見ていた。ここは、私にとって故郷に一番近い場所であった。

バスは、札幌市内を抜けた後、雪深い山間の道路を走り、夕張へと向っていた。十八才のときに夕張を出て以來、その年の正月に一度帰ったきり、夢見の冬とは会っていないかった。

途中バスは、空家ばかりが目立つ集落をいくつも通り過ぎて行つた。ズリ山だけは朽ちることもなく、それらの廃墟を見守っているかのようにそびえ立っていた。三〇以上もあつた夕張の炭坑も、今では全てがその灯を消していた。

札幌から乗りこんだ客の大方は、夕張本町で降りてしまった。

夕張の本町を過ぎ夢見地区へバスが進むにつれ、今は住む人もなく、雪に包まれた白一色の世界が広がりはじめた。白い結晶たちが作り上げた御伽噺のような世界を、バスは泳ぐように粉雪を舞い上げ走って行く。かつての繁栄をしめすズリ山も、廃屋となつた建物も深い雪に埋もれ、悲しみも、寂しさも全て白い世界に包まれていた。

昭和のはじめ、東北三県を中心に内地で根を張ることができなかった人々が集まり、この地に夢を託しつつか「夢見地区」と呼ばれるようになっていた。

終点「夢見地区」で降りる客は、私を含め三人であった。外の二人は、老人達であった。

老人達は、終点で降りる私をめずらしそうに見て、歩き去って行った。

私は、バスが去った後もバス停に佇んでいた。十八のとき、私はこのバス停から夢見地区を抜け出した。生まれたときからこの小さな炭坑町で十八年間暮らしてきて、外の世界はほとんど知らずにいた。思春期の頃には、この町がとても窮屈に思えていた。だから、漠然とはしていたが、十八になったらこの町を出ようと決めていた。

あの日、札幌行きのバスに乗る私を、友人たちが見送ってくれた。このバス停から、少年期に別れを告げた、私のもうひとつの人生がはじまった。この町を抜け出しさえすれば、道が開けるような気がしていた。十八のとき、私は何かを振り切るような気持ちで、ここからバスに乗り込んだ。

柱の傷

バス停から小学校の裏山に目を移すと、黄色い旗が風に吹かれ揺れていた。そこには、かつて炭坑の神社が祭られていた。町を一望することができ、「神社」と呼ばれ誰からも親しまれていた場所であった。

黄色い旗たちは、消えゆく町の運命に逆らうかのように、激しく揺れていた。

私は歩きはじめた。頬に突き刺すシバレが懐かしい。歩く度に靴の底で雪が「キユツ、キユツ」と音をたてる。札幌にいても、こんな感触で雪を感じることはなかった。

表通りは除雪されているものの、中に入るとほとんどの街路は、雪に埋もれていた。

炭坑の最盛期には二万人もいた町も、今は廃屋ばかりになり、雪に埋もれていた。それらは、本当は、とても淋しい風景なのに、白一色の世界に包まれていると、何故か、恨み、辛さといった情感が浄化されてしまい、全てが穏やかに見えてくる。

時間の流れが沢山の熱いものたちの熱を、奪い去ったのかもしれない。

私は、昔住んでいた炭住をめざし歩いた。もう解体されて、建物はなにかもしれないが、ここに帰ってくるのと体が自然に引寄せられてしまう。

雪が降り出してきた。私は、空に向い振り注ぐ雪を見た。一つ一つの結晶が、花びらのように、地上に舞い降りてくる。

「そうだ、あのときも、こうして雪を見ていた」

私は、高校の音楽教室を思い出していた。音楽教室の窓は大きく、遠くには夕張岳を見ることができ、三年生のとき、私はやはりこうして雪を見ていた。

結晶たちは、直線的に落ちることはなく、風を受けながらたくみに空中を舞っていた。子供の頃から見慣れた雪なのに、とても結晶たちが新鮮に思えていた。

「夢見地区の雪を見るのも、久しぶりだなあ……」

やがて、昔住んでいた住宅が見えてきた。だが、そこに続く道は雪に埋もれていた。私は、雪の中を掻き分け歩き出した。思いのほか雪が深く、前に進むのに時間がかかる。

途中で背中に視線を感じ振り向くと、まだ人が住んでいる住宅の窓越しから私を見ている人たちがいた。たぶん、彼らにすればいくら私の故郷でも、よそ者にしか見えないのだろう。

いつのまにか、自分がよそ者になってしまう。こんなことは、今まで考えたこともなかった。ましてや、十八のときバス停に立っていた私には、想像さえ出来なかったことだ。

私は、やっと家の前にたどり着いた。玄関の前にも雪が積もっていた。ノブを回すと、鍵はかかっていなかった。周りを見渡すと、隣の玄関の横に錆びついたスコップが立てかけてあった。私は、そのスコップを取ると雪を撥ね退けはじめた。その間も視線を感じていた。

「気にするな。俺の家なんだから……」

やっと玄関を開けることができた。中に入ると、ガラスの壊れた窓からは雪が吹き込み、台所の辺りで吹き溜まりになっていた。

父が襖を張り替え、母も毎日床を磨きいつもきれいにしていた家だったが、今は廃屋になつていた。これが、十二年後の現実の姿とは。あまりの変わりように私は愕然としていた。

私は気持ちが悪く着くと、柱の前に歩み出した。

「あつた。この傷、俺たちの背の丈だ」

父は、毎年五月五日の端午の節句には、私と弟を柱に立たせ、背丈のところを小刀で印をつけていた。

私は、その傷を手でさすっていた。この柱には私たち家族の歴史が刻み込まれていた。

私は思わず、柱を抱きしめた。そして、過ぎ去った日々を思い出していた。

冬になると、隙間風が入り込み、いつもフジキの石炭ストーブを囲みながら暮らしていた。朝になると、母が石炭ストーブに火をつけ、やかんのお湯が沸くと父は凍った水道管に熱湯をかけていた。そして、水道管から水が出ると、弟と一緒に拍手をして喜んでた。

今から考えると、とても耐えられるような生活でなかったが、まだ日々の生活の煩わしさも知らずにいて、何処かのどかささえあつた。

今は沢山の便利な日常を手に入れ、冬の寒さに震えることもなくなつたが、いつも時間に追われ疲れている自分がある。

「あの頃に比べ、今の自分は幸せなのだろうか・・・」

たぶん、今の自分はあまり幸せでないのだろう。だから、柱の傷に触れた瞬間涙が出てきたのだろう。ここで暮らした十八年間の生活は豊かではなかったが、まだ人生の汚れを知らずにいることができた。

今の自分は、何か大切なものを見失っている。私は、柱の傷をさすりながらそう感じていた。

学生服のボタン

私は再び雪山を掻き分けると、小学校、友人の家、スキー場など、思いでの場所へ向いて歩き出した。あれほど軒を連ねてあった炭坑住宅も、ほとんどが解体されてしまい、駅前にわずかに残っているだけであった。

バスを降りたときは、まだ曇り空であったが、雪が強く降り出してきた。私は、コートフードをかぶりながら歩いた。途中小学生数人とすれ違っただけで、後は人を見かけることもなかった。

四〇分ほどの間に見たいところは全て歩いてしまった。ここに住んでいた頃は、町はもっと大きく思っていたが、こうして歩いてみると、あまりにも小さく感じられた。

「夢見地区が、縮んでしまった」私はそう呟いた。

もう一度私はバス停へ歩き出した。雪は激しく降り出してきた。

商店街の辺りに出ると、門間商店の看板が見えてきた。子供の頃、お祭りとか正月には父に連れられて来て、弟と一緒にプラモデルなどを買ってもらった店であった。ここに来ると、文房具からカメラ、スキーまで揃っていた。夢見地区の子供たちにとって、門間商店は、何かわくわくさせるものがあつた。

私は、店の前まで走り出した。そして、店の中を覗いてみると、おじさんはストロブの前に座って何やら書込んでいた。

私は、入り口の前で雪を払い店の中に入った。

「こんにちは」

「あ、いらつしやい」

おじさんは、めがね越しに私を見ると立ちあがつた。

「あんた、夢見に住んでいた人かい」おじさんがそう尋ねてきた。

「そうです。もう十二年前になるけど」

「そしたら、東高の卒業生かい」

「はい、第八期生です」

「そりや、良かった。この間店の中整理していたら、東高の学生服のボタンいっぱい出てきたもんだから。このボタンやるから、あんたの東高時代の友達にも分けてやってもらえるかい」

おじさんは私にボタンの入った袋を手渡してくれた。

門間商店は、ダムの関係で今春には店をたたむそうだと。それで店の中を整理しているのだけれど、懐かしい物が出てくる度につい思い出に浸り、あまりはかどらないと言っていた。

このボタンも卒業生に渡すまでとは思いつも机の上においていたそうだと。

「おじさん、ありがとう。確かに預からせてもらうから」

「ああ、これでやっとひとつ整理できた。良かった、良かった」

おじさんは、本当にほっとした顔でそう言った。

「ところで、おじさん、神社とこの黄色い旗、あれなんですか」

私がそう尋ねると

「あれは、ここに帰ってきた子供達が、ダムに沈んでも残るようになって、いつの間にかやりだしたんだ。あれ、高倉健の映画で夕張が出てくる（幸福の黄色いハンカチ）って

あったしょ、あれにあやかっているんだべさ」

とおじさんは、話してくれた。

「そうかい。幸福の黄色いハンカチね。俺もこの次来たら、何か書いて神社につるそうかな」

「そうだ、つるせばいい。なんもかんもなくなっても、あそこはダムに沈まないから」

私は、おじさんの口から「ダム」の言葉を聞いて、間もなく夢見地区がなくなるといいう現実を感じていた。

「あんた、今日車で来たのかい」

「いいえ、バスだよ」

「だったら、帰りの便まで時間あるから、金田屋食堂に寄ったらいいよ。あそこのラーメン昔のままだから」

金田屋食堂、懐かしい響きだ。夢見地区に一軒だけある食堂で、秀夫の家でもあった。

「おじさん、万年筆あるかい」

私は、門問商店の思い出に万年筆を買おうと思った。

「万年筆はもうないな。あるのは、ボールペンとシャープペンシルだけだ」

おじさんは棚の奥を探し出した。

古い灯油ストーブが、ファンの軋む音を立てながら燃えていた。店の中を見渡すと、商品も少なくなり陳列ケースも姿を消していた。

昔は、もっと広い空間に思っていたが、意外なほど小さく見えてきた。あのわくわくさせてくれた空間が、今は色褪せて見える。店の中には、閉山後の時間の流れが漂っていた。

「これが門問商店での最後の買物になる」

私はそんな思いで、かつての活気に満ちていた頃の店を思い浮かべ、おじさんの後姿を見ていた。

「あった、あった、このペンシルなら大丈夫だ」

おじさんは、箱に入った三本のペンシルを出してくれた。

私は、その中から一本を選び

「おじさんこれにするよ、幾ら」と尋ねた。

「どうせ在庫整理しているから、定価三千円だけど千円でいいよ」と言っておまけに芯もつけてくれた。

「おじさん、ありがとう。これ大事に使うから」

お金を払い終わると

「あんたも、元気でな。そして、東高の仲間にもよろしく言ってくれや」

おじさんは、昔と同じ口調で言った。

「預かったボタン、必ずおじさんの気持ちと一緒に、みんなに渡すから」

店の外に出ると、先ほどより雪が激しく降っていた。

私は、金田屋食堂を目指し歩き出した。肩の上には、雪が音をたてて積もっていた。雪も結晶が大きくなると、地上に落ちるとき音を出すことがある。「雪の音」を聞くのも久しぶりだ。こんな、街の日常の現実から隔離されたような世界で、私は生まれ育った。

かつて、炭坑の最盛期には活気のあった商店街も、ほとんどがシャッターを降ろしていた。

再会

降りしきる雪の中、金田屋食堂ののれんが風に吹かれて揺れているのが見えてきた。

私は、コートに積もった雪を払いのけると、金田屋食堂の扉を開けた。

「いらっしやいませ・・・」

おばさんの元気な声が私を迎えてくれた。

「おばさん、しばらくです」

「あら、隆君でしょう。いやあ、懐かしいね。今どこにいるの」

「札幌にいます。今専門商店に行ったら、金田屋食堂まだやっているって言うから、おばさんのラーメン食べたくなって」

「そうかい、嬉しいね。夢見に帰ってくる子供たちは、みんなここに寄ってくれるんだ。」

私が椅子に座ると、おばさんは冷蔵庫からビールを一本取り出し、私の前に置いた。

「これおばさんのおごりだから、ラーメンできるまで飲んで待っていて。隆君、今いくつになったの」

「今年で三ーになります。もう、三ーだなんて、早いよね」

「そうかい、もう三ーにもなるんだ」

おばさんは、厨房へ行って、ラーメンを作りはじめた。

私は、秀夫のことを思っていた。たぶん、おばさんも、私の年齢を聞いたときから、秀夫のことを考えていたのだと思う。

金田秀夫と私は同級生であった。小学校六年と中学三年生のときは、同じクラスになったこともあった。中学に入ってから、何度か互いの家に遊びに行ったこともあった。

秀夫は優しい子で、物事にひたむきであった。誰からも愛されていた秀夫は、十五才のとき病気で死んでしまった。

中学の修学旅行の途中で体調を悪くし倒れ、祭りの朝に亡くなってしまった。

私は、秀夫の死を受け入れることができなかった。死とは炭坑事故とか、老人だけに關わる大人の世界の出来事だと思っていた。子供が死ぬなんて、まして、こんな身近な形で、死を知るなんて考えたこともなかった。

秀夫のことでいつも思い浮かぶのは、中学のマラソン大会のことだった。秀夫と私は一緒に走っていたが、私は途中で苦しくなり歩き出した。すると秀夫は「途中で棄権するのは卑怯だ」と言い残し、彼自身は華奢な体で完走した。

最後まで完走した秀夫は十五で亡くなり、途中で歩き出した私は、いつのまにか秀夫の二倍もの人生を過ごしてきた。この現実を、どう受け止めたら良いのだろうか。久し振りに秀夫の「言葉」を思い出しながら、私は、考えていた。

おばさんも、私が店に入ってきたときから、秀夫のことを重ねて思っていたのだと思う。

「はい、お待ちどうさん。ラーメンできたよ」

おばさんは昔ながらの笑顔で、テーブルにどんぶりを置いてくれた。

「いただきます」

私は、音を立てながらラーメンを食べはじめた。

「ああ、うまい。懐かしいなあ、この味・・・」

私は、最後のビールを飲み干した。そして、十八のときに夢見地区を出てからのその後についておばさんと話していた。私は、両親は函館で健在であること、私はまだ独身だが、弟は結婚していて、福岡で仕事をしていることなどを話した。そして休暇が取れたので、急に夢見に会いたくなり、バスに乗ったことなども話した。

おばさんのところは、閉山の年におじさんが亡くなり、その後も近所の店が次々と辞めていく中、何とか今まで続けてきたことなど話してくれた。でも、最近江別にと嫁いだ娘の和枝さんが、しきりに店をたたんで一緒に暮らそうと言っているそうだ。

話し終わると、おばさんは、店の戸を開けた。雪と一緒に風が飛び込んできた。

「こりや凄いい吹雪になってきたわ。札幌行きのバス大丈夫かね」

おばさんは、戻ってくると夕鉄バスの夢見営業所へ電話をかけてくれた。

「隆君、三時のバスこのままだと今日は無理かもしれないと。もし、だめだったら、ここに電話来るから」

おばさんは、二本目のビールをテーブルの上に置いてくれた。

「おばさんも一緒に飲まないかい」

私は、コップを取りに厨房へ入った。どんぶりの場所も、コップの位置も、全部昔のままであった。秀夫のところ遊びに来ると、おばさんは子供たちにラーメンをご馳走してくれた。そんな折、一度でいいから厨房の中を見たいと思い、秀夫に頼んで見せてもらったことがあった。あれから十五年以上たつのに、何も変わっていなかった。

「腹立つね。折角、夢見に帰ってきたのに、吹雪なんて」

おばさんは、本当に気の毒そうに言った。

「おばさん、でもね、今とっても懐かしい気持ちになっているんだ。夢見の吹雪見るなんて、久し振りだし、そして、この金田屋食堂も昔のままだし・・・」

「そうかい、ここ出て行くと、吹雪まで懐かしくなるのかい」

おばさんはそう言うのと、声をたてて笑った。わたしも、一緒に笑い出した。そして、おばさんは夢見地区を訪ねて来た同級生たちの話をしてくれた。

吹雪の夜

しばらくすると、電話が鳴った。夕鉄バスからだった。

「バスだめだって、隆君。今日はおばさんとこに泊まってけばいいしょ。秀夫の部屋が空いているから」

「秀夫の部屋が空いている・・・」この言葉に私の胸は高鳴った。

十二年前の三月、夢見を出て行く前の日の夜、私は金田屋食堂の扉を開けていた。おばさんに、秀夫の好きだったクリムケーキを仏壇に供えてほしいと渡していた。おばさんは、家にあがり線香をあげていけばと言ってくれたが、これから友達のところへ行かなければならないと嘘をついて、帰ってきたことがあった。

私は秀夫が亡くなってから、一度も線香をあげたことがなかった。秀夫の死を認めたくないという少年期のこだわりが、そうさせていたのだと思う。

いつもひたむきで、マラソンも一生懸命完走した秀夫が十五で死んでしまう。それも、誰もが楽しみにしている、祭りの日に死を迎えてしまう。そんな非情な現実を受け入れることができなかった。

私は、ふと何か運命的なものを感じていた。病院の帰りにナナカマドの赤い実と出会ったこと。思い立ち夢見行きのバスに乗ったこと。そして、吹雪と出くわし今晚秀夫の部屋に泊まることになったこと。

全てが、何かに引寄せられているような気持ちになっていた。そして気づくと、熱も下がり風邪のけだるさも消えていた。

その夜、私はおばさんとテーブルを挟んで座っていた。食堂の真中では、石炭ストーブが真っ赤に燃えていた。ストーブの上では、大きなやかんが白い湯気を上げながら「シュー、シュー」と音を立てていた。

この空間だけは、時間が止まっていた。何もかもが昔のままであった。玄関からは、隙間風が入り込む。外は、まだ吹雪いていた。

おばさんの手料理を食べ、少し酒を飲んで、私は酔いを感じていた。

おばさんも一緒に酒を飲んでいた。

「この吹雪じゃ、今夜は誰も来ないか」

「えっ、この時間にもお客さん来るの」

「そうだよ。暗くなると一人暮らしの年寄りたちがやって来て、酒飲んで歌っていくのさ。」

おばさんも、一人だしね」

おばさんは、旦那さんが亡くなってからも一人で「金田屋食堂」を続けていた。

「おばさん一人でずっとここ守ってきたもんなあ。俺たちもここがあるからまだ帰って来るところがあるんだよなあ。本当、ありがたいよ」

「そう言ってもらえるなんて嬉しいね。でも、そんなたいしたことじゃないんだよ。た

だ、夢見が好きなだけなんだよ。ここで楽しいこといっぱいあったから。本当は、ここで骨埋めたかったんだけど・・・」

「おばさん、ダムの話あるけど、この店どうするんだい」

「春になって、雪溶けたら取壊すよ。去年の秋に補償契約に印押したし。それに、国のすることには従うしかないからね・・・」

戦後の日本経済の復興期を夢見地区の「石炭」も支えてきた。そして、時代が変わると石油エネルギーに押され、閉山になってしまった。今度は、ダムの中に沈んでしまう。閉山後も夢見地区を守ってきた人たちが、ここを出て行くことになった。

おばさんも、ついに「金田屋食堂」の看板を降ろすことになってしまった。

「でもね、これで良かった気もするんだよ。この土地にも、店にも思い出が沢山ありすぎて、おばさんこのままだと踏ん切りつけられなかったから。近頃は、雪跳ねもつらくなくてきてね。もしここで寝込むようなことになれば、娘にも迷惑かけるし。だから、今が潮時なんだ、おばさんそう考えることにしたんだ・・・」

おばさんは、そう言う私のコップに酒を注いでくれた。私は、一口飲むとコップをテーブルに置いた。

「金田屋食堂もなくなると、俺たち本当にもう帰る場所がなくなってしまうんだな・・・」

「夢見に帰ってくる子供達は、みんなここに寄ってくるからね。夢見で生まれ育った子供たちが、何かあると、ふらりとここに帰ってくる。親兄弟もいないし、育った家だつて壊されて何にもないのに帰ってくる。そして、ここでラーメン食べて、おばさんと昔話して、また街へ戻って行く」

今まで故郷としての夢見地区のことを考えたことはなかった。こうして帰ってくると町は小さくなって寂れているのだけど、それでも町全体が包み込んでくれて、心が軽くなる

のを感じていた。昔住んでいる頃は気づかなかつたが、ここで生まれた子供たちは、夢見地区の自然にも大人たちにも、ずっと見守られていたのかもしれない。

「ただどおばさん、俺たち十八になつたらこの町を出て行くのが憧れみたいな時期があつたんだ」

「そうだ、高校生の頃は、この小さな炭坑町が息苦しくて、外の世界に出ることばかり考えていた。この町には、もう何も求めるものはないと思つていた。だから、脱出するような気持ちで、十八のとき夢見地区を出ていった。そして、その翌年、炭坑は閉山し、町は急激に衰退していった。」

「それが若さだ。おばさんは山形の貧乏農家の出だけど、あんたらが外に希望を持つたように、おばさんも、あんたたちの親も、この夕張の山奥の夢見地区に希望をつないだんだ。秀夫だつて生きていたら、きつと隆君と同じ気持ちで、ここを出ていったはずだよ。故郷なんてそんなもんだ。それでいいんだよ……」

おばさんの口から、秀夫の名が出た。私はこの瞬間を待つていたのかもしれない。

「おばさん、俺思うだけど、秀夫が生きていたら、可愛い嫁さんもらつて、おばさんのことも大切にして、きつとみんなのことを幸せにしていたと思う。俺、秀夫の二倍も生きてきたけど、俺の三〇年はあんまり周りを幸せにしてこなかつたな。だから、秀夫と俺逆だつたら良かったのになんて思つたりして……」

「何馬鹿なこと言つてるんだよ、さあお飲み」

おばさんは、また私のコップに酒を注いでくれた。

「隆君はこうして夢見に帰ってきて、一人暮しのおばさんのところに寄ってくれて、おばさんの話し相手になってくれた。もし秀夫が生きていたって、意地の悪い嫁もらって尻にひかれ、おばさんとこになんか顔も出さないかもしれない。だから、隆君の人生だつて、あんたの知らないところで、幸せ沢山蒔いてきてるんだよ。あんたは、昔のままの秀夫の友達の隆君だ。おばさんにはこうして話しているだけで分かる。だから、元気出して生きなくちゃ」

私は、おばさんの話を聞いているうちに、涙が出そうになってきた。本当は、自分のために人を傷つけ、嘘も沢山もついて生きてきたのに。なのおばさんは私のことを受け入れてくれた。

「おばさん、ありがとう。俺、夢見に帰ってきて良かった。おばさんにも、会えて良かった。ありがとう・・・」

「おばさんもうれしいよ。いまだに秀夫の同級生たちがこうして来てくれて、ラーメン食べて、話してくれて」

私は、心が満たされ幸せな気持ちになっていた。札幌に来てからこの三年間、いつも心に鎧をつけたまま暮らしていた。職場で酒を飲んでもあたり障りのない話ばかりしていた。

もうこれ以上転職はできない。どこにも自分の逃げ場はない。そんな緊張した日々を送っていた。だから、無防備に自分をさらけ出し、こんなにも心が満たされたことはなかった。

しばらくすると、入り口の戸が開き、「いやいや、ひどい吹雪だったな。やっと小降りなってきた」と門閭商店のおじさんが店に入ってきた。

「こんばんは。先ほどは、ありがとうございます」と私は、椅子から立ち上がり挨拶をした。

「いや、あんた昼間のお客さんでないの。バスだめだったんだ」

「門閭さん、この人秀夫の同級生なんだよ。秀夫も生きていたら、今年で三一だ。この吹雪だから、こつちから頼んで今晚ここに泊まってもらうことにしたんだよ」

「そうかい、秀夫ちゃんと同級生かい。秀夫ちゃん、生きていりゃこんな大きくはなっていないんだ。早いもんだ。ところで、あんた、嫁さんいるな」

「いえ、まだなんだけど・・・」

私は、そう答えながら、佳奈美のことを考えていた。

佳奈美とつきあってから三年が過ぎ、彼女も今年で二九才になるうとしていた。

クリスマスイヴの夜「私たち、これからどうするの・・・」と佳奈美がぼつりと言った。

私は、佳奈美が何を言おうとしているのかわかっていたが、何も答えなかった。そんな男のずるさを、佳奈美は見抜いていたのかもしれない。あれ以来、私たちは会っていないかった。

おじさんは、ストーブの前で暖まると、私の横に座り焼酎を注文した。

「こんな吹雪の夜は一人で飯食ってもうまくないし、ここに来れば、誰かいると思つて・・・」

金田屋食堂は、いつしか夢見地区に残った人たちの集いの場になっていた。人恋しくなると、夜毎、夢見の住人たちが集まってくる。

「金田屋さん、さつきこの人シャープペンシル買って・・・。店たたむから品物整理してるんだけど、色んなこと思い出して、さっぱりはかどらねえ。でもさあ、この名前にもまいっちゃうな。閉山でこんなに寂れて、今度はダムに沈じまうのに、未だに夕張市夢見地区だもんな。とうに夢もなんも破れツちまったのに、本当まいっちゃうよ」

おばさんは、おじさんのコップに焼酎を注いだ。おじさんは注がれた焼酎をぐいと半分程飲んだ。

「ああ、うまい。ここの焼酎もラーメンも春になったらお別れだ。金田屋さんは、江別の和江ちゃんところに行くんだべさ。俺も、仕方がないから、岩見沢の京子とこさ行くべさ」

私は、空になったおじさんのコップに焼酎を注がせてもらった。

「おじさん、さっきの夢見地区の名前だけど、俺は今でもここは夢見地区でいいと思うんだけど」

すると、おばさんが厨房の向こうから言った。

「うれしいこと言ってくれるね。門間さん、閉山とかダムのことがあったから少しひねくれてしまったね」

「したって、閉山で客は減るし、今度はダムの底だもんなあ。まったく何もいいことないし、夢見どころじゃないべさ」

私は、続けて言った。

「でも、ここは俺たちの生まれ育った故郷なんだよ。街の生活でつらいことあったって、ここに戻ってくると、また元気になれる。夢見には、まだそんな力があるんだよ。俺、今でも良く覚えてる。毎年祭りになると、門間商店露天出して、ヨーヨーすくいか、くじやっていたよね。なんにも当らなかつた子供には、おじさん必ずおまけくれていたつけ。そして家族みんなで金田屋食堂でラーメン食べて。俺たちここで育つた子供は、夢見には楽しい思いでいっぱいあるんだ。だから、ここはいつまでも夢見地区でいいんだと思ってる」

おじさんは、しばらくコップを見つめていた。そして、ぽつりと言った。

「お祭り、沢山の子供たち来てくれたな。三菱の職員の子供も、坑夫の子供も、みんな親からもらった十円玉大事に手に持って・・・」

おばさんは、厨房から出てくるとおじさんのテーブルにラーメンを置いた。

「お祭りの日は忙しくて、秀夫も和枝もみんなして、店手伝ってくれた・・・」

テレビゲームもパソコンもない時代、子供にとっても大人にとっても夢見地区の炭山祭りは、とても楽しみな行事であった。

その後、私は金田屋食堂のおばさんと門間商店のおじさんと三人で、夜が更けるまで、活気のある頃の夢見地区の思い出話に花を咲かせ、笑ったり、涙を流したりしていた。

夢

その夜、私は秀夫の夢を見た。

秀夫と私は、真夏の陽射しを浴び、シューパ口湖のほとりを走っていた。私は、秀夫はとうに死んでいることを知っている上で、話しかけた。

「秀夫、この間おまえの部屋に勝手に泊めてもらって、悪かったな」

秀夫はにっこり笑うと

「なんも、隆こそ母さんに優しくしてくれてありがとう」と言ってくれた。

私は、秀夫と一緒に走っているのがとても嬉しかった。言葉は交わさないのに、互いの気持ちを通じ合っているのが感じ取れた。

だが、しばらくすると秀夫は苦しみだした。

「秀夫、大丈夫か」私がそう言うと

「隆、俺はもう走れない。だけど、おまえは走れ。今度こそ完走するんだ。いいか、もう棄権するなよ」と秀夫は言った。

私は「わかった。必ず完走するから」と言って走りつづけた。

後ろを振りかえると、秀夫の姿はもう何処にもなかった。

目が覚めても、秀夫の声が耳の中に残っていた。

秀夫の言葉は、私の心にたちこめていた、もやもやした得体の知れないものたちを消し去ってくれた。そして、それらが消え去った後、私の脳裏には佳奈美のことが浮かんできた。

出 発

外で物音がした。「おばさんが、雪掻きしている」

私は、急いで着替えると外に出た。今朝はシバレが強い。

「おばさん、おはようございます。泊めてもらったお礼に、雪掻きやらせてください」

「そうかい、それじゃ隆君にお願いしようか。おばさん朝ご飯つくるけど何がいい」

おばさんの口からは、白い息が出ていた。

「おばさん、俺、金田屋食堂のラーメンもう一度食べたいなあ」

私も白い息を吐きながら、こたえた。

「そうかい。それじゃ美味いラーメンつくるから」

昨夜の吹雪きが嘘のように晴れ渡り、山の向こうには、夕張岳がくつきりと見えてい
る。

紺碧の空に、いつまでも夢見地区を見守るかのように夕張岳は聳え立っていた。

どんなに時代が変わっても、夢見地区がダムの底に沈んでも、夕張岳がある限り、こ
こで生まれた者たちの故郷は消えはしない。

「まだ、帰ってくる場所が、ここにはある」

私は、夕張岳がそう語りかけているような気がした。

朝食の後、私は秀夫の仏壇の前に座り、手を合わせていた。

「秀夫、俺、完走するから。苦しくて、もう、途中で逃げたりしない」

私は、秀夫の写真を見つめながら心に誓った。

金田屋食堂を後にするとき

「おばさん、急に泊めてもらったりして迷惑かけたから、いくらかでも勘定払わせてもら
いたいんだけど」と私は言った。

「秀夫の友達からは金取れないよ。その代わり、隆君、これがあんたの故郷の味なんだから、いつまでも、覚えておいてよ」

「おばさん、ありがとう。俺いつまでも金田屋食堂のラーメンの味も、おばさんのことも忘れないから。それから、俺、秀夫の分もうんと長生きして、頑張るから。だから、おばさんも元気でいてよ」

私の目からは涙が流れていた。

「うん、そうだね。秀夫の分も生きてやってね」おばさんも泣いていた。

バス停では、夕鉄バスがエンジンをかけ待機していた。

私は、またこのバス停から夢見地区に別れを告げる。でも、この別れは十八のときのものとは、違っていた。それは、ここを逃げ出すのではなく、夢見地区を受け入れることができた新たな旅立ちであった。

夢見地区金田屋食堂、そこで私はやっと故郷と向かい合うことができた。そして、十五で亡くなった友人に、これからの人生を完走することを誓うことができた。たった一晚のことではあったが、吹雪の夜、私の魂は浄化された。

黄色い旗

六月の晴れた日、佳奈美と私は、夢見地区が一望できる神社の上に立っていた。

あの吹雪の夜にはまだあった、金田屋食堂も門間商店も既になく、夢見地区は、電柱が所々にまだ残る原野の広がりになっていた。

カッコウ、ウグイスたちのさえずりの声が、それらの原野の上に響き渡っていた。

「隆は、こんなに山に囲まれたところで、生まれたのね」

「昔は、二万人もの人が住んでいて、住宅もびっしり建っていたんだけど……。こう原野ばかりだと、佳奈美には想像もつかないだろうな」

私はそう言いながら、ここに住んだ者にしか、昔の姿は見えないだろうと思っていた。

「あつ、あれが夕張岳ね。まるで夢見地区全体を見渡しているような山なのね」

佳奈美は、夕張岳を仰ぎながら私に言った。

あの吹雪の夜を境に、私の人生は変わった。時間に追われる日々の中でも、自分を見つめることができるようになり、道端の草木の変化も見えるようになっていた。

そして、何よりも私にとって大切な存在であった、佳奈美を失わずにすんだ。佳奈美と私は、来月式を挙げるようになっていた。

「それじゃ、旗出そうか」

私は、カメラバックから黄色い旗を取り出した。そして、マジックを取ると佳奈美に渡した。

「佳奈から書けよ」

「じゃ、最初に書かせてもらおうわ」

佳奈美は（夢見地区さん、夕張岳さんはじめまして。そして、これからもよろしく）と書いた。

「はい、次は隆」

私は（秀夫、夢見地区そして夕張岳よ、二人を見守ってください。ここで生まれたこと、誇りに思っています）と書き込んだ。

その後、木々の間に張られているロープの空いている所に、私たちの旗を結びつけた。

「これで、よし・・・」

私たちは、風に揺れる黄色い旗を暖かな気持ちで見ている。

その後、私は佳奈美を金田屋食堂の跡地へ連れて行った。

「ここに、金田屋食堂があつたのね。わたしも、おばさんのラーメン食べてみたかったな・・・」

この春に取壊したばかりなのに、金田屋食堂の跡には、タンポポをはじめ野の花たちが咲いていた。

私は、それらの花を摘むと、まだ剥き出しになっていた基礎の上に置いた。そして、ひざまづき手を合わせた。佳奈美も私のそばに来て合掌した。

「秀夫さんね」

「うん・・・」

私は、心の中で秀夫に話しかけた。

「秀夫、俺の嫁さん連れてきたよ。今度夢の中で、スーパーパ口湖三人で一緒に走ろうな。俺、最後まで佳奈美と走るから。本当に、ありがとう……」

立ち上がり耳を澄ますと、夢見地区の声が聞こえてきた。鳥たちのさえずり、セミの音、蛙の合唱、そして風のざわめき。

ここで暮らした人々が去っても、夢見地区は沢山の生き物たちに囲まれていた。

私は、そのことに気づくと、急に嬉しくなってきた。そして、もう一度周りを見渡すと、前には夕張岳があり、後ろには神社の黄色い旗たちが、風に揺れていた。

人々の生活の痕跡が消え原野に帰っても、夢見地区は独りではなかった。昔と変わらず夕張岳に見守られ、沢山の生き物たちに囲まれ、神社の黄色い旗からは子供達のざわめきが聞こえてくる。

そして、金田屋食堂も人々の思い出の中で語り継がれることだろう。その昔、夕張の夢見地区という炭坑町に、出会いと別れの舞台となった金田屋という食堂があったと……。

もう一度・あの海で

メール

「あの海で、二〇年振りに、俺たちの同窓会をやるう。七月二八日、有珠の海で待っている。リヨウジ」

私は、メールを読みながら「有珠の海、リヨウジ」と繰返していた。

そして、ウイスキーのグラスを手にとると、もう一度「有珠の海、リヨウジ」と繰返した。

「あの、橋本良治が、生きていた・・・」私は大きな声でそう言うと、グラスのウイスキーを一気に飲み干した。

橋本良治は、高校時代の友人であった。高校二年生のとき、私たちの父親が勤めていた炭鉱が閉山になってしまった。閉山後親たちは仕事を求め夕張を離れたが、私たちは卒業するまで夕張に残ることになった。

私たちは、炭鉱の宿泊施設を改造した学生寮から通学することになった。親元を離れて生活しているうちに、私たちの仲間意識は強いものとなっていた。その中心的存在がリヨウジであった。

リヨウジは、高三の夏休みの終わりに突然学校を辞め、私たちの前から姿を消してしまった。それからのリヨウジの消息は親も含め誰も知らなかった。それどころか、何年前のクラス会では「リヨウジは死んだらしい」という話さえ出していた。

私は、英夫に電話した。リヨウジからのメールのことを話そうとすると、英夫のほうから

「雄一、今日、リヨウジからメールが来ていたんだ。七月二八日にあの有珠の海で待つて
いるって」と言ってきた。

高校三年生の夏休み、私たち五人は有珠へキャンプへ行つた。山育ちの私たちにとつて
は、海でキャンプするのは初めてであつた。

「英夫、どうする。有珠へ行くのか」と私が尋ねると

「うん、どうしようかな・・・」と英夫は電話の向こうでためらっていた。

「俺は、このメールが本当にリヨウジからだつたら、行くことにする。それにあの時の仲
間で集まれることなんて、そんなにないしなあ。だから英夫も予定空けておいてくれ
よ。なあ・・・」私は念を押すように言った。

リヨウジは、あのときの仲間全員に、同じ文面でメールが葉書を出していた。はじめ
は、いたずらかもしれないと思つたりもしていたが、全員に連絡をよこしたのだから、私
たちはリヨウジに違いないと確信していた。

こうして、私たちは七月二八日に二〇年振りに有珠の海に集まることになつた。

心の高ぶり

私は、新千歳空港で神戸からやって来た朋子と待ち合わせると、車で有珠へと向った。はじめの頃は、渋っていた仲間たちも七月二八日が近づくにしがいい、頻繁に連絡を取合いい、気持ちの高まりを隠せないほどになっていた。

「全く、リヨウジはやってくれるわね。二〇年振りに音信があつたと思つたら、人の都合も聞かず、有珠の海で待っているなんて・・・」

朋子はそう言つた後笑い出した。

私も笑いながら「本当だよな。何の連絡もないし、やっぱり死んでしまつたのかと思つていたら、七月二八日に有珠で待っているなんて・・・」と言つた。

「この二〇年、どこで何をやっていたんだらうね・・・。誰にも連絡もせず・・・」

「俺、今でもリヨウジが学校辞めた日のこと覚えている。誰にも相談せず、勝手に全部決めてしまつたもんな・・・」

あの頃、私たち五人はいつも群れていた。その中心にリヨウジがいた。親たちが町を離れた後も、私たちは寮生活を送っていた。

はじめの頃は、不安よりも親元を離れて生活できる開放感のほうが大きかつた。だが、毎日のように在校生が転校していくと不安になつてきた。

授業中、教室の窓からは、沢山のトラックが荷物を積み走り去つて行くのが、毎日のように見られた。ある日、普段の倍以上ものトラックが道路を走つて行くと、先生も生徒たちも窓から目を離すことができず、授業が中断してしまつたことがあつた。

そんな不安定さをかかえた当時の生活の中で、私たちはいつのまにか新しい家族になっていた。私たちの絆はいつまでも続くものと思っていた。だが、リヨウジは高三の夏休み最後の日に、退学届を学校の郵便受けに入れると、閉山で疲弊しきった町を出て行った。あの日は台風が通過し朝から激しい雨が降っていた。夜になりリヨウジが消えたことに気づいたとき、私たちは何かの間違ひではないかと思っていた。

「私もあの日のこと一生忘れないわ。まさか、リヨウジがあんな形で私たちの前から消えるなんて思ってもみなかったも・・・」

「俺もこの二〇年、あの頃を思い出すと、必ずリヨウジのことを考えていた。あいつが何故、あの夏に急に学校を辞め、町を出て行ったのか・・・」

「そうだよ。原因なんてわからないし」 朋子もそう言った。

再 会

それから一時間ほどして私たちは有珠の海水浴場に到着した。駐車場は夏休みに入ったこともあり混み合っていた。

「有珠の海たつて、リヨウジどこにいるのかしら」

朋子は車を降りるなり言った。

「岩だよ、テントを張った場所に大きな岩があったろう。あの岩だよ」

「だってあれから二〇年も経っているのよ。岩だってあのままあるのかどうか」

「大丈夫、去年室蘭での仕事の帰りにここに来てみたんだ。そのとき、あの岩探しておいたから」

去年の秋、私は仕事で一週間ほど室蘭に来ていた。札幌へ帰る途中、急に有珠の海が見たくなり、ここへ来たときがあった。季節はずれの海水浴場は、人影もなく、どこか祭りの後のような淋しさが漂っていた。

私は、リヨウジたちとキャンプをしたあの夏の日を思い出していた。あの頃、私たちは相手のことは何でも知っているつもりであった。まだ、将来のことも、人生のことも何も見えていなかったが、皆と一緒にいるだけで心が満たされていた。あんなに誰かと心が繋がっていたことはなかった。

私にとって、あの夏の日は二〇年前の思いではなく、今という時間のすぐ隣にいるもう一つの現実であった。

砂浜では学生たちが遊んでいた。私は、朋子とあの岩へ向って歩き出した。

「リヨウジ、昔のままかな」

私は歩きながら朋子に言った。

「リヨウジ、結婚して子供もいるのかしら・・・」

朋子はその頃リヨウジが好きだった。だが、気持ちを伝える前に、リヨウジは皆の前から消えてしまった。

しばらくして、私と朋子は立ち止まった。そして顔を見合わせた。

あの岩の同じ場所には、真新しいテントが二張張られていた。

「まさか・・・」と朋子がつぶやいた。

「きつと、リヨウジだよ」私は朋子に言った。

そして、私は「リヨウジ」と叫びながら、テントに向かい走り出した。

テントからはリヨウジが出てきて、私たちの姿を見つけると、同じように叫びながら手を振っていた。

「勇一、朋子、良く来てくれたなあ・・・」

二〇年後の花火

その夜、私たちは二〇年振りに有珠の海で再会した。リヨウジ、英夫、朋子、陽子そして私と五人が揃った。

テントなどは全てリヨウジが用意をしてくれた。それどころか、食べ物から飲み物までもリヨウジが手配してくれていた。

「リヨウジ、何から何まで全部用意させて、悪かったな」と英夫が言った。

「なんも。俺こそ皆にこうして集まってもらって・・・。俺、本当にうれしいよ。ありがとう・・・」

そう言いながらリヨウジは皆に頭を下げた。

私たちは、それぞれのグラスにビールを注ぐと乾杯をした。その後、あの頃のように、皆で焼肉をつつつきながら輪になって座っていた。

はじめのうちは、それぞれが当たり障りのない話題について話をしていた。ところが、朋子が遂に口火を切った。

「リヨウジ、あんたどうじて急に学校止めて、皆の前から黙って消えたのよ。私、いや私たちこの二〇年間、そのことばかり考えさせられてきたんだから」

「そうよ。リヨウジ、今日はこうして皆で集まったんだから、ちゃんと説明しなさいよ」
陽子もリヨウジに詰め寄った。

それまでの和やかさが、一瞬にして消えてしまった。皆がリヨウジが何を話すのかを注目していた。

でも、リヨウジは黙って炭火を見ているだけで、何も言葉を出さなかった。
そんなリヨウジを見かねて私は言った。

「まあ、まあ、そんなに何もかも問い詰めなくても。こうしてリヨウジも生きていたんだから、なあ、朋子、陽子・・・」

「だめよ。ちゃんと話してくれなくちゃ。だって、あの頃私たち、家族だったんだから」
リヨウジは陽子が言った「家族」という言葉に敏感に反応した。リヨウジの口からやっと言葉が出た。

「俺、そのことを皆にちゃんと話そうと思つて、ここに來てもらつたんだ。だけど、今日でなく、明日の晩にしてみらえないか。なあ、たのむよ、朋子、陽子……」

「リヨウジ、あんなメール一つで、俺達が、今日ここに來るなんて本気で考えていたのか」英夫にしてはめずらしく真剣に言つた。

「俺、色んなことがあつて、今まで皆に連絡しなかつたけど、それでも、皆は必ず來てくれると思つていた。あれから、随分時間は過ぎてしまつたけど、俺達のあの友情はいつまでも続くものだと思つていた。俺、皆に会えなかつた分、あのときのままの気持ちでずっと皆のこと思つていたから……」

私は今リヨウジが言つた友情という言葉に心が動かされていた。私は、この二〇年、リヨウジはとうにあの頃のこととは忘れ去つたものだと思つていた。

なのに、今リヨウジの口からは「あの頃の俺達の友情」という言葉が自然に語られていた。三〇代後半になって、これほど熱く「友情」を口にする事ができるなんて。

私たち四人は、リヨウジのこの言葉を聞いた瞬間、私たちを長い間隔てていた時間の壁が崩れて行くのを感じていた。

その夜、私たちは二〇年前と同じように、浜辺で花火を打上げた。この二〇年という時の流れを一瞬の閃光により埋めるかのように、私たちは花火に夢中になつた。

翌朝、十時頃目を覚ましテントから出てみると、リヨウジと朋子が海辺で遊んでいた。空は晴れ渡りとても気持ちの良い朝であった。

私は二人の背後に静かに近づくと「こらっ」と叫んで驚かした。

二人ともびっくりすると、同時に私に海水を浴びせてきた。

「おい、よせよ。着替持ってきてないんだから」と私が言うと「何言ってるのよ。おはようの挨拶も忘れ、人を脅かすなんて」と朋子がやり込めてきた。

その後、私たち三人は砂浜に座り込み波の音を聞きながら、遠くの船を見ていた。こうしてリヨウジと一緒に船を見ているなんて、私は不思議な気持ちになってきた。それでいて、心はとても満たされていた。

しばらくして陽子がやって来ると

「ねえ、皆でボートに乗らない」と言った。

するとリヨウジも

「そりゃいいなあ。英夫も呼んできて一緒にボートに乗ろう」と弾んだ声で言った。

私たちは、二艘のボートに分けて乗った。リヨウジは朋子と英夫と一緒に、私は陽子と二人でボートに乗った。

二艘は、並んで少し沖まで出た。多少波が出てくると、二艘は離れてしまった。

私は、リヨウジたちを見てみると、あの夏に帰ってきたような気持ちになっていた。

今、私たちを照らしているこの陽射しは、あのときの陽射しなのかもしれない。私たちの目の前で、時空が崩れていく。

そのとき、陽子が遠くの水平線を見つめながら言った。

「雄一、この五人の中でリヨウジが一番昔のままかもしれない。昨夜リヨウジの話聞きながらそう思ったの。（俺たちの友情はいつまでも続くと思っていた）って聞いたとき私、ドキツとしたわ。だってあんな台詞、自然に言えないもの」

「俺も昨夜は同じことを考えていた。この歳になって友情なんて口にする事なかったものなあ」

「雄一、見てごらん、リヨウジのあの笑顔。本当に皆に会えてうれしいのね。私、昨夜悪いことしたような気がするわ。二〇年前、リヨウジにはちゃんとした訳があったのよ。今、私そんな気がするの・・・」

「俺もそんな気がする。それに、リヨウジのお陰でまた俺たち家族になれたような気がするんだ」

私と陽子はリヨウジたちのボートを見ながらそんな話をしていた。

夕陽

私たちは、一日中遊びまわり、夕方テントで休んでいた。昨夜の寝不足もあり、皆寝息を立て熟睡していた。どのくらい時間が過ぎた頃だろうか、リヨウジの声で目を覚ました。

リヨウジはテントの入り口を開けると

「おい、皆起きろよ。夕陽だよ、夕陽が見えるんだよ」と言った。

「夕陽・・あつそうだ。あのとき初めて海に沈む夕陽を見たんだっけ・・」

私は、リヨウジが言った「夕陽」の意味を思い出した。私たちは周囲を山に囲まれた炭鉱町で暮らしていた。だから朝日も夕陽も山から登り山に沈むのしか見たことがなかった。

あの夏休み、私たちは初めて海に沈む夕陽を見ることができた。山に沈む夕陽に比べ海で見る夕陽は大きなものであった。そして何より驚いたのは、浜辺を歩いていると夕陽も私たちの真横についてくることであつた。そして、走り出しても夕陽は私たちから離れることはなかった。

私たちはテントから出て、浜辺にたたずんでいた。誰もが「夕陽」の持つ意味を理解していた。

「よし、皆で少し、走ってみるか」と英夫は言うと言頭を切つて走り出した。

私たちも英夫に続いて走り出した。近くでキャンプをしている人たちは、五人ものいい大人たちが走っているのをものめずらしそうに見ていた。

私たちはしばらく走ると、砂浜に崩れるように立ち止まった。

「こんなに走るなんて、久し振りだな。俺たちまだまだ若いじゃないか」と私が言うと「私なんて、息が切れそうで・・・夕陽、あのと時と同じだったね」と朋子も言った。

「何だか、あれから二〇年もたったなんて、ウソみたいだなあ」英夫も息を切らしながら言った。

ちようどそのとき、私たちの目の前で、夕陽は水平線に沈みかけていた。夕陽は一段と大きくなり空を赤く染めていた。

「この真つ赤な色、懐かしいなあ」とリョウジが言った。

「何かの本に書いてあったんだけど、人生の目的は前世で別れた家族、恋人と会うためにあるという人がいるの。私ここに来て、私たちもそうなんだと思ったの」と陽子が言った。

「そうかもしれないな、俺たちもこうして二〇年振りに会うことができたんだから」と私も言った。

この水平線の赤い輝きは、二〇年前と何も変わっていないのだろう。私たちにとって、この二〇年は決して平坦で、短い道程ではなかった。

だが、有珠の海にとつては自然のみが持つ悠久なる時間の流れの一部にしか過ぎず、二〇年前私たちがここで過ごした時間などは、ほんの一瞬の束の間の出来事であつたのかもしれない。

私たちは、真つ赤に染まつた水平線をそれぞれの想いを抱きながら見つめ、辺りが暗くなるまで浜辺にたたずんでいた。

理由（わけ）

その夜も私たちは炭火を囲んでグラスを傾けていた。たった一日しか経っていないのに、私たちは昔に帰っていた。昨夜のように、リヨウジに対する緊張した雰囲気も消え去っていた。

そんな和やかさの中、英夫が言った。

「こうして集まつたんだから、皆で近況報告会をやるうよ」

「そうだなあ、改まってやるのも照れるけど、それもいいな」と私も賛成した。

陽子も朋子もリヨウジも賛成した。

「それじゃ、レディファストで朋子から頼むよ」と英夫が言った。

「えっ、私から、そうね・・・」

「朋子、もつたいぶるなよ。それとも俺たちに言えない過去でもあるのかよ」と私はひやかした。

「ないわよ。そんなの・・・。それでは、えーと、私は卒業してから、半年ぐらい札幌で働いていたんだけど、途中で親兄弟が引越して行った神戸へ行きました。そこで、昼は働きながら夜は看護学校で勉強して、何とか正看の資格を取って、今も現役の看護婦をしています。いつも仕事辞めたいと口癖のように言ってますが、いつのまにか古株でお局様と呼ばれるようになりました。二六のときに結婚して、息子が二人います。まあ、とりたてて言うほどのドラマチックな過去もなく、平凡な道を歩んでいる今日この頃です。こうしてリョウジとか皆に会えて本当に良かったと思っっています。以上」

「はい。次は陽子」

「えー、私は朋子と違って少しだけ色々ありました。昔のこととはいえ、息子の出産に関しては、皆さんに大変なご心配をおかけしました。お蔭様で正明も来年で二十歳になります。正明は中学を卒業すると人形師になるため福岡へ行き、今も修行に励んでいます。最初は猛反対したのですが、今は好きな道に進めて良かったと思っっています。私はまだ独身ですが息子も手を離れましたので、いい人はいないかと探しているところで。もし、皆さんに心当たりがあれば、是非紹介してください。それと、今日皆で夕陽を見たこと一生忘れません。以上です。」

「陽子、本妻はだめだけど、愛人でよければ俺考えてもいいぞ。なんせ、あのときもう少して俺が陽子の相手にされるところだったんだからな」私は冷やかしながら陽子に言った。

「はい、静かに。次は雄一。ところで雄一、陽子とのことはそろそろ白状したらどうだ」英夫までが私をからかって言った。

「そうだな、その節は陽子のことでお騒がせしました。何てことは嘘です。えーと、俺も少し色々あったけど、二年前に再婚しました。一歳の娘が一人いますが、一緒に風呂に入るのが一番幸せなときです。毎朝家を出るときにチュをしてもらうと、どんな疲れも飛んでしまいます。そんな訳で、マイホーム・パパにどっぷり漬かっています。まあ、やつと家庭人としても落ち着いて、地道に生きている次第です。リヨウジからメールが届いたときは、皆も同じだろうけど驚きました。でも、リヨウジが生きています。つてわかっただけでもうれしかったなあ。何かこの二日間で、俺たちの宝物を掘り起こせたよ。うな気持ちになっっています。まあ、そんなところかな。次は、玉の輿に乗った英夫の番といくか」

「えー、人もうらやむ玉の輿に乗った英夫です。俺は二五のとき、ひよんなことから小金持ちの一人娘とつきあい、孕ましたついでに結婚しました。人は玉の輿と言いますが、色々と気を使い結構大変です。でも最近はお房の尻にしかれ、お房の実家にしきられるのも息子共々将来の保証もありそれなりに、ま、いいかとも思っています。夕方少し振

りに浜辺を走って気持ち良かったです。考えてみたら今年になって一番一生懸命何かに打込んだのは今日のランニングです。相変わらずいいかげんな人間ですが、皆との友情だけはいつまでも大切にしたいと真面目に思っています。以上。えー、次はいよいよリヨウジの番だな」

「そうか、皆それなりに家族を持ち幸せに暮らしているんだ。良かったなあ。」リヨウジはそう言うとうグラスに入ったビールを一気に飲み干した。

「二〇年前、俺は、親を捨てるために、学校を辞め、あの嵐の日に町を抜け出した」リヨウジは低い声で、ハッキリとそう言った。

リヨウジの母親は、炭鉱町でも有名なほど教育熱心な親であった。リヨウジには四つ年の兄がいたが、兄は親の期待どおり二浪の末札幌の国立大学へ合格した。だが、その兄は私たちが高二の夏休みに海で溺死した。泥酔の状態で海へ入り死んでしまった。

リヨウジは続けて言った。

「俺は、今までの人生で一番悲しかったことは兄貴の死だった。兄貴は四つ下の俺をいつも遊びに行くときも嫌な顔もせず連れていってくれた。俺も小さいときから兄貴が大好きだった。おやじもおふくろもいないのは我慢できたけど、兄貴の姿が見えないといつも探していた。だから、兄貴が死んだときは、本当にまいったなあ。俺は、兄貴は、おやじとおふくろに殺されたと今でも思っている。あんなに好きなギターも取り上げられ、二浪までさせられて……。本当はあそこまでして兄貴は大学へ行きたくなかった

んだ。でも、優しすぎて親の敷いたレールから逃げることができなかつたんだ。無理して生きて、そして飲めもしない酒飲んで海に入ってしまった。俺は、あのときから親を憎いと思った。そして、兄貴がいた頃は俺のことなんかかまいもしなかつたのに、兄貴の変わりをさせようと急に夕張にいたらだめだから勝手に札幌の高校へ転校させようとしていたんだ。俺はそのとき決めたんだ。俺は絶対兄貴のようにには操られないと。だから、俺は、自分自身を救うために、親を捨てるために、皆にも黙って消えてしまつたんだ。ごめんな。一言も相談せずに・・・」

私たちは、リヨウジが親子問題でここまで追いつめられていたとは全く知らなかつた。十七歳のリヨウジがここまで追いつめられるのは、やはり相当のことであつたと思われ

た。

「リヨウジ、親に一度も連絡したことないの」と陽子が言った。

「一度だけ、二十歳の誕生日の夜におふくろに電話したことがあつたけど。でも（おまえは、家の恥だ）と言われ電話を切られてしまった。親も俺のことを捨てたのかもしれないとそのとき思ったなあ」

「夕張を出てから、どうやって生きて来たんだ」と英夫が言う

「あれから、学校はどうしたの」と朋子も言った。

「学校は、二十歳のときに、名古屋の定時制高校に入り直した。そして法律が勉強したくて、大学も何とか通信教育で卒業したよ。でも夕張を出てからどんな仕事をしてきたか

はあまり話したくないな。ただ、十七で世の中に飛び出したけど、身元保証してくれる大人は誰もいなかったし、あまりいい仕事にはつけなかった。でも今は、仙台で小さいながら、会社作って自分で何とかやっているんだ。それと、籍は入れてないけど、妻と呼べる人はいます。子供は残念ながらまだ授かりません。俺は、本当は、もつと早く皆に会いたかった。でも、皆に会うと、今まで意地張って生きて自分が崩れそうな気がして・・・。こうして、俺の呼びかけに応じて皆集まってくれて、本当にありがとう。」

私たちは、十七歳でたった一人で社会へ飛び出したリヨウジをいたわりたい気持ちで一杯になってきた。

この夜、私たちの友情は、再び固く結ばれた。

電 話

あれから、私たちはメールのやり取りをしながら、ネットの向こうで親交を深めていった。パソコンを持っていなかった朋子と陽子も皆とラインを繋げるために、ヘソクリをばたいてデスクトップのパソコンを買った。

毎日家族の顔を見るように、メールチェックをするのが日課になっていた。特に、陽子とは一日おきぐらいにメールの交換をしていた。リヨウジは会社経営が忙しいらしく、一月ほどメールが途絶えることがあった。

季節は再び夏を迎えていた。七月二八日に私は皆にメールを出した。

「あれから一年が過ぎ、また七月二八日を迎えました。高校生のあの夏の日、二〇年後にこうしてメールで皆と繋がっているなんて、想像もできませんでした。これもリヨウジのお陰です。ありがとう、リヨウジ。秋口に皆の日程調整がつけば、今度は夕張で泊りがけて集まりませんか。特にリヨウジは忙しそうだけど何とか調整してください。今回は僕が幹事を務めさせていただきます。」

この後、英夫、陽子、朋子からは、すぐにメールが届いたが、リヨウジからは何も連絡はなかった。私は、また会社が忙しいのだろうと思つて気にもかけていなかった。

夏も終わり秋風が吹きはじめた頃、仙台のリヨウジの奥さんから電話があつた。私は仕事から帰つてきてちょうど風呂に入つていたので、急いで服を着ると電話をかけ直した。

「もしもし、札幌の森山ですが、先程は入浴中で失礼しました。」

「こちらこそ、夜分遅くすみませんでした。実は、急なことでしたが、主人は、七月二八日に亡くなりました・・・」

初めて聞くリヨウジの奥さんの声であつたが、奥さんは、一言、一言噛み締めるようにリヨウジの死を伝えてくれた。

リヨウジは、七月二八日に海で死んだ。会社主催の海の家で、大量に酒を飲んだ後、沖に向かい泳ぎ溺死したそうだ。奥さん宛てのメモが後日発見されたが「自分にもしものことがあれば、生命保険は会社の負債にまわして欲しい」と走り書きしてあつたという。後

で分かったことだが、リヨウジの会社は負債が膨らみ身動きのできない状態であった。だが、警察の調べでは特に自殺をほのめかすものもなく、事故死ということになった。

電話を切った後、私は呆然としていた。予想もしなかったことに、泣くでもなく、ただ呆然としていた。

そんな私を見て、妻が「どうしたの」と言った。

私は「リヨウジが、死んだ・・・」と答えるのがやっとであった。

あの海で

九月のある日、私たちは再び有珠の海に来ていた。そして、あの岩の前に立っていた。

リヨウジが生きていたなら、夕張に集まるところであったが、今はリヨウジを偲び、もう一度あの海に来ていた。

私はリヨウジの死を陽子に知らせたとき

「陽子、正明君の父親がリヨウジだったこと、あいつに知らせたのか」と電話越しに聴いてみた。

「雄一、知っていたの」

「俺たち昔から皆そう思っていたよ。ただ、リヨウジがあんな形で姿を消したものだから、誰も陽子に聞けなくて・・・」

「そうなの、ずっと皆に気づかわしていたんだ。雄一、ありがとう。私も去年リヨウジと会ってから、時間かけてそのうち話そうと思っていたんだけど……。とうとう言わないうちに、また一人で勝手に遠くへ行ってしまった……。」

陽子はそう言うと泣きじゃくっていた。私は、そのとき、陽子はずっとリヨウジのことを好きだったのだと思った。

季節外れの海には、人影もなく、波の音だけが響き渡っていた。

「リヨウジの奴、とうとう一人で行ってしまったな」私がそう言う

「リヨウジはバカよ。酔っ払って海に入るなんて。いつも一人で勝手に決めてしまうんだから」陽子はそう言うと、声を上げて泣き出した。朋子も一緒に泣いていた。

「七月二八日に死ぬなんて、リヨウジ何を考えていたんだろうな……。英夫がぼつりと言った。」

私は、リヨウジは会社の負債を整理するために、自殺したのだと思っていた。リヨウジは、いつもギリギリまで自分の背中に、荷物を背負い過ぎたのかもしれない。苦しかったら、もっと早く投げ出せば良かったのに。そんなどうしようもない純粹さが、いつもリヨウジの人生の節目を支配していたのかもしれない。

七月二八日を選んだのは、偶然ではなく、リヨウジの私たちに対する友情の証だと私は思っている。そして、リヨウジは最後まで私たちと一番近い場所にいたかったのだとも。

私たちは、持ってきた花束を岩の前に置き、酒の栓を抜くと砂浜に注いだ。そして、それぞれの想いを込め合掌し、リヨウジと私たちの遥かなる青春に別れを告げた。

イ
タ
ヤ
カ
エ
デ
の
木
の
下
で

夢

ヒロは、校庭の端にあるブランコに乗っていた。校庭の遥か彼方には、夕張岳がくつきりと映えていた。隣のブランコには、十七歳で病死した三浦由希が乗っていた。二人の心を心地よい初夏の風が吹き抜けていく。

ヒロは、由希に会えるのが嬉しかった。由希はお気に入りの刺繍のついた白のブラウスとチェックのタイトスカートをはいていた。夢に出てくる由希はいつもこの服装であった。そして、決まってヒロに聞くのであった。

「ねえ、このブラウスとスカート私に似合うかしら」

「うん、とても良く似合うよ」とヒロは言う。

すると、由希は嬉しそうな顔をして

「退院したら、この服着て、ヒロと札幌へ行って、映画見てくるの」と言うのであった。これが、由希と交わした最期の会話であった。

ブランコに乗りながら、由希は何か口ずさんでいた。聞いているうちに、それが鹿島小学校の校歌だとヒロにもわかってきた。

「ヒロ、閉校式に来なかったの。私ずっと玄関で待っていたのに……」

由希は揺れるブランコから大きな校舎を見ながら言った。

「由希、ごめん。どうしても仕事の都合がつかず来れなかったんだ……」

ヒロは少し後ろめたい気持ちで言った。

「そうね、仕事があつたんじゃ仕方ないわね」

由希はぼつりと言った。

その後、ヒロと由希は楽しそうにブランコに乗っていた。右手には、樹齢百年を越えるイタヤカエデの木が風にそよいでいた。そしてバックネットの向こうの小山には、大夕張神社が建っていた。それらの中心で鹿島小学校の校舎は、初夏の陽射しの中で輝いていた。

その日ヒロは、一日中忙しく営業をこなし、最後の納品を終えたときは、十時を過ぎていた。今の会社に来てから五年が過ぎたが、持ち前の頑張りで営業所を任されるまでになつていた。大手事務機の系列の下請けで従業員十人ほどの小さな会社ではあつたが、ヒロにとっては、はじめて自分の裁量で仕事ができる職場であつた。

仕事帰り、ヒロはコンビニでビールと弁当を買い、マンションへと帰った。いつものように暗い部屋に帰ると照明をつけ留守電を確認した。今日はメッセージが入っていなかった。妻と別れ一人娘の有紀を手放してから五年が過ぎていた。

シャワーを浴びた後、ヒロはビールを飲みながら、パソコンを立ち上げていた。まだ買ったばかりのパソコンであつたが、プロバイダーとの契約も済み、昨日からインターネットに接続できる環境になつていた。

二本目のビールを飲みながら、ぼんやりとプロバイダーのホームページを見てみると、由希の顔が浮かんできた。小学校の頃から同じ炭住で育ち、気がつくといつも側にいた。中学校に通い出した頃は気恥ずかしさもあり、由希を避けたこともあった。だが、同じ高校に入りクラスが一緒になると、また幼馴染に戻り、一緒にいることが多くなってきた。

高二の夏休みに由希が入院すると、ヒロは、はじめて由紀のいない日常に淋しさを感じていた。ヒロにとっていつしか由希が初恋の人になっていた。ヒロは、サッカーの部活の帰りに、由希の病院に立ち寄るのが日課になっていた。

そんなことを思い出しているうちに、検索エンジンに「大夕張」と打ち込んでいた。ヒロにとって「大夕張」は、故郷であるとともに、由希につながるものであった。検索結果二件の表示があった。一つは夕張市のものであり、もう一件は「ふるさと大夕張」とあった。

ヒロは「ふるさと大夕張」にアクセスすると引き込まれるようにホームページを見ていた。子供の頃から見慣れている懐かしい街の写真が沢山収められていた。そして、ヒロが出席できなかった「鹿島小学校」の閉校式の模様も載っていた。閉校式には予想を上回るほどの沢山の卒業生たちが集まっていた。ヒロは、食い入るようにそれらの画像を見ていた。

出会い

正男は夕食が終わり子供たちが寝る時間になると、居間のソファを立ち上がった。「ちよつと、パソコンやるから」と妻の良子に言った。

良子は、にやつとすると

「今晚も、愛しの君と徹夜ですか」と答えた。

正男が「ふるさと大夕張」のホームページを始めてから半年あまりが経った。始めの数ヶ月は、アクセスする件数も少なかったが、閉山前の活気のある頃の大夕張の写真を掲載した頃から、アクセスが増えはじめ、まもなく五〇〇〇件に達しようとしていた。それに伴い、メールも多く寄せられるようになっていた。このホームページを通じて今でもふるさとなつながつているようで、正男にとっては、家族とともにかけがえのないものになつていた。

正男はホームページを開くと、掲示板の書き込みを見ることにしている。ここ数日書き込みはなかったが、今夜は一件寄せられていた。

このHPを見つけたのは、先週でした。まさかと思ひながら「大夕張」の三文字を検索エンジンに打ち込んでみました。ホームページを発見したときは驚きました。今日は少し落ち込んでいましたが、懐かしい大夕張の写真を

見ているうちに、元気になってきました。これからも、時々書き込ませていただきますので、よろしくお願い致します。

「このホームページが同郷の人に喜ばれている」正男は、読み終わると嬉しくなってきた。そして、投稿者のアドレスにメールを送った。

「杉田さん、掲示板への書き込みありがとうございます。新しい仲間が増えるのは、嬉しいものです。どうぞこちらこそよろしく願います」

その後、正男は新たに入手した写真をアップさせる作業に取りかかった。一時間ほどして作業が完了した頃、一通のメールが届いた。記録を見ると先程メールを送った杉田宏行からであった。

「飯島さん、いつも懐かしいHPをありがとうございます。そして拙い投稿にも応えていただきありがとうございます。できれば、一度お会いして、大夕張に対する飯島さんの熱い思いなどを聞かせていただければと思うのですが、いかがでしょうか」

今まで寄せられたメールは、どれも励まし、感謝の内容であった。こうして「会いたい」という呼びかけは、初めてであった。正男はすぐに返信のメールをヒコに出した。「是非、お会いしたいです」

その週の金曜日に、二人は会うことになった。札幌駅北口のファーストフードの店の前で待ち合わせた。先にヒロが来て、飯島は二〇分ほど遅れて駆けつけた。二人はそのとき不思議な体験をした。初対面なのに懐かしさがこみ上げてくるのであった。今までこんなことは一度もなかった。あの夕張の山奥の炭鉱街で生まれ育ったというだけで、初めて会ったというのに、懐かしいのだった。

会話は、はじめから打ち解けたものだった。

「どうも、初対面なのに、どこかでお会いしたような気がしますね」ヒロがそう言う。「そうなんですよね。初対面の気がしませんね」と飯島も言った。そして続けて

「僕がホームページを作ったから、こうして直に大夕張の人と会うのは、杉田さんが初めてなんですよ。会うまではどんな人かと思って、少し緊張していたんですが。こうして会ってしまえば、本当、こう、懐かしいですね」と言った。

飯島は、ヒロより三才年下の三五才であった。話してみると、鹿島小学校では三年間重なっていて、校舎のどこかですれ違っていたに違いなかった。ヒロは色んな話をした後、飯島に尋ねてみた。

「どんなきっかけで、大夕張のホームページを作ってみましたか。僕は、ここまで大夕張に思いを寄せる人がいたんだと驚きましたよ」

「僕は、大夕張で十八まで暮らすことができなかつたんです。小学校の卒業式を待たずに、街を出て行ったんですよ。だから、中学、高校と過ごした人たちのように、同期会と

かの接点もないんですよ。僕にとつては、鹿島小学校だけが、唯一の拠り所だったんです。閉山で衰退していた大夕張が、ダムに沈むという話は知っていたんですが、鹿島小学校が閉校になると聞いて、自分なりに何かしなくてはと思い、それがこのホームページだったんです。そんなことで、いたって個人的に始めたのですが、これほどアクセスしてもらえるなんて思っていなかったものだから、自分でも驚いているのです」

飯島は、少し遠慮しがちにそう答えた。

ヒロは飯島の話聞いて、あれほどのホームページをつくりながら、気負いのない男だと思つた。また、飯島は、大夕張を去ることになつたいきさつを次のように話した。

飯島の父親は、坑内で採炭夫をしていたが、立て続けに二度大きな事故に巻き込まれた。どれも幸いに、小さな怪我ですんだが、母親が「三度目は必ず命取りになる」と言つて、父親に炭鉱を辞めることを迫つた。そして、一家は大夕張を去つて札幌へと移り住んだ。

「でも、運命つて皮肉なものです。炭鉱の大きな事故で命を落とすこともなかった親父が、札幌へ住んで半年後、交通事故で亡くなりました。自転車に乗っていたら、後ろから車に轢かれてしまつて。もし、あのまま大夕張にいたら、交通事故だけにはならなかつたらうに思つたりして・・・」

ヒロは、飯島の話聞きながら、二人は、どこか似ていると感じていた。それは、大夕張に対する「こだわり」だった。飯島は全てを受け入れて、大夕張の記憶を辿ろうとして

いる。ヒロは、まだ大夕張の受け入れ方がわからずに、由希の佛を引きずり立ち止まっている。全く異なる方向性で大夕張にこだわっていると、二人は似ていた。

その夜、ヒロと飯島は遅くまで親交を深めた。夕張を出て以来、同郷の人間とこんな「大夕張」を語ったことはなかった。二人は、初めての出会いで、結び付けを深めていた。

再会

ヒロが飯島と会ってから一週間ほどすると、掲示板に鹿島中学校二六期会の同期会が夕張で開催されたことが書き込まれていた。大夕張神社にみんなで寄せ書きをした黄色い旗を結び付けてきたことも書かれていた。そして、最後に幹事の名前が連名で書いてあった。その中に、一人ヒロにとって聞き覚えのある名前があった。「三好明夫」どこか記憶の彼方で引つ掛かりを持つ名前であった。だが、その日は、それ以上思い出すこともなかった。

ヒロの会社が入っている雑居ビルの八階の窓からは、手稲山が見える。ヒロは、夕方疲れを癒すため、手稲山を眺めていた。

すると事務員の山口美幸が

「代理は、手稲山が好きなんです」と言ってきた。

「夕張の山の中で育ったものだから、山を見ていると落ち着くんだよ」とヒロは応えた。
「私は札幌育ちだけど、高校一年生のとき体験学習で、一度だけ夕張岳に登ったことがあるんですよ。とても綺麗な花が咲いていたのを覚えているわ」と美幸が懐かしそうに言った。

「そう、夕張岳に登ったことがあるんだ。僕も一度だけ登ったことがあったなあ」

美幸と夕張岳の話をしていると、ふと「三好明夫」の名がもう一度引つかかってきた。おぼろげながら「輪郭」が浮かんできた。そして、顔がはっきりと思い出されてきた。

ヒロが住んでいた炭鉱住宅の二つ向こうの棟に「三好明夫」は住んでいた。ヒロより四才年下で、ヒロが中学生になるまで良く一緒に遊んでいた。ある冬の日のこと、炭住街の子供たちで雪合戦をして遊んでいた。明夫はとても明るい男の子で、男兄弟のいないヒロにとっては弟のようでもあった。みんなでかまくらを作った後、二つの組に分かれて雪合戦を始めた。合戦中に、春先になって気温が上がったこともあり、屋根に積もった雪が一斉に滑り落ちてきた。その雪山の下に明夫は生き埋めになってしまった。ヒロは、すぐに大人を呼んで来るように下級生に言うと同時に、雪山を掘り起こした。ちょうど、大人たちが駆けつけたとき、明夫は掘り出された。

「今ごろは、屋根の下で遊んだらあぶねえって、いつも言われてるべえ。この馬鹿たれどもが」

近所のおじさんたちは、ヒロたち六年生を叱りつけながら、明夫を抱きかかえていた。明夫は、初め意識を失っていたが、大人たちに頬を叩かれたりしているうちに、目を開けると大きな声で泣き出した。

その日の夕方、ヒロは一番方で坑内から上がってきた父親の後ろについて、明夫の家の玄関に立っていた。父親は持ってきた一升瓶を明夫のお父さんに差し出すと「三好さん、今日は本当に済まなかったなあ。この馬鹿息子のために、明夫ちゃんともないことになるよ」

ヒロの父はそう言うのと深々と頭を下げた。そして「おまえも、ちゃんと、謝れ」と言いながらヒロの頭に拳骨を加えた。

「屋根の下は危ねえって、いつも言われていたべえ。それを小さい子供まで連れて。明夫ちゃんに何かあつたら、おまえの頭割ったぐらいですまないべえや」

ヒロの父がそう言うのと又ヒロの頭に拳骨が下りた。ついにヒロは泣き出した。

そのとき「おじさん、ヒロ兄ちゃん叩くのもう止めて。いつも俺のこと一緒に遊んでくれるんだから」と言つて明夫も一緒に泣き出した。

その後、ヒロが中学に上がると、もう小学生の明夫たちとは一緒に遊ぶことはなくなつていた。そして明夫が中学生になった頃、炭鉱で大きな事故があつた。明夫のお父さんも、その事故に巻き込まれ大怪我をしてしまった。その怪我がもとで、もう坑内で働くこ

とが出来ず、一家は明夫の父の出身地である岩手県へと引越して行った。それ以来、ヒ口も明夫のことを思い出すこともなく月日は流れていった。

その夜、ヒ口はマンションへ帰るとホームページに掲示板へ「三好明夫」君は、昔近所にいて一緒に遊んだ「明夫」君ではないかと投稿した。それから、二日ほどすると明夫から直接ヒ口のアドレスにメールが届いた。

「掲示板を読んで感激しました。私のことを覚えていてくれたのですね。いつもホームページを見ながら、掲示板に投稿している杉山さんて、子供のころ一緒に遊んでくれたヒ口兄さんではと思っていました。ただ確信がないものですから、こちらから連絡を取ることありませんでしたが。本当に、嬉しいです。私も今は千歳に住んでいますので、ぜひ、お会いしたいと思います」

やはり、子供の頃一緒に遊んでいた明夫であった。ヒ口も「すぐにでも、お会いしたいです」とメールを出した。

二人はススキノの居酒屋で待ち合わせた。

約束の時間より早くヒ口は店に入り、先にビールを飲んで待っていた。小学生の明夫の顔が、今もはつきりと思い出すことができる。明夫も父親の坑内事故さえなければ、大夕張を去らずにすんだものかと思っていた。

しばらくすると店員の「いらっしやいませ」という声に釣られ入り口を見ると、スーツ姿の男性が店に入ってきた。良く目元を見ると、明夫であった。ヒロが気づくと同時に明夫も「にこっと」微笑みかけた。そして、ヒロのところまで歩んでくると「どうも、お久しぶりです」と言った。

「いや、どうも。目元がお父さんにそっくりだから、すぐにわかったよ」とヒロも言った。

二人は、椅子に腰掛けると、ビールで乾杯した。

「こうして、明夫君と再会して、一緒にビール飲んでいるなんて、何か夢みたいだなあ」ヒロは感慨深げに言った。

「僕もヒロさんに会えて嬉しいですよ。いつもホームページ見ながら、あの子供の頃遊んでくれたヒロ兄さんかと思っていたんだけど・・・」と明夫も上ずった声で言った。

「僕も掲示板で、三好明夫という名前を見た時、何故かこう引つかかるものがあつてね。そして、あの時一緒に遊んで、雪山に埋もれた明夫君ではと思つてね・・・」

「ああ、あのこと今でも良く覚えていますよ。今から思えば、一緒に遊んでもらいながら、こつちこそヒロさんに迷惑かけてしまつて」

明夫は、照れ笑いを浮かべながら言った。

「いや、そんなことはないよ。僕は姉しかいなかったから、本当は弟が欲しくつて。だから、明夫君と気が合ったのかもしれないなあ。明夫君はいつ北海道に帰ってきたの」

「親父には、岩手が帰るべき故郷であつたように、僕にとつては、北海道が帰る場所だつたんですよ。中学の時に大夕張を離れたときは、いつも帰りたくて仕方がなかつたなあ。だから、仕事が見つかり、五年前に北海道へ帰ってきたんです」

その日から、二人は頻繁にメール交換をするようになり、互いに良き友人となつていった。

暑い日

八月のある日、ヒロは大夕張へと車を走らせていた。ホームページのチャット仲間鹿島小学校へ集まることになつたからだ。

ここ二年ほど大夕張には帰つていなかった。大夕張を出てから二〇年も経つのに、未だにあの街に行くときは、「帰る」という言葉が自然に出てくる。帰る機会は、何度があつたが、帰る度に朽ち果てて行く街を見るのが、正直なところ重たくなつてきていた。帰りたいのに、帰れない。そんな繰返しであつた。昨夜、チャットで飯島の「明日都合の良い方は、午前十時に鹿島小学校に集まりましょう」と呼びかけがあつたとき、「皆で、一緒に帰れる」と思い、ヒロは迷わずに決めた。

清水沢を過ぎた辺りから、懐かしい風景が広がってきた。南部にさしかかった頃には、ヒロの内には、十七才の自分が蘇ってきた。岳富町から鹿島小学校の校舎が見えてくると、ヒロは鼻の奥につんとくる痛みを感じ、涙腺から独りずに涙が出てきた。

この街には、由希が住んでいる。

ヒロは二五のときに結婚したのも、別れた妻が由希に似ていたからだだった。しかし、幾ら似ていても心を繋げることはできなかった。むしろ、由希を追い求めている気持ちの大きい分、妻の心はヒロから離れていった。結婚した翌年、娘が生まれた。偶然にも、由希が生まれた日と、同じ誕生日であった。娘には、有紀という名前をつけた。

由希が街の炭鉱病院に入院する前

「私、元気になって、退院できるかしら」とヒロに言った。

「何言ってるんだよ、元気になるに決まっているんじゃないか。上手くいけば、修学旅行だって、一緒に行けるさ」

「私が元気になれば、ヒロ嬉しい」

「当たり前だよ、嬉しいに決まっているじゃないか。おじさんだって、おばさんだって喜ぶに決まっているさ」

ヒロは力を込めて言った。

すると由希は少しうつつむき加減で

「じゃ、私頑張るから、大人になったら、ヒロのお嫁さんにしてくれるって約束して」と突然言った。

ヒロは、驚きながらも由希の目をじっと見て

「わかった。その代わり由希も約束しろ、必ず元気になって俺の嫁さんになるって」と言った。

「うん」

由希はそう言うと、ヒロの前に小指を差し出した。そして、ヒロの小指に絡ませてきた。

小学校のイタヤカエデの木の下で、二人は今というときを確かめるかのように、いつまでも指切りをしていた。

ヒロが、鹿島小学校に着くと、先に来ていた明夫が車から降りてきた。

「明夫君早いね」とヒロが言うと

「千歳からだど、以外と近いんですよ。今日は同級生も一人連れてきたので」と明夫は言い、隣には、女性が立っていた。

「はじめまして、明夫の同級生の田口君江といいます。まだ、パソコン初心者ですが、大夕張のホームページはちよくちよく覗いています」

君江ははにかむように言った。

「ヒロさん、君江は中学校で同じクラスだったんですよ。二六期会の集りでは、一緒に幹事をやってもらって」

「どうも、杉田広行です。明夫君とは近所で、子供の頃は良く一緒に遊んでいたんですよ。飯島さんのホームページのお陰で、再会することができて・・・」

三人の話が弾んできた頃、飯島の車が校門の坂を登り、近づいてきた。

「遅れてしまい、すいません」

飯島は車を降りるなりそう言った。

「いや、僕たちもちよつと前に来たばかりだから」とヒロが言った。

「それじゃ、鹿島小学校から行ってみますか」

明夫がそう言うと、四人は、大きなガラスの扉を開けた。

「ひどい・・・」君江が声をあげた。

広い玄関のホールには、ガラスの破片が散らばっていた。まだ、閉校になって二年も経っていないのに、廊下、教室の窓ガラスが悪戯されほとんどが割られていた。

「俺達の学校をこんなにするなんて」明夫も声を荒げた。

廊下を歩くと、備品類も散乱していた。教室の中も荒らされていた。四人は、憤りと悲しみをこらえながら、それらの光景を見ていた。

展示室に入って行くと、掲示板には色褪せた写真が張られたままになっていた。飯島は、写真をじっと見ながら

「小学校一年のときの担任だった三好先生がいる」と言つて指をさした。

「あつ、六年生のときの担任だった堀田先生だ」明夫も大きな声で言つた。そこには、若さに満ちていた恩師達が写つていた。

石炭を掘り出すために、沢山の男達が津軽海峡を渡り、大夕張にやつてきた。当初の鹿島小学校は校舎も小さく、膨れ上がる児童を受け入れることができず、午前、午後と二部制の授業をやつていたことがあつた。今の鹿島小学校の校舎は、最盛期の児童数に対処するために立てられたものであつた。夕張本町の学校に負けないほどの鹿島小学校の大きな校舎は、この街で暮らす人々の誇りであつた。その校舎が、今は荒れた姿になつていた。

飯島は、黒板の前に立ちチョークを持ち

「鹿島小学校は、まだ生きています。どうかもう傷つけないでください」と書いた。

ヒ口も「ここは、俺達の大切な場所だ。壊すな」と書いた。

君江と明夫もチョークを持ち書きはじめた。

「鹿島小学校は、私の宝物なの。だから汚さないで」

「俺達の、最後の我家、鹿島小学校」

それから四人は、鹿島小学校の思い出になるように、めいめい記念となる物を手にした。飯島は、チョーク箱を取り、明夫は、化石の標本を手にした。君江は給食用のアルミのお盆を手にとつた。

「このお盆何だかとても懐かしくて。帰ったら綺麗に磨いて机に置いておくわ」

ヒロは、理科室に散乱していた鉾石の標本の中から、紫水晶を見つけ出した。

「ヒロさん、綺麗な水晶ですね」と明夫が言った。

「うん、昔仲の良かった友達が、この石がとても好きでね。それで記念にこれを持ちかえろうと思つて」

「その友達の方、今はどうしているんですか」と君江が言った。

「さあ、どうしているかなあ。もう二〇年以上も会っていないからなあ」とヒロは答えた。

紫水晶は、由希の好きな石であつた。小学校三年の理科の授業で、始めて標本を見てから気に入ってしまった。

「ヒロ、今度おじさんと山へ行つたら、紫水晶取つてきて」とせがまれたことがあつた。この標本の水晶が、あるとき由希が見たものと同じとは限らないが、ヒロは大切に手に持った。

四人は、小学校を出た後、大夕張神社と呼ばれていた小山の上に立っていた。大きな栗の木には、ロープが張られ、沢山の黄色い旗がそれぞれの思いをつづりながら結び付けられていた。それらの中に、ひととき大きく「鹿島中学校第二六期会」と書かれた旗が風に吹かれていた。

明夫と君江は、旗の側へ行き結び目を直した。

「この二六期会の旗、目立つなあ」とヒロが言うと

「本当にこの旗、大したもんだなあ」と飯島も言った。

「凄いでしよう、これ、私達二六期生の自慢なんですよ」

君江は二人を見ながら嬉しそうに言った。

その日は、とても暑い日であった。外気は、三〇度を越えていた。

「大夕張って、夏こんなに暑かったっけ」

「日中は、結構暑い日がありましたよ。でも朝夕は涼しかったですけどね」

飯島はヒロに答えて言った。

「イタヤカエデの木陰で休みませんか。車にジューズ少し積んでいますから」

明夫は、顔の汗をシャツで拭いながら言った。

「今朝、妻が沢山サンドイツチを持たしてくれたのがあるんですよ。一緒に食べましょう」

「と飯島も言った。

「ちようど良かった。僕もクーラーボックスにビールを詰めてきましたから」

四人は下に降り車から飲み物などを持ってくると、イタヤカエデの木の下にシートを敷き、ビールで乾杯した。

「子供の頃、この木の下で良く遊んだなあ」

明夫が懐かしそうに言った。

「私も、この木好きだったなあ」

君江は、大きなイタヤカエデの木を見上げながら言った。

この街で生まれ育った子供達は、みんなこの木の下で遊んだ思い出を持っている。ヒロにとっても、イタヤカエデの木の下は、大切な場所であった。四人は、それぞれの思い出を抱きながら、子供の頃のように、イタヤカエデの木に包まれ、大夕張と共にときを過ごしていた。

交流会

その年の暮れ、ホテルの二階にある居酒屋に、ヒロ、飯島、明夫、君江の四人が呼びかけ人になって、「ふるさと大夕張」に思いを寄せる仲間たちが集まっていた。ホームページで呼び掛けたところ、二〇人の元住人達が集まって来た。

会場の手配は、君江が請け負った。小上がりの掘り炬燵のある部屋で落ち着いた田舎風の店であった。ほぼ定刻前に全員が集まった。ホームページの主催者である飯島は交通事情の関係で少し遅れてやって来た。

飯島が席に着くと君江の進行で会は始まった。

「それでは、予定している参加者の方が全員集まりましたので、これから、インターネットふるさと大夕張の第一回交流会を始めたいと思います。では、はじめにホームページの主宰者である飯島さんから一言お願いいたします」

会場には、世代を超えた年齢層が集まっていた。

「どうも皆さん初めまして、いつもお世話になっていいる飯島です。本日は大切な集りですから時間前に来ようと思つていたんですが、一番遅れてしまい申し訳ありません。お陰様で、ホームページも二日前にアクセスが一万件を超えることができました。始めた頃は、こんなに沢山の人に見てもらえるなんて思つていなかったものですから、本当、自分でも驚いているところです。僕自身は、小学校六年の時に大夕張を離れたものですから、同期会との接点もなく、大夕張の人たちとの接触もない状態で今日まで来たところです。でも、このホームページを始めたお陰で、こうして皆さんとお会いすることができ、本当に嬉しく思つています。僕にとつては、長い間鹿島小学校だけが唯一大夕張との接点だったんですが、これからは、今日集まってくださった十九人の人たちを接点に、さらに交流の輪を広げることができるような気がしています。本日は、集まってくださつて本当にありがとうございます」

飯島の挨拶が終わると、参加者は心を込めて喝采を送った。ここに集まった者たちは、飯島のこれまでの努力に、感謝の気持ちで一杯であった。飯島のお陰で、皆がネット上でふるさと大夕張を身近に触れることができた。現実の大夕張は、原野になってしまったが、ホームページの中には、みんなが子供の頃から慣れ親しんできた大夕張がまだ生きていた。

それぞれ、ここに集まってきた者達にとつては、同期会以外の形で、大夕張出身者の集りを持つのは、初めてであった。下は二八才から上は五三才までの年齢層が集まつてい

た。始めの頃は、どことなく緊張していたが、乾杯をした後会話を重ねる中で、すぐに打ち解けた雰囲気になった。

誰かが「何町に住んでいたんですかと」尋ね「栄町の二丁目だよ」と答えると「それじゃ、共同浴場のすぐ近くだ」周りの者が言い「知ってる、知ってる、あそこには、男ばかり三人の兄弟がいて、いつもおばさんに怒られていた・・・」という具合に、次から次へと話の輪が広がって行くのであった。そして、いつのまにか、旧知の仲のように親交を深めるのであった。

そんな和やかさの中、明夫は立ちあがり

「皆さん、お話も弾んでいるところですが、本日私の同期である長谷部君が、皆さんには是非聞いてもらいたいと、珍しいテープを持ってきましたので、どうぞ聞いてください」と言い、カセットレコーダのボタンを押した。

参加者は、どんな音が出てくるのかと注目していると、蒸気の声とともに機関車が動き出し、勢い良く走り出し、やがて汽笛の音とともに去って行き、列車の轟音が消えかけた頃、カラスの鳴き声が入っているものであった。

みんなには、この蒸気機関車が大夕張鉄道を走っていたものであることがすぐに分かった。当時は、バスに比べ鉄道の方が運賃が安かったので、ほとんどの人は、大夕張鉄道を利用していた。

テープの再生が終わると長谷部が話し始めた。

「今、聞いてもらったのは、大夕張駅から千年町方面に向け出発した大夕張鉄道の蒸気機関車の音です。汽笛の音とともに汽車が去った後にカラスの鳴き声が入っているのが味噌でして。当時の私は、中学二年でして、体重が今と比べ十五キロほど少なくて痩せていまして、何と大きなラジカセを抱えながら、汽車の横と一緒に走りながら録音したものです。そんな涙ぐましい努力をして録音した大夕張鉄道の音でした」

長谷部が話し終わると、大きな拍手が沸きあがった。

「いや、たいしたもんだ。本当懐かしいなあ」

「長谷部さん、もう一回聞きたいな」

「そうだ、もう一回大夕張のカラスの声も一緒に聞かなくちゃ」

そんなリクエストに応え、明夫はもう一度ラジカセのボタンを押した。

蒸気機関車の力強い音を聞きながら、みんなは、少年の頃の長谷部が大夕張駅構内で、ラジカセを抱えながら汽車の横を走っている姿を想像していた。

飯島は、蒸気機関車の音を聞きながら、参加者の顔を一人一人見て感動していた。小学校の卒業式を待たずに街を去った自分が、ヒ口、明夫、君江そしてここに集まってきた仲間たちを通じ、再び大夕張と繋がりを持てたことが嬉しかった。長い間渴望して手に入らなかったものが、今はここにある。そのことが、飯島の心を震わせていた。

遠く走り去って行く汽車の轟音と、汽笛の音を聞きながら、参加者達の想いは、遥かなるふるさとに注がれていた。

メール

再び春が訪れ、花たちが一斉に咲き始めた頃、飯島の元へ一件のメールが送られてきた。夕張市教育委員会からであった。

「問い合わせのあった鹿島小学校の解体工事の件ですが、今秋の十月に入札を行ない、早ければ十月下旬から工事が始まる予定です」

数日前飯島が、メールで夕張市に問い合わせたことに対する回答であった。

「ついに、鹿島小学校が解体される・・・」

飯島は、言い知れぬ淋しさでメールを見ていた。

飯島は、ふと亡くなった父のことを思い出した。飯島がまだ小学校三年のとき、学校近くの友達の家遊びに行ったことがあった。帰りに学校に寄り、ランドセルを取りに行けばよいと考えたが、そのまま家に帰ってしまった。ランドセルを忘れたことがあった。夕食を終え、明日の支度をしようとしたら、ランドセルを学校に置いてきたことを思い出した。両親にそのことをひどく叱られ、一人で取りに行くことになった。

はじめは、強気で歩いていたら飯島も、暗い校庭に差し掛かると、段々と心細くなりついには泣き出して立ち止まってしまった。

すると自転車で先回りしていた父が近づいてきて

「ばかたれが、ランドセル粗末にしたらだめだべ。暗いから父さんも一緒に行ってやる」と言い手を取りながら歩き出した。

そして、学校の帰り道父の自転車の後ろに乗りながら見た、星空の輝きがいつまでも記憶に残っていた。

飯島は、その夜ホームページの掲示板に、鹿島小学校の解体工事について書き込みをした。

ヒロは、一人で鹿島小学校の前に立っていた。ホームページで解体工事のことを知ると、急に鹿島小学校に会いたくなり、長沼町での仕事が済むとその足で大夕張へと向かった。昨年までは、何軒か残っていた建物も解体され、何も無い原野の中に鹿島小学校は建っていた。手入れのされなくなったグラウンドには、タンポポたちが黄色い花を咲かせ、その上を風が吹きぬけると、まるで海原のように波打っていた。何年か振りに見るタンポポの海であった。

一段と小さくなった街を歩くと、建物が解体された剥き出しのコンクリート基礎の周りにも野の花たちが咲いていた。そして、木々からは鳥たちのさえずりが聞こえてくる。ヒロは嬉しくなってきた。たとえ、人々が去り街の形が消えても、大夕張は独りではない。そのことに気付くと、少し気持ちが救われた思いがした。

三〇分程して、ヒロは大夕張を後にした。バツクミラー越しに鹿島小学校を見たとき、校舎が泣いているように思えた。沢山の子供たちに囲まれて街の歴史を刻んできた鹿島小学校にとつては、原野になってしまった大夕張を見ながら、独りで建っているのは、やはり淋しいのだろう。ヒロは、もう一度子供たちの声を聞かせてやりたいと、バツクミラーから消えて行く鹿島小学校を見ながら強く思っていた。

札幌駅の近くの居酒屋に、ヒロ、飯島、明夫、君江の四人は集まっていた。解体工事が始まる前に「ふるさと大夕張」の仲間で、鹿島小学校のお別れ会の企画を相談するためであった。

「とうとう、鹿島小学校もなくなってしまふときが来たのね・・・」

君江は溜息をつきながら言った。

「六月に仕事で長沼に来た時、鹿島小学校に寄ってみたんだけど、何だか寂しそうに見えるなあ」

ヒロはしょんぼり言うたビールを飲み干した。

「みんなで、感謝を込めてお別れ会をやりたいなあ」

飯島も頷くように言った。

その後、明夫から、日時などについて提案があった。

「まず日時は、九月ぐらいが良いでしょうか」

「九月だと子供の学校際の行事が重なるといけないから、十月の方が都合がいいんだけど」

「飯島さんと同じく、十月が良いなあ。九月だと学校関係の納品が多くて」とヒロも言った。

「君江はどうだい」

「私も、十月の方が動きやすいわ」

「それじゃ、日程はあまり寒くならない十月三日の日曜日にしますか。場所はとうしゅう」

「イタヤカエデの木の下の方がいいわ。だって、あそこは、みんなの思い出の場所だから」
「君江さんの意見に賛成だな。そして、もし、雨が降ったら体育館を使わせてもらおうよ。そうすれば、雨天決行で案内ができるよ」

「そうだね。飯島さんの意見で決めよう。天気が良ければ、イタヤカエデの木の下の、雨の場合は、体育館の中ということ。後は、当日何か用意するものはないでしょうかね」

明夫は、三人の顔を覗きこみながら言った。

「明夫君、できれば会の前に玄関とか廊下のガラスきれいにして、掃除してやりたいなあ。ホームページで呼びかける時、参加者に掃除用具を持参してもらい、みんなで取りかかれれば、そう時間はかからないと思うけど」

「ああ、ヒロさんのいまの提案いいなあ。もう一度みんな鹿島小学校きれいにしてあげて、お別れ会なんてのもいいですね」

「私も賛成。あのままじゃ、鹿島小学校可哀相だもの」
飯島と君江も賛成した。

その夜、明夫は、ホームページの掲示板に書き込みをした。

鹿島小学校の解体工事が早ければ、十月の末にも始まる模様です。最後にもう一度鹿島小学校の勇姿を見ながら、感謝を込めて、次の内容でお別れ会を行ないたいと思います。沢山の大家張子の参加をよろしくお願いいたします。

と き 十月三日（日）午前十一時鹿島小学校前集合

と ころ イタヤカエデの木の下

持 ち 物 焼肉で歓談しますので、各自飲み物、食べ物持参のこと。

（炭、鉄板などは用意します）

その他 会の始まりの前に、鹿島小学校の掃除をしますので、鹿島小学校の思い出と一緒に掃除用具を持参してください。

お別れ会

外は、叩きつけるように激しい雨が降っていた。ヒロは、インターネットで明日の天気予報を見ていた。

「明日も雨が。せつかくのお別れ会なのに・・・」

そのとき、明夫から電話がかかってきた。

「ヒロさん、まいったね、この天気。明日も大雨みたいです。お別れ会どうしましう」

「明日は、どんな嵐になっても、行かなくちゃ。最後に集まってみんなの顔を見せて、掃除して、ちゃんと鹿島小学校を送ってやらなくちゃ。天候によっては、集りが悪いだろけど、予定どおり雨天決行でいこう。もし、明日中止したら、俺たち一生後悔するよ」

「そうですね。明日を逃したら、もうみんなで集まる機会ないですからね。僕はこれから参加予定者全員に、明日・荒天でも・決行とメール出します。それじゃ、ヒロさん、明日鹿島小学校で・・・」

「ああ、ご苦労さんだけど、明夫君もう一頑張り頼むよ。明日は、みんなで上手いビールを飲もう。それじゃ」

電話を切った後ヒロは「ふるさと大夕張」のホームページにアクセスした。そして、昭和四〇年代の鹿島小学校の写真を、もう一度拡大して凝視した。かつて、この地に石炭で栄えた街があったという、人々の生活の痕跡を留める唯一の建物になってしまった鹿島小

学校。閉山後街は衰退し、帰る度に侘しさを感じていたが、鹿島小学校の前に立つ時だけは、その大きな校舎を見ると心が救われた思いがした。

それは、校舎全体に長い年月を重ね、子供たちの歓声とそれを包み込む大人たちの生活の躍動が刻み込まれていたからだだった。この場所は、かつてのふるさとに一番近い場所であった。

嵐の中、ヒロはいつまでも鹿島小学校の画像を見ながら、グラスを傾けていた。

翌朝、飯島は午前六時に家を出た。昨夜から気持ちが高ぶり熟睡できず、空が明るくなり出した頃起き出した。外は風こそ止んだものの、強い雨が降っていた。八時前には、鹿島小学校に着いた。清水沢を過ぎた頃から雨は小降りになり、大夕張に入ったときには、雨は止んでいた。

飯島は、車から降りると空を見上げた。少しずつ雲が薄くなっていくのが分かった。飯島は、車から画用紙に描かれた一枚の絵を取り出した。これまでも、何度か一緒に来たことがある娘の真由美が描いた鹿島小学校の絵であった。

「真由美、明日お父さんたちホームページの仲間で鹿島小学校のお別れ会やるけど、一緒に大夕張へ行こうか」

「えっ、鹿島小学校なくなってしまうの」

「うん、もうじき、壊されてしまうことになったんだよ。それで、明日みんなが集まることになったんだ」

「明日は、友子ちゃんのお誕生会に呼ばれているの。お父さん、私、鹿島小学校の絵を描くから、持って行ってくれる」

飯島は、娘の描いた絵を、玄関のガラスの内側にしっかりとテープで貼り付けた。そして再び車に戻ると、雲の切れ間から薄日が射していた。

「やった、晴れてきたぞ、よし」

飯島は嬉しくなり声に出すと、車から、ほうきとダンボールの箱を取り出し、再び校舎の中に入っていった。

ヒロは、エリック・クラプトンのCDを聞きながら鹿島小学校へと車を走らせていた。自分が一番乗りだと思い、校門の坂を登って行くと、玄関前に飯島の車が止まっているのが見えた。車を降り玄関を開けると、飯島も振り向いた。

「あっ、ヒロさん、おはようございます」

「今日の一番乗りは僕だと思って来てみたら、飯島さんもう来ていたんだ。それに、掃除までして」

ヒロは少し驚いたように言った。

「何だか今朝早く目が覚めてしまって。それで、八時ぐらいにここに来てしまった」

「やっぱっぴり、僕も昨夜からあまり眠れなくて。それじゃ、ビールでも飲みながら気合入れて掃除しようかな」

ヒロは車から缶ビールとほうきを取り出し、頭にタオルを巻きつけると、飯島の前に再び現れた。

飯島とヒロが玄関のガラスの破片を集め、掃除が終わった頃、次々と参加者が集まってきた。明夫、君江、長谷部もやって来た。長谷部は妻と長男を連れて参加した。

明夫たちは、玄関に入るなり見違えるほどきれいになった床などを見て言った。

「いや、きれいになりましたね。あんなにあったガラスの破片も片付いて。これ全部、二人で掃除したんですか」

「飯島さんも、僕も、何だか興奮して寝ていれなくて、朝早く起きてしまつて。それで、飯島さんが一番乗りで、僕が二番乗りつてことになつてしまつて。これだけ片付くと、本当に気持ちがいいなあ。ようし、もう一本ビール飲んで頑張るか」

「相変わらず、ヒロさん良く飲みますね。ところで、やっと晴れたけど、今日の会場どうしましようね。ここのグラウンド、昔から水はけ悪いから・・・」

明夫は、ヒロと飯島の顔を見ながら言った。

「さつき、ここに来る前に、真つ先にイタヤカエデの木の所に行つてみたけど、水が溜まつていたなあ」

長谷部は残念そうに言った。

「まあ、嵐が去つて、晴れただけでも良しとしなければ。それじゃ今日の会場は体育館とということだ」

明夫はそう言うのと素早く厚紙に、「本日の会場は体育館です」と書き、玄関のガラスにテープで貼った。

「あっ、この絵鹿島小学校だ」明夫が言う

「娘が今日来れないものだから、鹿島小学校にあげるって、昨夜描いたんですよ」
飯島は少し照れ笑いを浮かべながら言った。

「それじゃ、体育館と廊下みんなで手分けして掃除しなくちゃ」

君江はほうきとダンボールを持ち、体育館へと歩き出した。手の空いている者たちも後に続いた。

体育館も廊下もガラスの破片も片付けられ、久し振りにきれいになった。昨日まで荒らされていた校舎が昔の姿に帰っていた。閉校式以来埋もれていた鹿島小学校に、再び光が射したようで、誰もがその姿に喜びを感じていた。

掃除が済むと、明夫の指示の下、参加者はそれぞれ分担し準備にかかった。椅子や台を運ぶ者、炭火の用意をする者、壁に字幕を貼る者、全てが今日という日のために、機敏に動いていた。

準備が整い、会を始めると、参加者の数は、昨夜からの嵐に関わらず、三十数名にもなっていた。同期の外、家族で参加した者、あるいは兄弟で参加した者、中には赤子を含め親子三代で参加した者もいた。肉を焼く音とともに、参加者の歓談の声も体育館に響き渡っていた。

「厚岸から届いたカキを持ってきたので、希望の方は手を上げてください」

最年長の山川は、軍手を履きながら、大きな箱からカキを取り出し、網の上に置いた。

「厚岸のカキなんて凄いですね」

ヒ口は山川の側へ行くと、缶ビールを差し出しながら言った。

「どうも済ませません。遠慮なく頂きます。南部の酒屋でビールを買おうとしたら、日曜日のせいか店が閉まっています。だから、カキはあるのにビールの手持ちがなかつたんですよ。本当助かりました」

山川は、軍手を履いたまま栓を抜くと、グイと上手そうにビールを流し込んだ。

「ああ、上手いですね」

「こちらは、カキはありませんが、クーラーボックスに沢山ビールを詰め込んで来ましたので、遠慮なく飲んでください。僕は、掃除の前から飲み始め、これで五本目ですよ」

ヒ口は、少し上気した声でビールをもう一本山川に差し出した。

そこに、長谷部が皿を持ってやって来た。

「すみません。カキを頂けますか」

「ああ、どうぞ、どうぞ。こっちが焼けているかな」

山川は、大きなカキを三個、皿に置いた。

「どうも、ありがとうございます」

長谷部は、皿を受け取り礼を言った。そして、山川の顔を正面から見ると驚いて声をあげた。

「あれっ、代々木町アパートにいた、山川幸一さんでないの」

「ええ、そうですけど・・・」

「あれ、良く親父同士が酒飲んでいた、長谷部幸助の息子ですよ」

「あの、酒の好きな長谷部さんとこの」

二人は、空いている椅子に座りこむと、数十年ぶりの再会で、話に夢中になっていた。

もう一方のテーブルでは、飯島の同期の倉田が、天ぶらの準備を始めた。ダンボール箱から、水、天ぶら粉、ボールなどを取り出した。何を始めるのか、みんなも注目し始めた。倉田は同級生をアシスタントに食材の下ごしらえをしていた。そして、加熱されたフライパンに、衣をつけた海老をいれると勢い良く「ジュー」という音がした。

「はい、天ぶらが上がるよ。どんどん皿を持ってきてください」

倉田は、寿司職人らしく歯切れの良い口調で言った。

「ふるさと大夕張」の呼びかけに集まった鹿島小学校の卒業生たちは、それぞれの個性を繰り広げ、会を盛り上げていた。

「悪天候の中、良く集まってくれましたね」

ヒロは、新しい缶ビールを手にし飯島の隣に座った。

「本当ですね。それに、体育館で焼肉をやるなんてのは、鹿島小学校始まって以来これが最初で最後でしょうね」

ヒロは背中を押さえながら、飯島の話聞いていた。

「ヒロさん、どうかしたのですか」

「ここしばらく、飲むと背中が痛くてね」

「そりゃ、ヒロさん飲み過ぎですよ。少し、体も労わらなくては」

「どうも一人で暮らしていると、ついつい飲む量が増えて」

離婚してから、時間があればいつも飲んでばかりいた。少し量を押さえた方が良いのかもしれない。飯島の話聞きながら、ヒロはそんなことを考えていた。

「そろそろ、黄色い旗まわしますか」

明夫は、ヒロと飯島の顔を見ながら言った。

ヒロは、今日のために用意したビニール製の特注の旗とマジックを図面袋の中から取り出した。それらを確認すると、明夫は皆の前に歩み出た。

「これから、黄色い旗をまわしますので、鹿島小学校に感謝を込めて一人ずつ書いてください。本日の会が終了後、いつまでも記念に残るように、大夕張神社に結びつけたと思います」

参加者は、誰もが「黄色い旗」の意味を理解していた。旗がまわつてくると、一人一人それぞれの思いを書きこんだ。

それからも、際限なく歓談の輪が広がっていったが、やがて終了の時刻になってきた。
「まだまだお話は尽きないと思うのですが、時間になりましたので、最後に全員で校歌を
斉唱したいと思います」

明夫が立ち上がって言うと、飯島はラジカセにテープを入れ、ボタンを押した。校歌の
伴奏が流れ出した。昨夜、飯島がキーボードを打ちこんで作ったテープであった。

太古の森を きりひらき

うもるる宝 かえさんと

力よほまれよ 血のひびき

きたわんかいな ああ大夕張

銀雪はゆる 夕張岳

源しるし 夕張川

のぞみよさかえよ 学びの舎

みがかん心 ああ大夕張

この校歌の詩には、どこにも鹿島小学校の名は出てこない。最後は「ああ大夕張」で締められている。それほど、この街の歴史と鹿島小学校の歩みは深く結びついていたのであった。

参加者は、大きな声で歌い上げた。この校歌は、街の歩みと共に、沢山の子供たちに歌い継がれてきた。若き両親と共に校門をくぐった入学式に、街ぐるみで参加した運動会に、そして、卒業式に。鹿島小学校の節目に、この街の歴史の中で、何度も何度も歌われ続けてきた。

だが、今日の校歌は違っていった。これが鹿島小学校の校舎の中で歌う最後の校歌になる。それぞれが歌いながらそのことに気づいていった。参加者は、胸にこみ上げてくる熱いものを押さえつけるように、大きな声で歌った。この街は、もつとゆっくりと、地図から消えて行く運命を受け止めていたのかもしれない。だが、時代の流れは、急速にこの街を飲み込もうとしていた。卒業生たちの歌う校歌は、そんな流れに抗するかのよう

に、校舎に響き渡っていた。

校歌を歌い終わると、後片付けを始め、全てのゴミは持ちかえり、体育館は、いつでも授業が再会できるほどに清掃された。

その後明夫の誘導で、参加者はイタヤカエデの木に向かい歩き始めた。外は、再び小雨が降り出した。子供の頃も大きな木だと思っていたが、イタヤカエデの木は、その存在を示すかのように、校庭に聳え立っていた。かつてこの校庭で遊んでいた子供たちは、鹿島

小学校の大きな校舎と、イタヤカエデの大きな木にずっと見守られていたことを、改めて参加者たちは噛み締めていた。

イタヤカエデの木の下で記念写真を撮ると、次は、鹿島小学校をバツクに写真を撮ることになった。明夫は、デジカメのファインダーを覗きながら、鹿島小学校の雄大さを感じていた。この街の歴史を知らない者は、何も無い旧産炭地に、突然姿を現している、その大きな校舎に驚きを感じるであろう。

写真を撮り終わると、参加者は、しっかりと心にその勇姿を焼き付け、それぞれの言葉で鹿島小学校にお別れをした。

解散した後、明夫、ヒロ、飯島、君江の四人は大夕張神社の頂きに立っていた。さつきまで降っていた小雨も上がり、雲の切れ目からは、夕張岳を望むこともできた。

「それじゃ、やりますか」

明夫は、旗を手を持ちながら言うと、張られたロープの空いている所を探した。三人も手伝い、一番高い場所を選び、結びつけた。

「ようし、これで風に吹かれても飛ばされないだろう」

ヒロは、旗を見上げ満足げに言った。

「今日は、鹿島小学校のお別れ会をやれて、本当に良かったなあ」
明夫も旗を見上げながら、感慨深げに言った。

「今日のことは、一生忘れないわ。この会をみんなが集まってやったことによって、私たちの思い出の中で、鹿島小学校がいつまでも生き続けるような気がするの」

「何だか、今日は神様が僕等に与えてくれた、特別な日になったような気がするなあ」

飯島が言うように、今日という日は、四人にとっても、既に忘れられない特別な日になっていった。

飯島、明夫、君江の三人は、もう一度鹿島小学校の中を覗いた後、それぞれ札幌へと帰って行った。

ヒロは「少し酔いを覚ましてから帰る」と言っ、一人校庭に残った。そして、誰もいなくなつた校舎の中へもう一度入って行った。

玄関に入ると、飯島の娘が描いた鹿島小学校の絵を、そつと右手でなぞつた。それから、廊下を渡り、体育館へと歩いた。体育館の壁には「ありがとう鹿島小学校」と書かれた字幕が貼られていた。

ヒロは、誰もいなくなつた体育館で、今日ここに集まって来た一人一人の顔を思い出していた。みんな、良い顔をしていた。この街を後に社会に出て、色んな人生の道程を経て、鹿島小学校にお別れをするためにここに集まって来た仲間たち。やはり、飯島が言ったように今日は「特別な日」に違いないとヒロは思っていた。

ヒロは、車に戻るとクローラーボックスからワインを取り出しコルクを抜いた。そして、イタヤカエデの木の下に歩いて行くと、その太い幹をさすつた。

「本当に、ありがとう」

ヒロはそう呟くと、ワインを少しづつ幹にかけた。

その日、ヒロは夕闇が迫るまで、校庭のブランコに腰掛け、鹿島小学校とイタヤカエデの木と、そして、大夕張神社の黄色い旗たちと向かい合っていた。

病

ヒロは、総合病院の消化器内科の診察室にいた。

「検査の結果ですが、すい臓がきわめて悪い状態です。すぐに入院が必要です。そしてもっと詳しい検査を行ないたいです。杉田さん、ご家族の方は……」

まだ、四〇歳ぐらいのメガネをかけた医者は物静かに言った。

「恥ずかしながら、五年前に離婚して、今は一人ですから家族はいません。先生、単刀直入にお聞きしますが、すい臓癌だということなのですね」

ヒロは、医者を目を真っ直ぐに見て言った。

「そうです。まだ確定的なことは言えませんが、進行しているようです。すい臓癌は、自覚症状が出た頃には、進行していることが多いんです」

その後、医者は今後の検査内容などについて説明した。

ヒ口は、鹿島小学校のお別れ会以来、背中の痛みに加え下痢が続いていた。そして職場に行くところ代理、顔色が黄色くなっていますよ」と言われ、ついに病院の扉を開けた。

入院してから一週間ほど検査が続いた。やっと検査が終わった週末には、外泊許可が出たので、マンションに戻って来た。この一週間検査を受けながら、ヒ口は初めて死というものを考えてみた。恐怖というものは、不思議なほど湧いてこなかった。それは、ヒ口が日常の生活というものに執着していないためかもしれない。日々の生活に自分を縛りつけてくれるような、しがらみ、絆というものがなかった。

振り返ってみれば、いつのまにか、由希の二倍もの時間を生きてきた。特に辛いことばかりの人生ではなかったが、満ちたりともでもなかった。あえて言えば、大夕張で過ごした日々が、一番穏やかであったと思えた。

今までの人生で心に残る出来事を思い浮かべてみた。最初にイタヤカエデの木の下で会っていた由希のことが思い出された。もし、由希が生きていたなら、自分の人生は大きく変わっていただろうと思えた。次は、娘の有紀の誕生であった。今この世に思いを残すとすれば、それは娘のことであった。あの由希と同じ日に生まれるという偶然が何か運命的なものを感じていた。そして、最後は鹿島小学校のお別れ会であった。考えてみると、この三つの出来事は、どれもが由希に繋がっていた。

十七才の時、イタヤカエデの木の下で由希と指切りをして以来、ヒロの横には、いつも由希がいた。何故こんなにも長い間、由希のことを引きずりながら生きてきたのか、ヒロ自身にもその答はわからなかった。

ヒロは荷物の整理を始めた。取り出すとどれも捨ててしまっても構わない物ばかりであった。ビデオテープも、娘の成長記録のものだけを残し、外は全て捨てることにした。残った荷物は、家電製品、衣類を除き、衣装ケース一つだけであった。これが、四〇を前にした男の必要な全ての荷物であった。

荷物の整理が終わると、パソコンを立ち上げた。「ふるさと大夕張」にアクセスすると掲示板には書き込みが増えていた。その中の飯島の書き込みをヒロは凝視した。

十月三〇日に入札が行われた鹿島小学校の解体工事は、来週の月曜日から始まることになりました・・・

「ついに、鹿島小学校が消えてしまう・・・」
ヒロはじっとしていることができず、掲示板に書き込みを始めた。

大夕張の歴史を知らない人は、何も無い原野の中に、突如として姿を現す鹿島小学校の大きな校舎に驚かれると思います。

かつて、鹿島小学校の大きな校舎は、そこで暮らす人々にとっては「誇りと自信」に満ちているものでした。それは、奥地ながら夕張の本町にも負けない「大きな学校」であるという地域の誇りだったのです。

大人も子供も大夕張で暮らした日々の思い出の中には、必ず「鹿島小学校」が出てきます。入学式の時に一緒に校門をくぐった若かりし頃の父母の姿。街中が参加した運動会。人々の営みの中で、鹿島小学校は凜として輝いていました。

ダムのことさえなければ、話題性もなくマスコミも振り向くこともなかった、かつての炭鉱町・大夕張。本当は、静かに、ゆっくりと時間をかけ、自然に朽ちるのを待っていた街だったのです。それでも、そこで生まれ育った者たちには、大切な場所でした。

あの秋のお別れ会するとき、紅葉し始めていた木々の葉も、今は土に降りまもなく降り積もる雪の下で、静かに眠りにつくのでしょうか。

昭和三年からこの地に根づき、街の繁栄から衰退まで、大夕張の歴史を見てきた鹿島小学校。あなたの、誇り高きそれでいて優しい面影は、決して色あせることはありません。長い間、本当に、ご苦労様でした。

時代の流れは、あまりにも早く「大夕張」を飲み込んでしまいました。僕

らは、あなたが残してくれた人々との絆を大切に引き継ぎ、これからも「大夕張」を未来・希望に向けて語り継ぎ、交流の輪を広げていきます。

どうぞ、ゆつくりと、おやすみなさい。そして、いつでも、あなたがかつて愛しんだ子供たちの夢の中に遊びに来てください。僕らは、あなたのぬくもりの中で、少年期を過ごすことができ、幸せでした。

「アリガトウ・凜として・ 誇り高き・ 鹿島小学校」

ヒロは、投稿が終わると、明夫と飯島にメールを出した。

明夫は、その夜職場の同僚と酒を飲んだ後、十一頃に帰宅した。少し飲み過ぎ酔いが回っていた。妻はパートがあるので、先に休んでいた。長男の和夫は、来春の高校受験のためまだ起きて勉強をしていた。

明夫は、和夫の部屋をノックするとドアを開けた。

「よっ、ただいま。まだ頑張っているんだ」

「お父さん、お帰り。あっ、今日も酔っ払っている」

「あれっ、わかる」

明夫は、照れ笑いを浮かべながら言った。

「お父さん、約束だよ。僕も頑張るから」

「ああ、わかっているよ。ブルーのアイ・マック、合格したら買うから」

明夫は、子煩悩であった。子供が生まれた時から、どんなに帰りが遅くても、寝顔をじっと眺め、遅い日が続くと、朝早く起きて、出勤するまで子供と遊ぶことさえあった。

明夫はシャワーを浴びた後、パソコンを立ち上げメールをチェックした。すると、ヒ口からメールが来ていた。

「明夫君、お元気ですか。お忙しいようですが、お体を大切にしてください。僕は、飲み過ぎがただったようで、今週の月曜日から、入院しています。病名は、すい臓癌です。こうなってみると家族がなく、一人身で良かったとも思っています。何かあれば、明夫君に連絡しますので、その節はよろしくお願いいたします。入院先は、次のとおりです……」

明夫は、メールを読み終わると、気持ちが動転していた。

「ヒ口さんが、すい臓癌だなんて……」

明夫はすぐにヒ口に電話をかけた。

「ヒロさん、明夫です。今メールを読んだところです。何と書いていいの・・・」

「僕の方は、大丈夫だよ。特に痛みが激しいという訳でもないし。今週は検査だったから、来週には詳しいことが分かるけど。何かあった時の連絡先は、明夫君の所にさせてもらったから。こういう時は、職場関係より、同郷の友人の方が僕も気が許せるから・・・」

「ええ、それは構いませんから。外に何か手伝えることがあれば、いつでも連絡ください」

「ありがとう。日曜日に病院に戻る時は、パソコンも持って行くから、メールも使えるし。今日久し振りにホームページ見たら、鹿島小学校の解体工事ついに始まってしまったね。僕もさつき、鹿島小学校のことで掲示板に書き込みさせてもらったんだけど」

二人はホームページのことや、同郷の仲間のことなど、取り留めのない話をした。電話でこんなに長いこと話するのは、明夫にとっても、ヒロにとっても始めてであった。明夫は、電話の向こうに、元気そうなヒロの姿を感じることができ、少し安心することができた。

明夫は電話を切ると、ホームページを開き、ヒロの投稿を読んだ。読み終わり目を閉じると、小雨の中、鹿島小学校の前で写真を撮ったあの日のことを思い出していた。そして、ビールを飲みながら、嬉しそうに掃除をしていたヒロの笑顔が浮かび上がってきた。

飯島は、久し振りのヒロの書き込みを読んでいた。読み終わると、飯島の中にも何か熱いものがこみ上げてきた。街の衰退を最後まで見守ってきた鹿島小学校の凜とした校舎が脳裏に浮かび上がってきた。

その後、飯島はメールのチェックをした。ヒロからもメールが寄せられていた。メールを読むと、飯島も動揺していた。

「ヒロさんが、すい臓癌だなんて・・・」

飯島は、あの日鹿島小学校の前でみんなで写した写真の画像を呼び出した。同じくイタヤカエデの木の下で写した画像も呼び出した。どちらも、ヒロは笑顔を浮かべていた。

三〇名の仲間が、小雨の中、みんないい顔をして写っていた。そこには「ふるさと大夕張」に思いを寄せる人々の絆が作られていた。

飯島が個人的に始めたホームページから、これほどの人々の絆が作られることを、飯島自身も考えてもいなかった。

全ての始まりは、札幌駅でヒロと会ったあの日からであった。ヒロを通じて明夫と知合い、明夫を介して君江とも繋がりを持てた。そして、この四人から交流会、鹿島小学校のお別れ会と人々との絆が広がり始めた。そのヒロが、今は病に犯されている。しばらく考えた末、飯島はヒロにメールを出した。

「ヒロさん、お陰様でアクセスも三万件を超えようとしています。大夕張の最盛期の人口の二万を上回る数字です。これもみなさんのお陰です。これからも、ホームページを成長させるためにも、ヒロさん、早く元気になって帰って来てください」

一枚の絵

君江は、来週から始まる佐藤由雄の油絵の個展の準備に追われていた。佐藤由雄は大夕張の出身であり、君江の従兄弟でもあった。由雄はここ数年中央画壇でも認められるようになり、無名時代から一年おきに札幌でも個展を開いていた。

君江は自宅に帰ると、子供たちに今日一日の話聞き、その後パソコンを立ち上げた。君江の夫は、半導体の企業に勤めており、三年前からシンガポール勤務となり、単身赴任をしている。赴任前に、いつでも家族と話ができるようにとパソコンを備えつけた。君江は、来週から始まる由雄の個展について、掲示板に書き込んだ。

来週の月曜日から二週間、大夕張出身の画家佐藤由雄の個展を開催します。

スタッフは、友人関係を中心に個展をサポートします。大夕張にちなんだ

油絵も何点かありますので、是非ご覧になってください。

会場は次のとおりです・・・

明夫は火曜日に、由雄の個展会場に仕事帰りに寄った。受付で記帳をするとき、君江を探したが見つかることができなかった。

「あの、田口君江さんは、いないのでしょうか」

明夫は記帳を済ますと、受付の女性に聞いた。

「君江さんは、初日は一日中いたのですが、今日は用事があり来ていませんね。ひよつとしたら、大夕張のホームページを見ていらしたのですか」

「そうです。それと、君江とは同期の仲間ですから」

「そうですか。案内状を差し上げない方でも、ホームページを見たと言って多くの方が来てくださるの」

受付の女性は嬉しそうに答えた。

作品を見ると、色使いが穏やかで、どれも優しさが伝わってくる絵であった。中頃にさしかかると、神社から望む大夕張の全景が描かれた絵があった。ほとんど建物もない最近の大夕張の風景画であった。写真で見ると、荒んだ雰囲気が強くなるが、この絵は、不思議なほど穏やかさに包まれていた。何か大きな仕事をやり遂げ、これから休息を取ろうとする者の、安らぎさえ感じられた。そして、校庭にはイタヤカエデの木も立っていた。

次の作品に移ると、鹿島小学校が描かれていた。それは、荒れ果てガラスの破られた校舎ではなく、今にも子供たちが飛び出して来そうな凜とした校舎であった。それでいて、穏やかで優しさに包まれた色使いの絵であった。

「ヒロさんにも、見せてやりたい」

明夫はその絵の前で立ち止まってしまった。

「失礼ですが、大夕張出身の方ですか」

後ろを振り向くと、長髪の男性が立っていた。一目で佐藤由雄だと明夫にはわかった。

「そうです。代々木町のアパートに住んでいました。佐藤さんですね。こちらのスタッフの君江さんとは同期で、大夕張のホームページとも一緒に関わりを持っているものですか」

「君江と同期ですか。実は彼女の父親は、僕の親父の弟で、僕等は従兄弟なんですよ」

明夫と由雄はすぐに打ち解け、懐かしい大夕張の話に興じていた。

その日、明夫が自宅に帰ると、ヒロからメールが届いていた。

「明夫君、申し訳ありませんが、そちらの都合のよい日に病院へ来ていただけないでしょうか。僕の身内として、検査結果と今後の治療方針について、医師の説明と一緒に聞いてもらいたいです。よろしく、お願いします」

明夫は、すぐに返信のメールを送った。

「明日そちらの指定する時間に伺います。何か必要なことがあれば、いつでもメールをください。それと、仕事の帰りに、掲示板に書いてあった佐藤由雄さんの個展を見てきました。君江は佐藤さんの従兄弟に当たるそうです。どれも穏やかな色使いで、優しさのある絵でした。大夕張の絵も二点ありました。特に鹿島小学校を描いた絵からは、子供たちの

歓声が聞こえそうな気がしてきました。本当に鹿島小学校が凜として建っていました。……」

明夫は、ヒロの病氣のことを打ち消すかのように、由雄の絵のことを沢山書き込んでいた。

明夫とヒロは、ナースステーションの隣にある部屋で、医師とその助手に向かい合って座っていた。

「それでは、よろしいですか」

医師はゆっくりとヒロに言った。

「はい、お願いいたします」

助手は、これまでの検査で撮影したCTなどの写真を投射台に貼り出した。

「まず、検査結果から説明します。すい臓のこの部分に大きな腫瘍があります。今のところ、他の臓器への転移は認められませんが、リンパ節には転移しているようです。すい臓癌は、自覚症状が出にくく、出たときにはかなり進行していることが多いのです。このままですと、時間の問題で肝臓など他の臓器に転移する可能性がきわめて高いと思われるます。……」

何も備品の置かれていない部屋で、冷酷な事実を説明する医師の声が響いていた。このままだと、最善を尽くしても余命は後一年余りであること。手術を受けた場合、三年後の生存率は十パーセントであること。

明夫は、予想以上にヒロの病状が悪いことに、シヨックを受けていた。

「どちらの治療方針を採られるか、ご家族の方と良く相談して決めてください。大変な病状ですが、希望を捨てずに気持ちをしつかりとお持ちください。何か、質問はありませんか」

「何もありません。率直に病状を説明してくださいと、ありがとうございます」
ヒロは、しつかりした声で、落ち着いて答えた。

病室に戻ると

「忙しい中、悪かったね」とヒロは明夫を氣遣って言った。

ヒロは、パソコンが使用たくて電話付きの個室に入っていた。ベッドの横の棚には、本、CDが並べられていた。窓辺には、紫水晶が置かれていた。

「あつ、この水晶あときの・・・」

「去年の夏、四人で鹿島小学校へ行ったときの水晶だよ」

ヒロは、紫水晶を手にとると懐かしそうに言った。

「あの日は、本当に暑い日でしたね」

明夫も椅子に座りながら、思い出して言った。

「メール読んだけど、佐藤由雄さんて、僕より一学年先輩でいたのを覚えているよ。それに、君江さんと従兄弟とは驚きだなあ。絵も何か穏やかに描かれていても良さそうだね。僕も、鹿島小学校の絵だけでも見たかったなあ。あの日、みんなでお別れ会やれて本

当に良かったなあ。もし、何もしないうちに、校舎が壊されてしまったら、一生後悔したろうなあ。本当に、いいお別れ会ができたよ」

明夫もあの日のことを思い出していた。ビールを飲みながら楽しそうに笑っていたヒロの顔が浮かんでくる。そのヒロが死ぬだなんて・・・

「ヒロさん、俺、小さい頃ヒロさんに沢山遊んでもらったこと、感謝しています。そして、何十年かぶりでもたこうして会えて、みんなで交流会したり、鹿島小学校のお別れ会したりして・・・俺もずっとヒロさんと、色んなこと一緒にやってみたいと思っています。だから、ヒロさんには、ずっと生きていて欲しい・・・」

明夫は言葉にならず、これ以上話ができなかった。

明夫が帰った後、ヒロはぼんやりと窓の外を見ていた。ナナカマドの木葉も半分ほど落ちていた。もうじき、雪が降り全ては白一色に包まれてしまう。

ヒロは、医者という言葉を思い出していた。今のヒロには、何としても生き長らえて守るべきものが見あたらなかった。この病気になったのも宿命なら、あらかじめ定められた寿命を受け入れる方が、自然のような気さえしていた。後、一年で命が尽きる。それならそれで良いではないか。ヒロは、自分でも不思議なほど静かな気持ちで、死と向かい合っていた。

明夫は、飯島と君江にヒロの病状についてメールを出した。そして、鹿島小学校の絵のことを考えていた。何としても、ヒロにもあの絵を見せてやりたかった。でも、もし売っていたならどうしよう。

明夫はすぐに君江に電話をした。

「はい、田口です。あら、明夫。今メール見たばかりだけど、ヒロさん大変なことになってしまつて。ねえ、どうしよう・・・」

君江は、心が落ち着かず、矢継ぎ早に話した。

「君江、落ち着け。ヒロさんが、鹿島小学校の絵をとでも見たがつているんだ。あの絵まだ売れていないか」

「大丈夫、今日はまだ売れていなかったわ。でも、大夕張の全景は初日に売約済みになつたからね。鹿島小学校の絵も結構人気あるから・・・」

「君江、あの絵佐藤さんに話して売約済みにしてももらえないか。今まで交流会やお別れ会に来た人呼びかけて、オーナズ形式でなら、何とか買うことができると思うんだ」

「でも、明夫、あの絵三〇万もするのよ。そんなお金すぐには集まらないわよ」

「わかつている。みんなにすぐメール送るから。君江、ヒロさんには、もう時間がないんだよ。俺何としても、あの絵ヒロさんの病室に置いてやりたいんだよ。今日ヒロさんの所へ行つたら、あの紫水晶が置いてあつたんだ。ヒロさん、鹿島小学校が好きなんだ・・・」

「わかったわ。絵の方は明日押さえておくから。それと、私も心当たりにおーナの件声かけてみるから」

翌日、君江は明夫とのやり取りを由雄に話した。

「この鹿島小学校には、みんな色んな思いが込められているんだなあ。僕もデッサンから始め、色をつけ仕上げるまで、子供の頃を思い出しながら描いたんだよ。そこまで大切に思われている絵なら、もう個人に売れることはできないなあ。大夕張の人たちがもつとも相応しいと考える場所に置いてもらえるのが、この絵にとっても、僕にとっても一番良いんだろうね。その相応しい場所が見つかるまで、この絵の管理は、君江に頼むよ。明日で個展も終わりだから、その後ホームページの仲間で、ヒロさんにこの絵を届けてもらえるかい。本当は、僕から渡したいんだけど、明日中に飛行機で横浜に帰らないといけないから。ヒロさんに、早く元気になってくださいと伝えておいて」

由雄は、自分の描いた絵がこうして同郷の仲間の心の掛け橋となれたことを嬉しく思っていた。

日曜日の夕方、病室をノックする音がした。

「はい、どうぞ」

ヒロは、ベッドの上から大きな声で言った。

ドアを開けると、明夫と君江が入ってきた。君江は花束を持ち、明夫は大きな包みを持っていた。

「やあ、いらつしやい」

ヒロはベッドから起き上がり二人を見た。

「ヒロさん、これ」と言つて君江は花束を渡した。

「ありがとう、きれいな花だね」

ヒロは大切に受け取ると、棚から花瓶を取り出した。

「私がやるわ」

君江は、部屋の洗面台へ行き、花瓶に水を入れ、花を生けた。

「これで、病室も明るくなつたなあ」

ヒロは、花瓶を受け取ると窓辺の紫水晶の隣に置いた。

「ヒロさん、これ、鹿島小学校の絵だよ」

明夫は、嬉しそうに箱から絵を取り出し、ヒロの前に置いた。

「あの、佐藤さんが描いた絵・・・」

「そうです」

ヒロは、じつと絵を見た。確かにそこには、今にも子供たちの声が飛び出してきそうな、校舎が描かれていた。明夫が言うように、穏やかで優しさに包まれている絵であった。こうして見ているだけで、懐かしく心が温かくなってくるのが感じられた。

「本当に、いい絵だね」

ヒロは、心を込めて言った。

「ヒロさん、この絵、退院するまでここに置いてください」

明夫の申し入れに驚きながらヒロは言った。

「でも、この絵は佐藤さんの大切な作品でしょう」

「いいえ、佐藤さん本人が、ヒロさんの側に置いておくように言ったのよ」

君江は、昨日の明夫と由雄の話の経緯を説明した。君江の話が終わると、ヒロは二人に頭を下げながら言った。

「二人ともありがとう。同郷のよしみでここまでしてもらえれば、僕は幸せ者だ。佐藤さんの気持ちもとてもありがたい。こんなに素晴らしい絵を側に置いて見れるなんて。本当にありがとう・・・」

一枚の絵に寄せられた人の心の優しさに触れ、ヒロの魂は感動していた。それに伴い、ヒロの中で、「まだ生きていて、みんなと一緒に笑ったり、涙を流したり、そんな時間をいつまでも共有していきたい」という気持ちが湧きあがってきた。

小さな命

その夜、ヒロはテレビのニュースを見ていた。一歳を過ぎたばかりの小さな女の子が映し出されていた。体中に管をつけながらベッドに横たわっていた。傍らには、母親がいて女の子に話しかけていた。すると、女の子も管の絡みついた手を母親に差し出そうとして

いた。女の子は、生まれながらに疾患を持ち、心肺同時移植以外に助かる道はないという。そのため、渡米して手術を受けなければならず、二億円あまりの費用が必要であるため、募金を呼びかけているものであった。

管のついている手を、母親に必死に伸ばそうとしている女の子の映像が、ヒロの頭から離れなかった。必死に生きようとする小さな命が輝いて見えた。いつもなら、通り過ぎていく日常のニュースの映像であったが、小さな命の輝きは、ヒロの中に留まり、ヒロの心に食い込んでいた。

ヒロは女の子が助かるように心から願っていた。そして、ヒロ自身もわずかな可能性でも、生きていたいという気持ちが強くなってきた。人はどんなに孤独に思えても、決して一人ではない。常に誰かに支えられ、励まされ、そして生かされている。そんな命の重みを、ヒロは、小さな女の子から教えられた。

イタヤカエデの木の下で

手術の前日、病室には飯島、明夫、君江そして長谷部が見舞いに来ていた。最近行った大夕張の様子や、ホームページのことなどをみんなで楽しく話していた。傍から見ると、これから大手術を受けるといふ緊張感もなく、気の合った仲間たちの集まりのようにさえ見える。

「そう、そう、今日はクリスマスツリーを持ってきたのよ。もう子供たちも大きくなって誰も振り向きもしないから、ここに飾ろうと思つて」

君江は、紙袋からツリーと飾りを出した。明夫たちも、飾り付けを手伝つた。

「クリスマスツリーか、懐かしいなあ。昔良く娘に飾つてやつたなあ」

ヒロは、明夫たちの手で飾り付けられていくツリー見ながら言つた。

「ヒロさん……。娘さんに知らせなくていいんですか」

明夫は遠慮しがちに言つた。

「明日死ぬ訳じゃないし、いいよ。いつも、向こうから連絡があれば会つてはいるけど、こっちからは、連絡しないことになってるんだよ。会いたいときにだけ連絡するんでは、向こうのことも考えず勝手過ぎるからね。つまり、離婚するつてこういうことなんだろうなあ」

そこへ看護婦が検温にやつて来た。

「あら、素敵なクリスマスツリーですね。ここだけが、病室でないみたい」

看護婦の話聞きながら、ヒロたちは互いの顔を見て微笑んだ。

その夜、ヒロはラジオを聞いていたが、どの局もクリスマスソングが流れていた。病室で聞くクリスマスソングは、世間の華やかさとの乖離を感じるようで心が落ち着かないものであった。

検査の結果を聞いたときは、これも寿命なら仕方がないと静かに「余命一年」という現実を受け入れることができた。だが、生きたいと思ったときから、死に対する恐怖心が湧いてきた。同じ現実でも、執着心があるとないのでは、こうも違うものかと自分でも驚いていた。手術が成功しても、三年後の生存率は十%という現実が、今は重く感じられていた。今のヒ口は、この十%という生存率に、全ての希望をかけていた。

明日の手術に備え、睡眠薬を看護婦は渡してくれた。普段は良く眠れる方であるが、今晚だけは飲んでみようと思っていた。外を見ると、夕方降った雪が薄らと辺りを被っていた。それを見て、鹿島小学校の跡地も雪に包まれ、今は白一色の世界なのだろうとヒ口は思っていた。

明日からは、しばらく自由に歩くこともできないので、寝る前に少し歩いてみよう、ヒ口はベッドから降りた。まだ消灯前なので、病室からは、テレビの音や話し声が廊下に漏れていた。廊下を突き抜け検査病棟へ行くと照明は消え、非常灯だけが灯っていた。ヒ口は廊下にある大きな窓に向かって歩いた。そこからは、手術室が見えるはずであった。

窓辺に立った途端、雪明かりの中、大きな月がヒ口の目の中へ入ってきた。それは、みなぎるほどの満月であった。まるで生命が満ち足りているような大きな満月であった。ヒ口は、その生命力を吸い取るかのように月を見つめ、心の中で誓った。

「俺は、必ず治る。俺は、絶対に、生きる」

翌朝十時頃に、飯島、明夫、君江の三人は、病室に来ていた。ヒロの手術は、十一時から始まる。ヒロは手術着に着替え、鼻からは管がつけられていた。

ヒロは、努めて明るく振る舞い話し掛けていた。

「明夫君、今朝何食べた」

「えーと、パンにサラダに牛乳、それとウインナーかな」

「あら、明夫は洋食なんだ。私は昨日の残りのカレーと卵スープ」

「君江さん、それじゃ子供から文句が出るだろう。僕は、大根の味噌汁と納豆かな」

飯島は、君江の顔を見ながら言った。

そのとき、ノックをする音がした。

明夫がドアを開けると、有紀が立っていた。

「有紀、どうしてここが」

ヒロは驚きながら言った。

「ヒロさん、昨夜有紀ちゃんから電話あって。いくらマンションに電話しても留守電だから、会社に電話したら入院してるって聞いて。そこで連絡先に僕の電話番号を教えられたって。それで僕が、ヒロさん今日手術するって知らせたんですよ」

「そうかい。かえって迷惑かけたね。有紀、良く来てくれたね。ありがとう。こつちへおいで。ここにいる人達、お父さんの友達だから」

有紀は部屋に入ると明夫たちに挨拶をした。

「私手術って聞いて、お母さんにも内緒で来たんだけど・・・本当は少し迷ったけれど、お父さん一人ぼっちだったら可哀相だと思つて。でも、こんなに人がいて良かった」
有紀は、みんなの顔を見ながら少し恥ずかしそうに言つた。

やがて、手術の時間が迫り、ヒ口を手術室に運ぶために二人の看護婦がやつてきた。

「杉田さん、そろそろ時間ですから。付き添いの方は、一緒にいらして手術室の前の待合室でお待ちください」

一人の看護婦が、明夫たちに言つた。

長い廊下を渡りエレベータに乗つた。エレベータのドアが開くと、そこは手術室であつた。

「それでは、付き添いの方は、あちらでお待ちください」

看護婦がそう言うと、明夫たちは、ヒ口に言葉をかけた。

「ヒ口さん、頑張つて」

「みんなどうもありがとう。有紀もありがとう」

ヒ口はゆっくりと右手を上げながら、手術室へと入つて行つた。

「それでは杉田さん体を横に向けてください。少し背中がチツクとしますが、すぐに麻酔が効いてきますから」

麻酔医は消毒をすると、ヒ口の脊髄に細い管を入れた。

ヒロは薄れて行く意識の中で、鹿島小学校の前に立っていた。ヒロを呼ぶ声かして振り向くと、イタヤカエデの木の下に明夫たちが集まっていた。そこには、由希も立っていた。ヒロは手を振ると大きな声で言った。

「必ず元気になって、また、みんなと一緒に、イタヤカエデの木の下に行くから」
ヒロの声は、校庭を吹き抜ける初夏の風に乗って、ふるさと大夕張の大地に響き渡った。

イリ
リ
ユ
ー
ジ
ョ
ン
大
晦
日
の
奇
跡

サイレンの音

隆一はその夜いつになく酔っていた。同僚と別れた後すぐにタクシーを拾おうとしたが、どれも満車であった。年の瀬のススキノは、人で混み合っていた。

隆一は仕方がなく、冷たい風に当たりながら酔いを覚まそうと歩き出した。しばらく歩くと、行きつけの寿司屋にでも寄ろうと思い、ふらつきながら路地裏に入った。途中まで行くと、いつもの道が行き止まりになっていた。

「あれ、道をまちがえたかな」

隆一は後ろを振り返ると、いつもの見慣れたビルのネオンが目に入ってきた。

「やっぱり、この通りでいいんだよなあ」

そのとき、ふと左側を見ると、一人人がやっと通り抜けれるような隙間がビルの間にあつた。隆一は、その隙間に入って行った。入ってみると思つたより奥行が深く、進むにつれ暗闇が迫ってきた。どのくらい歩いたのだろうか。街の喧騒も消えた頃、やっと明かりが見えてきた。

「こんなところに、店があつたかなあ」

さらに進むと、裸電球の街路灯に照らし出された通りが見えてきた。

「あれ、この通りは・・・」

隆一は酔った目で、凝視した。それは、隆一が生まれ育った街の駅前通りにそっくりであった。通りは人の気配もなく、深い雪に包まれ静まり返っていた。明かりの消えた建物を、街路灯がやさしく照らし出している。

隆一は、ゆっくりと踏み入った。静けさの中で、雪を踏みしめる音が響く。郵便局があつてその向かいには詰所がある。そして、その向こうには生協も見える。

「まさか、こんなことが・・・」

冷静に考えようとしても、酔いが回っていて、これが現実なのか夢なのか判断ができない。隆一はとにかく先に進んでみることにした。

一軒だけ明かりのついている建物があつた。近づいて見ると、BAR・エルボンと書いてあつた。その隣には食堂があつた。

「これは、あの街そのものじゃないか」

隆一は混乱して叫んでしまった。

そのとき、BAR・エルボンのドアが開き、若い女が出てきた。それは、子供の頃見覚えのある顔であつた。

「ちよつと、いつまでそこに立ってぶつぶつ言っているのさ。さあ、中に入って」

隆一は女の後について、店の中に入った。カウンター式のボックスバーで店の中には誰もいなかった。

隆一が立ったまま店の中を見渡している

「さあ、ここに座って」と女はイスを指した。

「この店には、子供の頃おやじを迎えに来たことがあったなあ」隆一は座りながら言った。

「そうだね。男たちがいつまでも飲んでいると、母親に言いつけられて子供たちが良く来たものさ」

女はそう言うのと、レコードプレイヤーにドーナツ版のレコードをのせた。スピーカーからは、水原弘の「君こそわが命」が流れてきた。

「今夜は少し飲み過ぎたようだ。こんなことがあるはずがない」

「そうよ、これはただの幻よ。ここには、あんたみたく心にぽっかりと穴があいている子供たちがやってくる。そして、それを埋めたくて幻と出会う・・・」

女はそう言うのと、タバコに火をつけた。

「子供たちって・・・俺はもう四〇を過ぎたおやじだよ」

隆一は少しムキになって言った。

「いくら大人たって、この通りに入ったときから、もう一度あの頃に帰りたいと思ってるくせに。だからもう子供の心に戻っている。あんたさえその気なら、もう一度あの頃に戻してあげてもいいんだよ」

女は意味ありげに笑いながら言った。

「そんなこと、できる訳ないだろう。だいたいあんた変だよ・・・」

女は子供をあやすような目で隆一を見て、目の前にボトルとグラスを置いた。

「それができるのよ。この酒をグラスで一杯飲み干すとね。でも、この酒は高いわよ。そう、今夜は、一杯三万円でもいいわ。さあ、どうする」

隆一は、心の中を見透かされているような気がしてきた。どうせ手元に残らない金なら、これが嘘ならそれはそれでもいいと思つた。そして、もし本当なら・・・

「じゃ、一杯もらおう」

隆一は、財布から三万円を出すと、カウンターのの上に置いた。

「あんたは運の良い人だわ。ここでことわれれば、心の隙間は一生埋まることなく死んで行くところだったのに。こんな夢なんて、この街を出て行った子供たちが、みんなかなうものではないわ。でも、この夢はその日の夜中までよ。再び朝を迎えることはできないの。はい領収書。これが、あんたの夢の証人になるわ」

隆一は領収書を受け取ると、財布の中に入れた。

女はグラスに琥珀色の酒を注いだ。

「さあ、みんなに会っておいで・・・」

隆一は女の顔をじっと見た後、一気にグラスを飲み干した。すると、頭が割れるように痛み出し、意識を失ってしまった。

目覚め

隆一は、激しい喉の渴きを覚え、目を覚ました。布団から起き上がろうとしたとき、いつもと家の様子が違うことに気がついた。

「まさか、こんなことが・・・」

隣の布団を見ると、妹の道子が寝ていた。それも小学生のような顔をした妹であった。豆電球の明りの下目を凝らして見ると、居間には父と母が寝ていた。

隆一は、混乱しながらも水を飲もうと布団から抜け出し立ち上がった。すると、背丈が小さくなっていくことに気がついた。そっと流しまで行って、電球をつけると鏡を覗いた。そこに写っているのは、小学生の自分の顔であった。

「えっ・・・」

隆一は、驚きの声を上げてしまった。

そのとき、隆一の母は、まぶしそうにこちらを見ながら

「隆一どうしたの、こんなに朝早く。風邪引くからまだ布団の中に入っていなさい」と言った。

「うん、ちょっと喉が渴いたもんだから。すぐ寝るから」

隆一は、自分の異変に気づかれないように言った。

布団に入るともう一度隆一は、エルボンでのやりとりを思い出してみた。確かに、あの女の言ったとおりになっていた。

(あの女の言ったことは本当だったんだ)

あれこれ考えているうちに、隆一はこうなったら、今の現状を受け入れるしかないと踏ん切りをつけることができた。すると心が落ち着き、再び深い眠りへと落ちていった。

「お兄ちゃん、起きて。もう少しでご飯だよ」

道子は隆一の体を揺すりながら言った。

隆一は目を開けると

「ああ、わかったよ」と言った。

「明け方に電気なんかつけて、もぞもぞしていたから、二度寝してまだ眠いんだべさ。でも、今日は年越しで忙しいんだから、もう起きてよ」

そこには、若き日の母が朝げの支度をしていた。真赤に燃えている石炭ストーブの傍らでは、父が新聞を読んでいた。

「今日は大晦日か。年が明けたら隆一も中学生だ。あの漬垂れ坊主が中学生だもんなあ。早いもんだ・・・」

隆一を見ながら父は言った。

(今の俺は、小学校六年生なんだ。もうじき中学に入るんだ。でも、待てよ。父さんが落盤事故で亡くなったのは、確か中学生になって間もなくだったな。じゃ、今日は親子四人で過ごした最後の大晦日だ・・・)

隆一は偶然手に入れた今日一日を、悔いのないように過ごそうと決めた。

朝ご飯が済むと父は

「さあ、父さんは二番方で帰ってきたから、もうひと眠りするか」と言って流しの下の台から一升瓶を取り出した。

隆一は父のところへ行き

「父さん、今年もご苦労様でした。酒注いであげるよ」と言った。

「ほう、さすが中学生になるだけあって、感心だなあ。したら、一杯ついでもらうべ」
隆一は、父が差し出したグラスに酒を注いだ。

父は隆一の顔を見て微笑むと上手そうに飲んで、布団の中へと入っていった。

「隆一、父さん疲れているから、道子連れて昼までスキーに行っておいで」と母が言った。

三交代で働いているのに、父には仮眠を取る専用の部屋もなかった。六畳二間の長屋で親子四人が生活をしていた。

「母さん、兄ちゃんと一緒にじゃいやだ。だって、いつも置いてきぼりするんだもの」と道子が母に言った。

「道子、今日はちゃんと一緒に滑るから。だから、父さん寝かせてやろう」
隆一は道子の側に行き、諭すように言った。

サイレンの音

二人がスキー場に着くと、すでに沢山の子供たちが滑っていた。神社側の斜面では、赤いセーターを着たスキー部の上級生たちが滑っていた。今夜の松明滑走にむけて練習をしているようであった。

隆一はここに来る途中道子と話をしながら、子供の頃良くこうして一緒に遊びに来ていたことを思い出していた。今は、隆一の方からはほとんど連絡をしなくなったが、子供の頃は、道子が一番身近な存在であった。

隆一は、道子がとてもいとおしい存在に思えた。そんな隆一の気持が伝わるのか、道子もうれしそうに隆一の側にいた。

しばらくすると、隆一の友達もやってきたが、誘いを断り、道子と一緒に滑っていた。

道子はまだ力が弱くロープ塔は苦手であったので、隆一が後ろから支えてやった。

「いつもの兄ちゃんでないみたい」

そんな隆一に道子は遠慮しがちに言った。

「そうだな、いつも道子のこと置いてきぼりしてたからな。でもな、道子のが嫌いだからじゃないんだ。俺ぐらいの小学生って、妹を連れて歩くのが照れくさいんだよ。でも、いつだって、道子が妹で良かったって本当は思っているんだ。だから、ごめん・・・」

隆一は本心からそう思ってた。

「うん、わかつている。道子も兄ちゃんのこと大好きだから」

小学校三年生のオカッパ頭の道子は、少し照れながら下を向いて言った。
やがて、昼近くになった頃

「道子、兄ちゃん学校に寄ってから帰るから、一人で先に帰ってくれるかい」

「うん、わかった。母さんにも言っておくから」

「じゃ、車に気をつけてな」

隆一がそう言うと、道子は不思議そうな顔をして

「兄ちゃん、車って自動車のこと。そんなのめったにないよ」と言った。

「あ、そうだな、間違えた。でも、家まで転ばないで、ちゃんと滑って帰るんだぞ」

道子と別れた後、スキー場から真つ直ぐな一本道を滑って行くと、やがて大きな校舎が見えてきた。隆一は校舎の前に着くと板をはずし、玄関の大きなガラスの扉を押し、静まりかえった校舎は、冷え切った空気に包まれていた。正面には体育の授業で使うスキーが立て掛けられていた。

当直室を覗いたら、昼時のため家に帰ったのか当直の先生もいなかった。隆一は階段を上り三階の松組の教室へと向かった。三階にたどり着くと、廊下の窓から街を見渡した。沢山の住宅が大地に張り付いていた。人の往来も見える。隆一は目を閉じ、後年原野になった街の姿を思い浮かべた。そして、再び目を開け街を見た。

「ああ、昔のままだ。この街には、これが一番似合う」

隆一は、活気に満ちている街を見ているうちにうれしくなり、心までが弾んでくるのを感じた。

教室の戸を開けると、そこにはあの頃のままの空間があった。木の机を手でなぞると、ひんやりとした感触が懐かしさを体中に伝えてきた。

そのとき、静寂を破り昼時を告げるサイレンが鳴り響いた。

隆一は一瞬体が硬直した。あの日も、坑内事故を告げるサイレンが繰り返し鳴り響いていた。

その日、父は二番方で坑内に入っていた。母は詰所から知らせが来ると、直ぐに隆一と道子連れ進発所へと駆けつけた。その夜遅く父は運び出されたが既に息絶えていた。落盤事故で隆一の父は、再び陽の光を見ることなく三八才の生涯を閉じた。

隆一は急に父に会いたくなり、急いで階段を駆け下りると、スキーを履いて家へと向かった。

父の背中

隆一は、息を切らせ家の前までスキーを滑らせてきた。

「ただいま」

勢い良く玄関を開けると、居間では母が石炭ストーブの上で餅を焼いていた。そしてテーブルには、父と道子が座っていた。

「隆一、腹減ったべ。早くこっちに来て餅食え」と父が言った。

隆一はうれしそうに頷くと、父の横に座った。砂糖醤油をつけ餅をほおばると口の中に甘い味が広がった。どんぶりには、少し凍りついたニシン漬が盛られていた。シバラタ漬物を食べるなんて、この街を出て以来であった。どんな豪華なご馳走よりも、美味しい昼食だと隆一は思った。

こんなにも心が満たされる食卓が、木造長屋の小さな空間にあったことを隆一は長いこと忘れていた。そして、かつて家族という形の身近な幸せがあったことを思い出していた。

やがて、父は煙突掃除をすると言って立ち上がった。

「父さん、俺も手伝う」

隆一がそう言う

「そうか。隆一にしては珍しいなあ」と父は隆一の頭をなげ一緒に外へ出た。

父と一緒に屋根に登ってみると、長屋のあちらこちらで同じように煙突掃除をしているのが見えた。真っ白に積もった雪が、見る見る煤で黒くなっていく。

煙突掃除が終わると、隆一は父と一緒に共同浴場へ行った。入り口には「大晦日のため本日五時で終了」と書かれた紙が張ってあった。

浴槽からあがると

「父さん、背中擦るよ」

と隆一は言った。

「今日の隆一は、煙突掃除は手伝うは、背中は流すは、随分と親孝行だな」と父は言った。

たくましい父の背中であった。だが、その背は傷だらけであった。傷口には石炭の粉が入るため、傷跡はイレズミのように黒ずんでいた。隆一はそれらの傷跡を手で確かめるようになぞった。

（こんなにしてまで、俺たちのために働いてくれたんだ。そして・・・）

隆一は父の背中を見ているうちに、涙があふれてきた。

「どうした、隆一、力が入っていないぞ」

隆一は泣いていることを父に気づかれないように、力を込めて背中を流した。

家に帰ると、母は忙しく台所仕事をしていた。

テレビの上には、まだ使っていない葉書が何枚か置いてあった。隆一はその中から一枚を手にした。

「母さん、この葉書一枚もらってもいい」

「いいけど。隆一、それを書いたら郵便局へ行って出すんだろ。そしたら、父さんの酒も買ってきてちょうだい」

「うん、わかった」

にそう答えると、隆一はテーブルに座って葉書を書き始めた。隆一は、ここに来る前の大人の自分に書いていた。いくら気をつけて書いても、子供の文字になってしまうのが、自分でも可笑しかった。

家を出ると、外はもう暗く街路灯がつけられ、通りは雪明かりで照らし出されていた。人通りが多く買い物をする人たちが行き違っていた。人々が生活する躍動感に通りは満たされていた。

（やはり、人が行き交うこの街が一番いい）

隆一はそう思いながら、雪を踏みしめ歩いた。

やがて食堂を過ぎるとBARエルボンが見えてきた。隆一はドアの前まで近づいて行つた。ドアには門松が飾られ、一月三日まで休業する旨の張り紙があつた。確かに、ここにBARエルボンはあつた。

隆一はポストに葉書を投函すると、酒屋に寄り父の酒を買い求めた。そして、懐かしい街の様子を見ながら、街路灯の下を元来た道へと引き返した。

年越しの夜

七時近くから皆で食卓を囲み年越しを始めた。母が朝から支度した料理が並べられていた。茶碗蒸、煮しめ、なますそして、物置で凍られたタコの刺身。シバラタ漬物もあった。

母は用意が済むと道子に

「レコード大賞入るからテレビつけて」と言った。

テレビでは、ザ・ピーナッツが「恋のフーガ」を歌っていた。

「この歌もいいね」

母はテレビに合わせ口ずさんでいた。そこには、歌の好きな若々しい母が座っていた。隆一は、パーマーをかけ薄化粧をした母がきれいだと思った。

若くして父を亡くした母は、炭鉱病院の賄をしながら隆一と道子を育て上げてくれた。隆一の知っている母は、おしゃれもせずパーマー気のない髪を後ろに束ね、少し背中を丸めている姿ばかりであった。

母にとっても、今が人生の中で一番幸せなときなのかもしれないと隆一は思った。そんな母を見るのが、うれしいような、切ないような複雑な気持ちであった。

父は神棚にお神酒を上げ拍手を打つと、テーブルに座った。その夜は、父も母も楽しそうに一級酒を飲んでいた。

レコード大賞はブルー・コメッツのブルー・シャトーに決まった。受賞後うれしそうに語っていたフルートを持っている若者は、それから何十年後かに自殺したことを隆一は思い出した。

レコード大賞が決まると、母はテレビのチャンネルをNHKに変えた。

「レコード大賞はやっぱりブルー・シャトーだったね」

母は満足そうに言った。

「ブルー・シャトーは母さんのお気に入りだからなあ」

父も目を細めながら言った。

隆一は、母がときおりブルー・シャトーのレコードをかけていたのを思い出した。もしかしたら、母はブルー・シャトーを聞きながら、父がいた頃の生活を思い出していたのかもしれないと思った。事実母の遺品を整理すると、ブルー・シャトーのレコードが家族四人の写真と一緒に大切にしまわれていた。

少し酔いがまわってきたのか、母は鼻歌をうたいながら一旦テーブルを片付け始めた。

そうしているうちに、紅白歌合戦が始まった。若き日の宮田輝が司会を務めていた。

母がテーブルに座ると、父はコップを持ちもう一度皆で乾杯をした。

「隆一、道子、今日は年越だから夜中まで起きていていいぞ」

父は微笑みながら言った。

「今年もこうして、親子四人元気で年越をできるんだから、ありがたいね」と母も言った。

この夜が、親子四人で過ごした最後の大晦日であった。でも、隆一はそのことを口にすることはできなかった。

「隆一、おまえも来年から中学生だから、十一時過ぎたら父さんと一緒に神社へ行つて、裸参り見てくるか」と父が言った。

すると道子が

「ずるい、お兄ちゃんばかり。父さん、道子も連れて行って」と父にねだった。

「でも、道子眠くなつても、一人で歩けるか」

「いいよ、道子が歩けなくなったら、兄ちゃんがおんぶしてやるから。だから、父さんいいでしょう」

隆一は父と母の顔を見ながら言った。

「よし、わかった。道子、いい兄ちゃんいて良かったな」

父は道子の頭をなぜながら言った。

「うん」

道子はうれしそうな顔をして、隆一を見た。

隆一は家族四人で過ごした大晦日のことを思い出してみた。だが、父と道子と一緒に神社へ裸参りを見に行った記憶は全くなかった。

やがて紅白歌合戦も終わりに近づいてきた頃

「隆一、外は寒いから、おまえも特別に酒を飲んでみるか」と父が言った。そして、コップに少しだけ注いでくれた。

隆一は一気に飲んだ。

「あら、おまえも父さんみたいな飲んべになるね。もうエルボンに父さん迎えに行かされないね」

母は目を細め隆一を見ながら言った。

「そうだな隆一、今度エルボンと一緒に飲むか」

父も笑いながら言った。

「何だかおいしいな。父さんもう一杯だけいい」

隆一がそう言うのと今度は母が注いでくれた。

（ああ、俺はこんなにも、両親に愛されていたんだな）

隆一は、両親に対する感謝の気持ちを伝えたくなってきた。

「父さん、いつも俺たちのために、体に傷つけながら、石炭掘ってくれてありがとう。

俺、父さんの仕事って本当に凄いと思っている。母さんもいつもありがとう。俺たち大きくなるまで父さんの分も頑張ってくれて・・・」

そこまで言うと、隆一は急に激しい酔いに襲われてきた。父の顔も母の顔もぼやけ、二重に見え出してきた。

父の声が遠くから聞こえてきた。

「隆一、おまえも母さんのこと支えて、良く頑張ったな。父さんのために苦労かけて、色んなこと我慢させてしまった。父さんは、おまえのこと誇りに思っている・・・」
そして母の声も聞こえてきた。

「隆一、母さんも同じだよ。おまえは本当に良くやってくれたよ。おまえと道子がいてくれたから、母さんはね、父さんの分まで頑張つてくれたんだよ。本当にありがとうね。これからも家族大事にして、道子とも仲良くね・・・」

母の言葉を聞いているうちに、隆一の意識は薄れていった。

「父さん、母さんごめんね。俺、最近墓参りもしていないし、二人の気持ちも知らず親不孝で・・・」

隆一はそう言おうとしたが、もう言葉にすることはできなかった。

葉書

隆一は目を覚ますと病院のベッドに寝ていた。周りを見ると妻と道子がいた。

「道子どうしてここに」

「お兄ちゃんは、丸三日間昏睡状態だったのよ」

「あなた、何も覚えていないの」

妻はそう言うど事情を説明した。

隆一は十二月三〇日の夜、ススキノの路地裏で凍死寸前の行き倒れで発見された。財布には、BARエルボンの領収書が入っていた。警察は暴利バーの事件に巻き込まれた可能性もあるため、その店を探し出そうとしたが、該当する店是一件もなかったとのことであつた。

隆一は妻から話を聞くと

「みんなにすっかり心配かけてしまったな。道子にも年末年始の忙しい中、ごめんな」と神妙に言った。

「お兄ちゃん、BARエルボンって、まさか、あの街の店じゃないよね・・・」

道子はいぶかるように言った。

「ごめん道子、何にも覚えていないんだ」

本当のことは、後でゆっくりと道子に話そうと隆一は思った。

「じゃお兄ちゃん、私とりあえず家に一旦帰るから」

道子はコートを手にながら言った。

「道子、近いうちに父さんたちの墓参りに行くこうか」

道子はコートを手にしたまま一瞬隆一の顔を凝視して

「うん、私もそう思っていたの・・・」と答えた。

その日、隆一の家には沢山の年賀状に混じって、色褪せた一枚の葉書が届けられた。

そこには子供の文字が書かれていた。

「今家に帰っています。ここには、父さんがいて、母さんがいて、道子がいます。まもなく、家族四人で年越が始まります。僕はみんながいてくれてとても幸せです。隆一にもこんなときがあったことを思い出してください」

隆一は、家族四人で過ごした大晦日の奇蹟を、大切に心の中にしまい込んだ。

約

束

「いいか、今年のクリスマスは特別なんだ。明日の夜八時教室に集合だ。わかったな」
初の言葉に正春も武も大きく頷いた。

年が明けて三月になると、三人の小学校は閉校となってしまう。全校生徒十二名中五年生は初たち三名であった。

初たちが生まれる前に、この街を支えていた炭鉱が閉山となってしまう。それから街は急速に衰退し、初たちが物心ついた頃には、人口四百人ほどの萎んだ街になっていた。

「お父さん、今までのクリスマスでね、一番思い出に残っているのはね、どんなクリスマスだった」

正春は娘からそう聞かれた瞬間、あのとときの初の言葉を思い出した。

「それはね、お父さんが小学の教室で友達と集まったときのクリスマスだな。あれは、お父さんが小学校五年生のときだった・・・」

あの年の十二月二四日夜八時に、初、正春、武の三人は教室に集まった。

「今夜は俺たちにとって、忘れられないクリスマスにするんだ。これから大人になったって、これ以上のクリスマスはないぐらいにな」

初は正春と武の顔を覗き込み、白い息を吐きながら言った。

「うん、大人になったって絶対に忘れられないクリスマスにする」

春になると父親の仕事の関係で千葉へ行くことになっている武が言った。

「俺だって、忘れない。俺たち、ここの最後の五年生なんだから」

正春も白い息を吐きながら言った。

その夜、三人は少し興奮しながら七輪の火を囲み、ローソクの灯りの下顔を寄せ合っていた。教室は昼間とは異なり、ローソクの灯で照らし出され幻想的な雰囲気にも包まれていた。冷え切った空気は、初たちに寒さを感じさせるより、快い緊張感を与えていた。

三人は、それぞれが餅、ケーキなどの精一杯のご馳走を持ち寄った。

「校長先生言ってたけど、この学校の今までの卒業生九七九〇人にもなるんだって。これって凄いいよな。この街の人口が四百人ぐらいだから、えーと・・・とにかく、とにかく凄いいんだ」

武が自慢そうに言った。

「そうだよ、父さん言ってたけど、炭鉱がまだ活気があったころは、この校舎でも狭いくらい沢山生徒がいたんだって。今だって、この大きな校舎夕張の本町の学校に負けないもんな」

正春も誇らしげに言った。

「だけど、俺たち五年生だから、ここの卒業生にはなれないんだよな・・・」
初は少し悔しそうに二人の顔を見て言った。

三人は思っていた。あと一年閉校が延びていたなら、最後の卒業生になっていたのにと。

しばらく沈黙が続いた後初が言った。

「春になったら、どうするんだ」

「俺んちは、清水沢に引越してその小学校へ通うんだって、母さん言ってたけど・・・」

正春は、そっけなく言った。

「俺んとは、千葉へ行くんだって。だから俺も一緒に・・・千葉なんて一度も行ったこともないし、俺も清水沢で良かったのに」

武は少し涙声になっていた。

「初はどうするんだ」

正春は遠慮しがちに聞いた。

「俺、札幌の母さんと暮らすことになったって、ばあちゃんが言ってた。本当は、じいちゃんとはあちゃんと一緒にいたかったけど・・・」

初はうつむいて言った。

初の両親は、初が生まれて間もなく離婚し、一時期母親に引き取られたものの、初が三歳のときその母親も行方不明になってしまった。その後初は、この街で母方の祖父母に育てられた。

元探炭夫の祖父も最近体が弱ってきていた。そんなとき、急に母親が現れ初を引き取りたいと言ってきた。血の繋がりはあるとはいえ、初にとって母は未知の人であった。

沈黙が続いたあと突然教室の戸が開いた。初たちは、懐中電灯の灯りに照らし出された。

「こんなところで、おまえたち何をしてるんだ」

それは校長先生の声だった。三人はとっさに立ち上がった。

「校長先生、俺たち、クリスマスやってるんだ」

武が小さな声で言った。

「クリスマス、こんな時間に教室でか」

校長先生は、三人の顔をのぞき込んで言った。

「俺たちもう最後だから、皆でここに集まろうって、俺が声をかけたんだ」

初は校長先生の目をしっかりと見て言った。

「今夜は、大人になったって忘れないぐらいの、最高のクリスマスにするべと思つて」

正春もはつきりと言った。

三人の顔を見ながらしばらく考えて、校長先生は言った。

「そうか、おまえたちも春になったらお別れだもんな。そしたら、先生帰りに家まで送って行くから、一緒にその最高のクリスマスやるべ」

校長先生も初たちと一緒に七輪の火を囲んだ。窓ガラスには薄い氷の結晶が模様を描いていた。

「それにしても、ここは寒いな。一緒に宿直室まで行くか」

校長先生は、白い息を吐きながら言った。

「だめだよ、校長先生。俺たちのクリスマスは、この教室でないと、最高のクリスマスにはならないんだ」

武は力を込めて言った。

「そうか、わかった」

校長先生は笑みを浮かべ三人に言った。

「校長先生、これ飲む。じいちゃんが採ってきた山ぶどうのぶどう酒だ」

初は、一升瓶を先生の前に置いた。

「なんで、おまえたたち小学生がぶどう酒持っているんだ。それに、先生は今夜宿直当番だから・・・」

「したって、校長先生さつきから息吐いたとき、酒臭かったべさ」

正春は上目づかいで言った。

「うん、そりゃ先生だって、この学校で最後のクリスマスだも、思い出に少しぐらいはな・・・」

それから、初たちは校長先生からこの学校の話聞きながら、一緒にお菓子を食べ、ほんの少しだけぶどう酒を飲んで、楽しくときを過ごした。

そして、家に帰るとき初は正春と武に言った。

「俺たち、十年後も、もう一度ここに集まるべ、なあ」

「うん、集まるべ、十年後」

正春も武も少し興奮気味にこたえた。

正春は、娘と妻に初たちと過ごしたクリスマススの思い出を話した。だが、十年後にまた集まるといふ約束については話さなかった。

正春自身も、あれは子供の頃の一次的な感情の高ぶりが生み出したものと思っていた。それというのも、その翌年小学校は解体され、校舎はなくなってしまったからであった。それでいて、あの約束は未だに神聖なものにも思っていた。

あれから、十五年のときが流れた。武とは今でも音信があるが、初とは中学を卒業した頃から途絶えていた。

初は一時札幌で母親と一緒に暮らしていたが、母親は好きな男の人可以できると初を残して何処かへと消えてしまった。そして、結局初はホームに引き取られ、中学を卒業するまでそこで暮らした。その後中学を卒業して横浜の寿司屋に住み込みで就職したが、ここも間もなく辞め、初の音信は途絶えてしまった。

その夜、正春は娘が寝た後、アルバムから古い写真を取り出した。そこには、最後の在校生十二名の顔が写っていた。初はニコリともせず、少しレンズを睨みつけるような顔をしていた。

あの頃、初は何かに挑むようにいつも口を尖らせていた。今にして思えば、初のところだけが入学式も運動会も両親がいなかった。そんな境遇の中で生きていくのは、人よりも肩肘を張るしかなかったのだろう。

正春は、クリスマスツリーの明かりを見ながら、妻とワインを飲みそんなことを考えていた。

どのくらい時間が過ぎたのだろうか、少しうとうとすると、誰かがベランダのガラスを叩いていた。

「うんー、何だろう」

また窓ガラスを叩く音がする。正春は、ソファーから起きあがるとベランダへと歩み寄りカーテンを開けた。すると、降りしきる雪の中あの初が立っているではないか。背の高くなった初は、コートも着ずに紺色のセーターにマフラーを首に巻いていた。

正春は、急いでベランダの戸を開けた。

「初・・・どうして、ここに・・・」

「何言ってるんだよ、あのとき約束したろう。クリスマスの夜、またあの教室に集まるって」

初は目を輝かせて言った。

「えっ、だってあれは・・・」正春が躊躇すると初は

「さあ、はやく来いよ」と言った。

正春は急いでコートを着て外に出ると、そこには武もいた。

「武・・・おもえもいたんだ」

武は照れ笑いを浮かべ、初の影から顔を出した。武は三年前に東京で会ったときと同じ大人の顔であった。

「でも、こんな時間にどうやってあの学校へ行くんだよ」正春がそう言う

「大丈夫だよ。俺近道知ってるんだ。だから行こう」と初が言った。

「正春、初の言うとおりしていればいいんだよ。俺たちいつもそれで上手くいったんだから」武も続いて言った。

初を先頭に三人は、雪の中を歩いた。正春にとっては今まで通ったことのない道であった。やがて吹雪きになり前の道路も良く見えなくなってきた。

「初、本当に大丈夫なのか。ほとんど前が見えないけど」と正春が言うと

「正春、何も心配ないって」と武がこたえた。

三人は、吹雪きに立ち向かうように黙々と歩いた。どのくらい歩いたのだろうか。やがて大きなカエデの木にたどり着くと、さっきまでの吹雪きが嘘のように止んだ。そして、雲の切れ間からは月が見えてきた。カエデの木の向こうには、大きな校舎が月明かりに照らし出されていた。

「ほら、学校、見えてきたろう」

初は正春の顔を見ると笑いながら言った。

正春は校舎を見ているうちに、やっと三人でここに帰ってきたんだという不思議な気持ちになっただけだ。

「正春、これ見ろよ」

武が記念碑を指して言った。そこには、最後の在校生十二名の名前が刻まれていた。初、正春、武の名もあった。

「うん、俺たちの名前もある。俺たち最後の五年生だったからな」

正春は誇らしげに言った。

三人は記念碑の上に積もった雪を払いのけると、一人一人の顔を思い出しながら刻み込まれた名前を慈しむように手でなぞった。

「さあ、行くべ」

初は二人を促すように言った。

しばらく歩いて行くと、五年生の教室のあたりに灯りがついていていた。

「あれ、誰かいるのかな」と正春は言った。

「校長先生だよ。俺たちの約束思い出して、先生先に来たんだべ」

武は嬉しそうに言った。そしてもう一度三人で小学校を見上げた。白い雪に覆われた大地の上に、校舎は凜として月明かりの中で輝きを放っていた。

初たちは、降り積もった雪の校庭を前に進んだ。「さくっ、さくっ」とまだ誰も踏み入っていない雪原に三人の足跡が刻まれていく。

校舎の前にたどり着くと、三人はもう一度大きな校舎を見上げた。初はガラス戸の玄関を開けた。「ギー」と軋む音が建物の中に響いた。

「ああ、この空気昔のままだ」

思わず初が言った。

壁には「思い出いっばい。そして永遠（とわ）に」と書かれた横断幕が張られていた。

「この言葉、閉校式のときの・・・」

武は懐かしそうに言う、横断幕に手を触れた。

「何だか、この校舎、まるで生きているようだな。本当はとつくの昔に壊されてしまったのに・・・」

正春がぼつりと言った。

「何言ってるんだよ、俺たちの学校が消えてしまっわけないだろう。俺たちが心の中でしっかりと覚えていると、いつでもちゃんとここにあるんだ」

初は少し大きな声で言った。

「そうだよ、俺たちが忘れない限り、学校だって、この街だって消えたりしないさ。俺たちだって、いつまでも・・・」

武も正春に少しムキになって言った。

正春は二人の言葉を聞きながら、自分だって同じ気持ちなのに初と武に悪いことをしてしまつたと後悔していた。

そのとき、校長先生が階段から降りてきた。

「おお、三人とも来たか、外は寒かつたべ。先生先に来て教室暖めておいたから、さあ行くべ」

三人は校長先生の言葉にうなずくと、階段を上がつて行つた。

教室の戸を開けると、口ウソクの灯がともされていた。校長先生は、クリスマス用の太いキャンドルを十本ほど教壇の前に置いていた。

「ああ、俺たちの教室だ・・・」

正春は、入り口に佇んで言つた。

「さあ、ここに座るべ」

武は教壇の前に机と椅子を並べながら言つた。

「また、こうして皆でここに帰つてこれてうれしいな。校長先生も来てくれたし・・・」
初は顔をくしゃくしゃにして喜びながら言つた。

口ウソクの灯りの中で、みんな良い顔をしていた。

「あのとき、おまえたち十年後にまた集まるうつて言つてたな。だから先生五年前から毎年クリスマスになるとここで待つていたんだぞ。初、正春、武の三人をなあ・・・」
「校長先生、あの約束ずっと覚えていてくれたんだ」

正春は思わず言つた。

「俺あの頃色々あつて、十年目にはここにこれなかつたんだ。だけど、今夜正春が娘に、あのとときのクリスマスが今までの中で最高だつて言うから、何だかうれしくなつてきて・・・」

初は、目を輝かせながら言つた。

「だから、十年目は過ぎてしまつたけど、今夜はここに来ようと思つて」

武もうれしそうに言つた。

「そうか、正春、あのとときのクリスマスが最高だつたか。おまえたちまだ子供だつたのに、この街出てから良く頑張つたなあ。先生もこの学校の十二名の生徒のことが忘れられなくてなあ。そして、毎年クリスマスになると、おまえたち三人のことを思い出していた。特に初は大変だつたな、大人の都合であつちこつちやられて。先生力になれなくて、本当に悪かつたな・・・」

「なんも。俺この学校で五年生まで皆と一緒に過ごせたから、辛いことがあつても、皆のことや、夕張岳の姿思い出して頑張れたんだ。じいちゃん、ばあちゃんも俺のことめんこがつてくれたし。だから、俺なんかまだ幸せな方だ」

初は静かに言葉を選びながら言つた。

「そうか。そしたら、乾杯するべ。先生この山ぶどうでぶどう酒作つてきたから」

校長先生は、一人一人に紙コップを渡すと、一升瓶から初たちにぶどう酒を注いだ。そして、四人で乾杯をした。

「校長先生、俺たちの小学校の話また聞かせてよ」
武がねだるように言った。

「そうか、久し振りに話してみるか。えーと、昭和のはじめにこの街に炭鉱ができて、間もなく小学校もできたんだ。当時の炭鉱はえらい景気だなあ、次から次へと人が集まってくる。教室も先生の数も追いつかなくてなあ、だから、午前、午後の二部制でなんとか授業やっていったんだ。やがて、鉄筋三階建の大きな校舎ができてなあ、そりゃ、夕張の本町の学校にも負けないぐらいの大きな校舎で、この街の人たちの自慢だった。ところが、おまえたちが生まれる前に炭鉱が閉山になってしまつてなあ、その年の夏休みには、四百名もの子供たちが転校して行つてなあ、見送る生徒も先生たちも辛かつたそうだ。それから、街はどんどん萎んでしまつて、あの年に、閉校になつてしまつた。でもなあ、この学校は九七九〇名もの卒業生を世の中に送り出したんだ。だから、おまえたちの小学校は、大した学校だ・・・」

「そうだ、俺たちの学校は大したもんだ」

武は校長先生の真似をして言った。すると、校長先生も初も正春も笑い出した。

「次は先生がおまえたちに聞いてみたいことがある。おまえたち、この学校が好きか」
「当たり前だよ、校長先生」

正春がはつきりと言うと、初と武も大きくうなづいた。

「そうか。それでは、この学校のどこが一番好きか一人一人言ってみれ」

最初に武がこたえた。

「俺はこの学校の歴史だ。ここの石炭は日本の繁栄を作ってきたんだって、先生が教えてくれた。だから、ここの学校は日本を支えてきたんだ。それって本当に大したもんだと思う」

「ほう、歴史か。武、良く勉強したな」

校長先生がほめると武は少しはにかんで照れ笑いを浮かべた。

「俺は夕張岳が見えるこの学校が一番好きだ。春には校庭一杯に黄色いタンポポが咲くし、夏は鳥が沢山鳴いているし、秋には山が真っ赤になって、冬には校庭の雪山で転げまわって遊べるし。自然に囲まれたこの学校は最高だ」

正春は顔を輝かせて言った。

「そういえば、春になると、学校の桜の木、きれいな花、沢山つけていたなあ」

校長先生も懐かしそうに言った。

「俺はこの学校の先生たちと生徒が一番好きだ。俺のとき、運動会でも学習発表会でも親来たこと一度もなかったけど、誰もどうしてって聞いたりしなかった。ちゃんと、ほかの子供たちと同じく扱ってくれた。俺この学校の思い出あったから、よそに行つて悔し

いことあつても頑張つてこれた。俺、この学校にいた頃が一番幸せだった。だから、そんな思い出を沢山くれたこの学校が一番好きだ」

初がそういうと校長先生は初の肩を抱き寄せた。

「そうか、初はここにいたときが、一番幸せだったか。そうか、ここにいたときが・・・」

校長先生は何か言おうとしたがもう言葉にならなかった。

「あなた、起きて。こんなところに寝ていたら風邪ひきますよ」

正春は妻の声で目を覚ますと、居間のソファーに寝ていた。

正春は夢を見ていた。でもそれはあまりにも生き生きとした夢であつた。

翌日正春は娘を助手席に乗せハンドルを握っていた。昨夜の夢のことが気になり、あの街へと車を走らせていた。

「お父さんの小学校、もうないんでしょう」

「うん、だけど夕べ、あの小学校で校長先生と友達とクリスマスしている夢、見てなあ。なんだか、急に行つてみたくなって・・・」

正春は思った。確かに夢には違いないが、それだけでは割り切れない何かがある中であつた。

「さあ、着いたぞ」

正春はかつて校門が建っていた坂の手前で車を止めると、娘の手を引いて、雪の中を歩きはじめた。小学校の玄関があつたところに着くと、正春は思わず声を出しそうになつた。そこには何人かの足跡があつた。その足跡はあのイタヤカエデの木のままで続いていった。正春は嬉しくなり、その足跡のかたまりをそつと手ですくい上げた。そこには、初と武がいたような気がした。

足跡は校舎の横にあつた桜の木の下で途切れていた。木の下に行つてみると、何か小さな塊が薄つすらと積もつていた雪の下に見えた。正春は近づくと雪の中からその塊を掘り起こした。それは、キャンデルであつた。正春には、そのキャンデルは校長先生が灯してくれたキャンデルに思えた。正春はそのキャンデルを大切に車の中に持ち帰つた。

「お父さん、それどうしたの」

「これはね、サンタさんがお父さんに置いてくれたプレゼントさ」

「えつ、サンタさんのプレゼント」

「うん、とっても大切なプレゼントさ。お父さんにとっては、最高のクリスマスだ」

その日家に帰ると、正春のもとに一枚のクリスマスカードが届いていた。差出人は大久保初と書かれていた。やつと初が帰つてきたと正春は思った。

正春はキャンデルを取り出しマツチで灯をともすと、語りかけるように言った。

「校長先生、初、武、メリー・クリスマス」

十二名の在校生に寄せて

鹿島小学校の校庭には、この街の興りから衰退までを見届けてきた樹齡二百年近くのイタヤカエデの木がしっかりとその大地に根を張っている。その傍らには、夕張市立鹿島小学校の記念碑が建っている。そこには、この学校の七十年の歴史を見送ってくれた、最後の在校生十二名の名が刻まれている。君たち十二名には、この学び舎から全国に旅立った九七九名の卒業生をはじめ、この街で暮らしていた沢山の人々の思いが寄せられている。

君たちはたった十二名の生徒ではなく、この街の歴史を受け継いだ十二名もの最後の在校生なのだ。そんな誇りと自信をいつも持ち合わせて欲しい。

この大地で育まれた君たちが、幾多の苦難を乗り越え、その後の人生において幸多からんことを心より祈る。

海岸列車の
女 ひと

あの頃の僕は、心の内に先の見えないトンネルを抱えていた。暗闇の中で出口を求めていたが、まだ光を見出すことはできなかった。そんなときに、僕はあの女に出会った。

札幌発小樽行き海岸列車に、あの女はほしみ駅から乗車した。夏休みに入り学生たちの姿も消え空席が目立つ中、あの女は優先席に静かに座った。まるでそこだけが喧騒から切り離され、時間がゆっくりと流れていくようであった。

列車が動き出したころ、あの女の顔をそっと見た。僕の鼓動は一瞬高鳴った。あの女は、内田美香に良く似ていた。だが、美香であるはずがない。美香はもう十年以上も前に、二十歳で亡くなっている。

あの女は、三十を少し過ぎているように見えた。僕は、あまりにも美香に似ていることに動揺したが、年齢が違うことに気づくと安堵した。

銭函駅を過ぎた辺りから、車窓には青い海が広がりはじめた。内田美香は、二十歳の夏に小樽の海で高波に浚われてしまった。懸命に搜索したが、遺体はあがらなかつた。今も美香は、この海の底を彷徨っているのだろうか。

僕たちは、夕張の小さな炭鉱街で育った。美香の兄の順一とは同じ歳で、幼いころからの遊び友だちであった。親友というよりは、お互いに男兄弟がいなかつたので、実の兄弟のようであり、いまだにつき合いが続いていた。

順一は小さいころから妹思いで、美香の面倒を良く見ていた。美香もどこへ行くにも順一の後をついて行った。傍から見ても仲の良い兄妹であった。

順一が僕の家遊びにくるときは、自然と美香も側にいた。僕には姉が二人いたが、気がつく僕とではなく、美香と一緒に遊んでいた。姉たちは、僕が生意気なことを言うところ「隆幸じゃなくて、美香ちゃんの家の子だと良かったのに」とたしなめた。

美香も姉たちに良くなつき、小学生になつてからは、一人で泊まりにくることもあった。そんなときは、狭い長屋の六畳間に皆で雑魚寝をして遅くまではしゃいでいた。

今から思えば、特殊な地域社会であつたが、そこで暮らしていた人々は大人も子供も確かな絆で繋がっていた。沢山の物に囲まれるほど、人と人との関係が希薄になつて今とは違い、心の豊かな生活であつた。

子供のころを思い出しているうちに、列車は小樽築港駅へと着いた。僕は列車を降りる前に、もう一度あの女を見た。あの女も僕を見て、一瞬幽かに微笑んだような気がした。

僕はこの春から、札幌の本社から小樽の営業所勤務となつていた。それまで住んでいた札幌のマンションから小樽へ引越そうとしたが、気に入った物件が見つからなかつた。そんなこともあり、朝夕海岸列車に乗りながら通勤することになった。小樽までの通勤は、海を見ながらゆったりと時間を過ごすことができ、思いの他快適で僕はすっかり気に入ってしまった。

それと、正直なところ生活の場を変えることが、億劫になっていた。まだ、三十歳に差しかかった頃は、何か変化が起きると、心ときめくものさえあった。だが、三十五歳を過ぎた今となつては、ただ億劫になつてきた。

仕事を含め自分の日常の生活に不幸せを感じているわけではなかった。だが、心の中に虚しさのようなものが居座つていた。

日曜日の夕方一人で食事を済ませ、テレビを生活の音代わりにつけていることがある。だが、画面を見ながら、頭の中では別なことを考えている。そのことに気がつくとき、たまに自分存在が孤独に思えることがあつた。僕には、愛する家族や恋人もいない。僕は誰かのために生きるということもできず、ただあやふやな自分一人のためにしか生きる術を知らなかつた。そんな孤独が、テレビの向こうから見えてくる。

ふと、海岸列車で見かけたあの女の顔が浮かんできた。美香の魂は、今、安らかなのだろうか。それとも、深い海の底で孤独を楽しんでいるのだろうか。もし、美香が生きていたら、子供が二人ぐらいいて夫にも愛され、幸せな家庭を築いていただろうに。僕はあらためて、美香の若すぎた死を悼んだ。

その夜、順一からメールが届いた。来週末出張で札幌に来るとのことであつた。美香のことを思い出したその日に、順一から連絡が来ている。偶然とはいいいながら本当に仲の良い兄妹だと思い、僕は子供の頃の二人を思い浮かべてみた。

順一が遊びに来ると、その後には美香がいた。姉たちは美香の姿をみつけると側に駆け

寄ってくる。そして、髪留めやスカートが可愛いなどと誉める。すると美香も嬉しそうに少し照れながらうつむいていた。そして、順一の手をぎゅっと握り締めるのであった。そんな美香を順一も嬉しそうに見ていた。もし、順一があの子を見たらどう思うだろうか。僕はメールをもう一度読みながら考えた。

翌日列車がほしみ駅に着くと、まばらな列の中にあの女の姿はなかった。僕は、少しほっとしたような、それでいてがっかりしたような、複雑な心持であった。

やがて、列車がホームを後に動き出した頃、客車の戸が静かに開いた。そして、あの女はゆっくりと、優先席に座った。昨日と同じく、ベージュのロングスカートに白の半袖のブラウスを着ていた。

「いつの間に乗ったのだろうか」

僕は不思議に思いながらも、あの女と今日も出会えたのが嬉しかった。

銭函駅を過ぎると、あの女が座っている車窓には、青い海が広がりはじめた。僕は、遠くの海を見ている風を装いながら、あの女を見ていた。それは、シャガールの青の世界に画かれた絵のようであった。青い海原をキャンパスに、走り行く海岸列車の中で、あの女は紫陽花の花のように、淡く輪郭を現していた。

車窓を見ているうちに、あの女と目が合った。僕は一瞬躊躇したが、目を反らすことができなかった。その瞳は、とても懐かしい感情を僕の心に注いでくれた。次第に、僕の胸は熱くなり、涙が出そうになってきた。

その瞳の中には、内田美香がいた。子供の頃からいつも側にいた、美香の懐かしさが漂っていた。気持ち伝えることはなかったが、美香は僕の大切な人であった。それは、初恋という言葉では現しきれない多くの思いを含んでいた。生まれ育った街を思うと、そこにはいつも美香の姿があった。楽しかったこと、悲しかったこと、僕の心に残る風景の中には美香が写っていた。

僕が中学二年のとき、あの街の炭鉱は閉山になってしまった。その後僕の一家は札幌へ、順一のところは千葉へと離れてしまった。だが、当時小学生であった美香も千葉の高校を卒業すると、小樽の短大へと進学した。姉たちは既に東京、旭川へと嫁いでいたの、僕たちは二人で会うようになっていた。当時僕は社会人になっていたが、美香と会っているときは、あの街で子供の頃に帰っているようで、大きな安堵感に包まれていた。それでいて、美しく成長した美香を前に心はときめいていた。美香が再び僕の生活に溶け込んでいたとき、あの事故が起きてしまった。

美香の突然の死は、当時二十三歳の僕の心を押し潰した。その痛みから開放されるために、長い時間を必要とした。やっと美香のことを静かに考えられるようになったとき、僕は三十歳を向かえていた。

僕はあの女の瞳の中に、懐かしさと一緒に、忘れかけていた痛みを思い出した。それから毎日、僕は車窓から見える海原の中で、あの女の瞳に魅せられていた。

小樽にしては珍しく真夏日を越えたある日、僕は仕事を終えると同僚の車に乗り、小樽駅近くの小さな教会へと向かっていた。その教会では、今夜ゴスペルのコンサートが開かれることになっていた。

教会は港の見える丘の上に建てられていた。教会の中に入ると、まだ開演前だというのに、ほとんどの席は埋まっていた。小さな子供から老人まで幅広い年齢層の人たちが集まっていた。僕と同僚は隅の方にやっと空席を見つけたことができた。

教会の中は、少し壁の塗装も剥げところどころひびも入っていた。祈祷用の木の椅子も長年良く使い込まれたような古い傷もついていた。だが、これらの傷は、質素なたたずまいをかもし出し、かえって心地良さを現していた。そして、ここに集まった人々の温もりが、この教会が地域の人々に愛されているという証であるかのようにであった。

午後七時になると、急ごしらえのステージの右側から日本人一人を含む五人のアメリカ東部の教会からやってきたメンバーが現れた。四人はとても素敵な褐色の肌をしていた。

彼等が歌い出すと、会場を圧巻させるほどの豊かな声量が教会の中に響き渡った。一曲目を歌い出した頃は、聴衆もただ聞き入るばかりであったが、曲が進むにつれ彼等の歌に引き込まれ、次第に体全体でリズムを刻んでいた。小さな教会の中で、彼等の歌は聴衆と

一体となり、巨大なエネルギーを発していた。僕は彼等の魂を揺さぶる歌を聴きながら、ゴスペルが持つ偉大さに感動していた。

歌い終わると、日本人のメンバーだけを残し、彼等はステージを降りた。その後、この日のためにここ数日猛練習をしたという、三十人ほどの地元の人々からなる、ゴスペルの聖歌隊がステージの上に次々に現れた。

三歳ぐらいの子供から、主婦、サラリーマンまでの多種多様な人々が集まり、皆黒で統一された服装でステージに上がっていた。だが、こともあろうか、その中にあの女がいるではないか。僕は、あまりの偶然に声を出しそうになった。聖歌隊は、五曲ほど歌ったが、僕はあの女のことばかり見ていた。

そのとき僕は思い出した。内田美香も炭鉱街の小さな教会で聖歌隊に入っていた。それというのも、彼女のお母さんはクリスチャンではなかったが、どういう訳か聖歌隊の世話をやっていたからであった。僕もときおり順一と教会を覗きに行ったことがあるが、美香は人前で楽しそうに歌っていた。あの女も輝くような笑みを浮かべ歌っていた。そして、曲が進むにつれ体全体で歌い続けていた。

僕は不思議な気持ちになっていた。漠然とはしているが、今の自分の生活に何か欠けているような気がしてきた。あの女の歌を聴きながら、子供の頃のことを思い出していた。何もない質素な生活ではあったが、沢山の温もりに包まれていた。決して、心が淋しいなんて感じることもさえなかった。

僕は海岸列車であの女に会つてからは前にも増して、夕張での生活を思い出すことが多くなつてきた。とうに帰る家もなく、街も消えてしまったのに、あそこでの生活が輝いて見えることがあつた。あの女を見ているうちに、そんな気持ちが膨らんでくるのであつた。

その週の木曜日に、内田順一が札幌にやつて来た。僕たちは、札幌駅北口の居酒屋で向かい合つて座つていた。

「こうして隆幸と飲むのも久し振りだな」

順一は、日焼けした顔に微笑を浮かべながら言つた。

「そうだな、もう三年ぐらいになるかな。あのときは、俺の方から千葉まで行つて順一と一緒に飲んだよな」

三年前、僕は順一に会いたくなり千葉まで行つた。あの年は、散々な年であつた。正月早々に母が心筋梗塞で急死し、その後を追うように六月には父が交通事故で亡くなつた。そして、当時僕が勤めていた会社までが倒産してしまつた。姉たちは、天中殺だと嘆いていた。手の中にあつた大切なものが、次から次へと砂のように指の間から落ちていった。

そんなとき、ふと夕張のことを思い出した。あの小さな炭鉱街で生活していた日々が、とても懐かしく輝いて見えた。僕は会社の整理がつくと、職安へ行つた帰りに、あの街へ

と車を走らせていた。何も考えず、あの街に包まれてみたい一心でハンドルを握り締めていた。

だが、視界に広がる現実の街は、あまりにも変わり果てていた。電柱と朽ち果てた建物がわずかに残るだけで、かつてのふるさと故郷は原野と化していた。目印となる建物もなくなってしまうた街は、もと住んでいた所か、自分が今何処に立っているのかさえわからない程であった。

そんなとき、順一から電話があった。僕は、順一の声の中にかつての故郷を見つけたような気がした。翌日、僕は新千歳空港から羽田行き of 便に乗っていた。

「あのときは、色々とありがとう。お陰であの後仕事も見つかり、何とか今日まで順調にすることができたよ」

僕は、あのときの痛みを少し思い出しながら順一に礼を言った。

「そりゃ、良かったな。後は嫁さんだけだな。それにしても、誰かいい女でもないのか」

順一はビールを飲みながら、僕の目を真っ直ぐに見て言った。

「こればかりはな、やっぱ縁がないのかな」

溜息混じりに僕もこたえた。

「こんなとき、美香が生きていればなあ。おまえの良い嫁さんになっただけかもな・・・」

順一はビールを飲むと、ぽつりと言った。

「そんな訳ないだろう。美香ちゃんが生きてりゃ、とっくに誰か良い人見つけて嫁に行っているさ」

僕は笑いながら言った。

「もう十三年になる……。このあいだ身内だけで法要も済ませたけど、何だか美香が死んでから時間が経つのが早くて……」

「そうだってな、東京の文枝姉さんから十三回忌に行ってきたって電話がきていたつけ。俺、この春から小樽勤務になって、毎日通勤しているんだ。美香ちゃん小樽のどの辺りの海で事故に……」

「朝里の海だよ。短大のサークルで海水浴に行つて、駅のすぐ横の浜で高波に浚われてしまった……」

順一は悔しそうに言った。

「朝里の海なら、毎日列車の窓から見ているな」

「そうか、おまえ毎日あの海見ているんだ、おまえたちも不思議な縁で繋がっている……」

「順一、その不思議な縁でどういう意味だ」

僕は訳がわからず尋ねた。

「それはな、今までおまえに黙っていたんだけど、美香はずっとおまえのことが好きだったんだ。まあ、美香にとつてはおまえは初恋の人だったんだな・・・」

美香が僕のことを好きだった。初めて聞く話であった。僕と美香はそれぞれ違う場所で互いのことを思っていた。今さら、何てことだ。小さい頃から身近にすぎで、気づかなかったが・・・美香がそんなことを思っていたなんて。

「俺な、おまえが傷ついて千葉に来たとき思ったんだよ。もし、美香が生きていたら、おまえたちが結婚して、辛いときなんか二人で助け合っていたんだろうってな。そう思うと、おまえのことがなおさら可哀相だな・・・。だって、隆幸だって美香のことが好きだったんだろう。俺ずつと気がついていたんだ、だからあのとき、何だかおまえに申し訳ないような気がして・・・」

順一の言うとおり、もし美香と結婚していたなら、そこには今の僕にはつかめなかった温もりがあり、幸せが満ちていただろう。そんな、人生も良かったろうになあと、僕は深まる酔いの中で思っていた。その夜、マンションで僕と順一は夜が更けるまで酒を飲み交わした。

翌日、僕たちは朝里の海へ行くため海岸列車に乗っていた。順一は午後の便で新千歳空港から発つため、僕たちはいつもの時間帯の列車に乗った。

昨夜、僕は酔いに任せあの女のことを順一に言おうとしたが、ついに言葉にすることはなかった。あの女のことを「言葉」にしてしまうと、全てが消えてしまいそうな気がした。ゴスベルの夜にあの女を見て以来、僕はあの女は内田美香に違いないと思いはじめていた。もしそうなら、いつまでも海岸列車の中であの女に会っていたいと思っていた。

やがて列車はほしみ駅に停車した。列車が動き出す頃、あの女は僕たちの斜め前の優先席へと座った。僕は順一の顔を意味ありげに覗きこんだ。すると順一は

「どうした、隆幸」と当惑気味に言った。

「いや、順一何かあつちの窓の方に見えないかと思つて・・・」

「あつちの窓、住宅が見えるだけけど・・・」

僕はうろたえた。確かにあの女が座っているのに、順一には見えない・・・。僕は問いかけるような目であの女の顔を見た。

あの女は少しの間僕と目を合わせた。そして、はつきりと首を横に振つた。その瞬間、あの女は美香だと僕は確信した。順一には、あの女は見えない。いや正確には、美香の姿は僕にしか見えないのだろう。あれから十三年目の夏、美香は僕の前にはつきりとその存在を示した。

僕たちは、朝里駅で降りた。美香は走り去る列車の窓越しに僕らのことを優しく見つめていた。

「この駅だけは良く覚えてい、昔とほとんど変わっていないな」

順一は少し懐かしそうにそして切なそうに、ぼつりと言った。

僕は順一の後について、浜辺へと降りて行った。目の前に海が広がりはじめた。

「この辺だと思っただけで、周りの建物が変わってしまったて．．．」

順一はカバンから見覚えのあるチョコレートを取り出すと包みを解き、海に投げ入れた。

「美香は子供の頃から、このチョコレートが好きでなあ．．．」

僕も野の花を一輪そつと水際に置いて合掌した。

「あれから十三年か．．．」

順一は美香の眠る海を慈しむように言った。

順一が千葉に帰った翌週、僕は職場の同僚たちとマイカル小樽のビヤードンに立ち寄った。次の列車の時刻まで、小樽港が見渡せる窓側の席で僕ら三人はビールを飲んでい。小樽の営業所は三十人体制で運営しているが、その中でもチーフである僕ら三人は、情報の交換も含め、一緒に飲む機会が多い。

「幸子も今週で壽退社か。でも痛いな、彼女は性格が良くて仕事も良くできたからな．．．」

「次の新人は、二十五歳だつていうぜ、どんな子が楽しみだな」

「何言ってるんだよ、おまえは妻子持ちじゃないか」

「村岡君、可愛い子だったらすぐに唾つけて、嫁さんにしちゃえよ」

「おいおい、また俺の結婚話を酒のつまみにする、話題変えろよ」

僕らは、今日一日の仕事の疲れをビールで癒しながら、次に入ってくる新しい子の話題で盛り上がっていた。

次の列車の時刻が近づくと、僕らは店を出た。駅に続くガラス張りの連絡路からは、大観覧車が見える。全体をイルミネーションに包まれた観覧車は、まるで打上げ花火のように輝いていた。ふと、下の入り口の方を見ると、美香が立っていた。

「買物を思い出したから、次の列車で帰ることにしたからここで」

僕は同僚と別れると、急いで大観覧車へと向かった。

入り口に着くと、美香は嬉しそうにしてチケットを僕に差し出した。僕はうなずくとチケットを受け取り、入り口の中へと進んだ。僕は胸が高鳴っていた。

「こんなことがあるはずがない。でも確かにここに美香がいる、これは事実なのだ」

僕はそう自分に言い聞かせると、後ろを振り向いた。美香はすぐ後ろにいた。

受付でチケットを渡すと

「お一人ですね、どうぞ」とアルバイトらしい女の子はそう言いながらキャビンのドアを開けた。

「やはり、美香の姿は僕にしか見えない・・・」

僕は美香が乗り遅れないように、ゆっくりと入った。美香は僕の目の前に座った。

「こんなことつてあるんだなあ……。初めて見たとき美香に良く似ていると思ったけど、ちゃんと年齢もそれなりに重ねていたし……」

僕は美香の顔をじつと見つめながら言った。

「今頃になって、急に、隆幸さんの前に現れてごめんなさい。本当は驚かせないようにもっとゆっくりと時間をかけたかったんだけど……」

美香はうつむき加減に静かに言った。

そして、顔を上げると映画のワンシーンを見ているように、顔の表情がゆっくりと変わり、二十歳の頃の美香になっていた。

僕は少し驚きながら美香に聞いた。

「僕にしか見えないんだね」

「ええ、私は隆幸さんのためにだけ形をもらったの……」

「僕のためにだけ」

美香はすぐに答えず少し間をおいて、遠くの船の灯りを見ながら言った。

「この夏で、十三年になるわ。私のために皆集まってくれたの。文枝姉さんも来てくれたわ。なのに、私何にもお返しができなくて……」

僕は美香の話聞きながら、ふと子供の頃の美香の姿が浮かんできた。遊びに来ると姉二人に可愛がられ、いつも僕の身近にいた美香。あの美香が二十歳で死ぬなんて誰も考えもしなかった。

美香は、ゆっくりと話し始めた。

「私、急にあんなことになってしまったから、お父さんにも、お母さんにも何にも親孝行できなくて。順一兄さんにも、お別れの挨拶さえしていなかったし、あんなに皆に良くしてもらったのに、私の勝手に何にもできなくて。でも、今は皆それぞれ幸せに暮らしているようで良かったわ。ただ、隆幸さんのことが気がかりで……。隆幸さん、ここにいるあの頃の生活のことばかり思い出しているでしょ。隆幸さんの心の淋しさが、私も痛くて……。だから、私隆幸さんの前に。でも、驚かせたならごめんなさい……」

「こつちの方こそ、ごめんな。美香に心配かけてしまって。そうか、今の美香には俺の心が見えるんだね……」

僕は、美香がとてもしとおしく思えてきた。

「でも、もうそんなに長い時間はないの。この夏は特別な年だから、こうして形をつくれただけ……。お盆が過ぎるともうできないの……」

美香は切なそうに言った。

「この瞬間だけでいい、美香のことを思いつきり抱きしめていたい」

僕はたまらなくなり言った。

美香は頷くと、僕の横に滑り込んできた。僕は、ガラス細工にでも触れるように、静かに美香を引寄せた。そして、腕の中に確かな存在を感じ取ると、逃がさないようにしっかりと抱きしめた。

「美香が生きていたなら、どんなに良かったらうに。ずっと好きだったのに・・・」
僕は美香を抱きしめながら心の中で叫んだ。

「私も隆幸さんのことが、だから小樽の短大に・・・お嫁さんになりたかったの、なにごめんね。順一お兄ちゃんだって、お姉さんたちだって、皆喜んでくれたのにな。本当に、ごめんなさい・・・」

美香は僕の腕の中で、うなだれながら言った。

夢とも幻ともわからない不確かなときの中で、僕と美香は心を震わせていた。

それから美香は毎朝海岸列車の中で、僕に姿を見せてくれた。

僕は仕事が終わると急いで小樽築港駅に入りマイカル小樽の大観覧車へと行った。そこには美香が佇んでいた。

僕たちは港の見える棧橋まで降りて行った。僕たちは港の灯を見ながらとりとめのない話をした。僕は美香と会っているうちに、孤独やもやもやした不安が消えていくのを感じていた。

今の美香は彼岸の人ではあったが、生きている僕の中に活力のようなものを注いでくれた。そして僕自身も次第に内から満ちてくるものを感じ取っていた。そんな僕自身の変化が美香にも良く見えるようで、僕の話を楽しそうに笑みを浮かべて聞いていた。

だが、夢のようなときはもうじき消えようとしていた。

そして、八月十五日がやってきた。明日で終わるとわかっているけれども、僕はいつものようにとりのめのない話を努めてしていた。

美香はそんな僕の気持ちを察するようにゆっくりと言った。

「隆幸さん、明日で私は最後の。わかっているわね……。だから、明日は朝里の海から私のことを送ってね……。」

僕も美香の目をしっかりと見て言った。

「うん、わかっている」

僕はこれ以上声に出すことはできなかったが、心の中で美香に語りかけた。

「美香ありがとう。俺はもう大丈夫だよ。だから、美香も自分の場所に帰って、安らかに眠るんだよ……。」

美香は僕の顔を見ると優しくそしてはかなく微笑んだ。

その日、僕は仕事帰りにマイカル小樽で、小さな花束と線香を買った。そして小樽築港駅に入り改札口へと向かった。途中キヨスクの売店を見るとチヨコレートが入っていた。順一が言っていた美香の好きなチヨコレートであった。僕はそのチヨコレートを買った。大切にカバンの中に入れた。

プラットホームに立つと、夕暮れ時の中でイルミネーションに包まれた大観覧車が見えた。あの日から一週間あまり、僕の毎日は満たされていた。僅かな時間ではあったが、こうして美香と会えて僕は幸せであった。僕は 大観覧車を見ながら、残された時間がせめてゆっくりと過ぎることを願っていた。

だが、まもなく定刻になり、列車はホームに入ってきた。朝里駅はひとつ向こうの駅であった。

僕はもう一度自分に言い聞かせた。

「隆幸、元気を出して。美香が思いを残さないように、しっかりと送ってやるんだ」

朝里駅に列車が着くと、美香は駅の入り口で待っていた。僕は美香を見つけると、笑顔でこたえた。

僕たちは並んで浜辺まで歩いた。

僕は隣にいる美香を見ているうちに胸が詰ってきた。僕はもう一度自分自身を励ました。

「隆幸、今度は美香のために、おまえがしっかりとしなくちゃ」

ゆっくりと歩いたつもりでも、海はもう目の前に迫ってきた。辺りには夜の帳が降りていた。

「隆幸さん、ここでいいわ。ありがとう」

美香は水辺に立つと、僕の目をじっと見て言った。

「そうか、もう行くか……。短い時間だったけど、美香にこうして会えて本当に良かった。俺これから頑張って幸せな人生送るから、だから、もう美香に心配かけたりしないよ……」

僕は切ない気持ちを押さえ、できるだけ笑顔をつくった。

「隆幸さん、これからは思いっきり前に進んでね。きつと、近いうちに、いいことがあるわ……。暖かい家庭をつくって幸せになつてね。私は、それで安らかに眠れる……」
美香はそつと右手を差し出した。僕は両手でその手をしっかりと包み込んだ。そして美香を引寄せ僕の腕の中に抱きしめようとした。だが、僕の腕は美香の体を透り抜けてしまった。もう僕の腕は、美香の存在を確かめることはできなかった。

「ごめんなさい。今の私にはそこまではもうできないの……。もう、行かなくてはい。さあ、笑顔で送って……」

そう言うとき美香は水の上を滑るように歩き出した。

「あつ、美香待って」

僕はあわててカバンからチョココレートを取り出すと、水の中に入り美香に渡した。

「ありがとう。このチョココレート、お母さんがよく買ってくれた……。本当に、ありがとう……」

美香はチョココレートを、大切なものを慈しむように、両手で抱きしめた。そして、淡い光を放つと、その輪郭がゆっくりと消えていった。

僕は美香が消えた水辺にそっと花束を浮かべた。そして浜辺に戻ると線香を焚きながら、笑顔で美香のことを見送った。だが、目からは涙が止めどもなく流れ落ちた。僕はあわてて涙を拭くと、また顔一杯に笑顔をつくった。

お盆明けの月曜日、小樽行き海岸列車は夏休みも終わり学生たちで混み合っていた。列車がほしみ駅に着くと、ホームには沢山の人々が並んでいた。僕は美香とのことを思い出しながら、ぼんやりとそれらの列を見ていた。すると紺色のスーツを着た美香が立っているのではないか。

「今度こそ幻に違いない・・・」

僕は軽く頭を振ると目を閉じた。列車が走り出した。

「隣の席よろしいですか」

「ああ、どうぞ」

僕は目を開けると顔を上げた。すると、さっきの美香ではないか。僕は思わずその子の顔を覗きこんでしまった。

「あの、何か・・・」

だが近くで良く見ると、その子は少し美香に似てはいたが、もちろん美香ではなかった。

「いえ、別に・・・」

僕はあわててこたえた。

職場に着いてからしばらくすると、総務係の担当者が新人の女の子を連れてきた。その子は今朝僕の隣に座った子であった。

「え、皆さんに紹介します。今月初めに退職した川上幸子さんの後任として本日から働くことになった高城智子さんです」

「今日からお世話になります高城智子です。早く仕事を覚えるように頑張りますので、よろしくお願い致します」

その子は顔を上げ僕に気がつくとき少し驚いたようだが、すぐに笑顔でぺこりと頭を下げた。僕はその子の笑顔をさわやかな気持ちで見っていた。

「お父さん、海まだ」

この春幼稚園生になった和樹は、列車で行く初めての海水浴がうれしいらしく、何度も聞いてきた。

「次の朝里駅だよ」

僕は息子を膝の上に乗せながら言った。傍らでは、智子が目を細めて見ていた。

美香と出会ったあの年の冬、僕は智子と結婚した。僕は美香によってトンネルを抜け出し、智子と結ばれ家族という光を手にした。自分には守るべきものがあり、愛する者のた

めに生きることができるといふのは、至福である。人間の幸せといふものが、こんな身近な生活の中にあつた……。

朝里駅に着くと、僕は和樹の手を引き浜辺へと歩いた。やがて海が見えてきた。

「ああ、懐かしい……。この海、毎日見ながらお母さんもお父さんも仕事へ行つていたのよ」

智子は和樹に教えていた。

「よっし、ここで泳ぐか」

僕はビニールシートを敷くと荷物を降ろした。

「智子も海に入らないか」

「だめよ、今三ヶ月で一番大事なときなんだから」

智子の体内には、新しいいのち生命いのちが宿っていた。

僕は息子と海に入った。そして息子を抱き上げると、心の中で美香に話しかけた。

「美香、俺の家族たちだよ。あのとき美香に出会ったおかげで、俺も幸せに暮らしているよ。本当にありがとう……」

すると、沖の方から風が吹き抜け、小さな白波が押し寄せてきた。僕は、白波の上に一瞬美香を見たような気がした。

赤いポスト

小学校の入学祝に何が欲しいかと聞くと

「おじいちゃんが郵便局長をやっていた大夕張へ行ってみたい。ねえ、いいでしょう」と
泰樹は言い出した。

泰樹が物心ついた頃は、幸一の父杉沢忠勝は、すでにこの世の人ではなかった。だが、
幸一はまるで忠勝が生きているかのように

「おまえの、北海道のおじいちゃんはなあ、最後まで立派な郵便配達人だったんだぞ」と
言い聞かせていた。

四国生まれの泰樹は、初めて雪の上を歩いてきた。

「あつ、ここだよ泰樹。まだ赤いポストが残っていた」

雪山からは、赤いポストがこの主かのように、凜として姿を表していた。幸一はポ
ストの前に立つと、積もった雪を払い除けた。

泰樹は幸一の手をぎゅっと握ると

「ここに、おじいちゃんの郵便局があったんだね、お父さん」と嬉しそうに言った。

幸一も泰樹の手を力強く握り返し視線を稜線に移すと、夕張岳を見ることができた。そ
して、もう一度ポストに目を移すと、そこには、あの赤いレンガ造りの大夕張郵便局が、
鮮やかに浮かび上がってきた。

「ねえ、幸一兄ちゃん、帰ってこれない。お父さんが、お兄ちゃんに会いたいです」

電話の向こうから、美和の切ない様子が伝わってくる。

「親父が俺に会いたくないなんつて。急にどうかしたのか」

「お父さん、肺ガンだったの。それも、後三ヶ月の命だつて」

美和のすすり泣く声が聞こえてくる。

「えっ、この間電話したとき、親父ただの風邪だつて言っていたのに、その肺ガンつて本当なのか」

幸一は動揺を隠せず、少し大きな声で美和に言った。

「あの後、お父さん入院して検査を受けたの。お父さんには前からの約束だったから、本当のことを話したんだけど。そうしたらお父さんしばらく考え込んでから、お兄ちゃんに会いたいつて。会つて、どうしても頼みたいことがあるんだつて。だから」

高知空港を飛び立つ機の中で、幸一はもう一度美和との電話のことを思い出していた。

幸一が中学一年のときに母を亡くしてから、父忠勝は母親代わりを努め、正勝、幸一、美和の三人を育て上げた。

幸一にとって、父は尊敬できるとともに、一番大好きな大人でもあった。三十歳を過ぎた今でも、それは素直に言える父に対する思いであった。

三年前の春、幸一は岩見沢の父の家に行った。

あの街の郵便局長を経た後、忠勝は岩見沢の局へと異動となり、そこで定年を迎えた。

「どうしても、その四国の木頭村へ行くのか」

父は不安そうに言った。

そんな父親の気持ちを察するかのように、幸一は穏やかに答えた。

「何度も考えた上でのことなんだよ、父さん。それに、もう荷物も送ったことだし」

「そうか、やっぱり行くのか。向こうはことは氣候が随分と違うだろうから、体を壊さないようになあ」

いつもこうして、最後は子供の道を見守ってくれた父であった。幸一は心の中で父に感謝するとともに、遠くへ行ってしまう自分を詫びていた。

「母さんに線香をあげてくる」と幸一は立ち上がった。

「ボーン、ボーン」

そのとき、柱時計がとき時刻ときを告げた。

この柱時計を買ったのは、幸一が小学校にあがる年の三月であった。時計が読めるようにと、両親と兄、妹の五人で、当時父が勤務していた長沼の街へ買いに行ったのであった。

幸一の兄正勝は優秀で、北大を出た後中央省庁のキャリア公務員になった。何か学校のものを買うのでも正勝が先で、幸一は兄のお古を使っていた。

だが、どうしたことが、柱時計だけは幸一のために買ったものであった。

あの日、母は茶色のオーバーを着ていたことを今でもはつきりと覚えていた。

幸一の母は、三五歳で急逝した。あの頃十三歳だった幸一も、あと一年で母と同じ年齢になってしまふ。

母が生きていた頃の、最後の家族団欒を育んでくれたあの街は、石炭を掘るのを止めた後、急速に衰退していった。そして、その街さえもが、間もなくダムに沈もうとしている。

幸一がこれから行こうとしている木頭村にも、一九七二年に国のダム建設計画が持ち上がったが、ここでは、村長以下議会も一体となって反対を表明した。そして、ダムに頼らない村づくりを目指し、特産品の柚子を全国に売り込むために、第三セクター「きとうむら」を設立した。幸一は大袈裟に言うとか運命的なものを感じ、迷わずにスタッフに応募した。

幸一の故郷は、あがなう術もなく時代に飲み込まれ、ダムに沈むことも運命と諦めていた。だが、人口二千人あまりのこの村は、将来の村づくりを考えた末、ダムに反対していた。そんな気概が、当時仕事に閉塞感を感じていた幸一の心を強く引いたのかもしれない。

新千歳空港には、昼頃到着した。木頭村を出るときは、春を告げる福寿草が咲いていた。が、北海道の三月はまだ雪の中であった。到着ロビーには、美和夫婦が出迎えに来ていた。

幸一は挨拶を済ますと早速美和の夫が運転するワゴンに乗り込んだ。

「でも、親父が俺に頼みたいことって、何だろう。美和はどう思う」

「それが、私にもさっぱり」

「こんな状況で俺に頼むんだから、よっぽど大切なことなんだろうなあ。でも、そんな重大なことなら、俺なんかより正勝兄さんに頼むのが一番だと思うんだけどな」

幸一は考え深げに言った。

「私もそう思って、お父さんに言ったのよ。そうしたらお父さん、これは、幸一でなければだめだって言うのよ」

「正勝兄さんにも知らせたのか、親父のこと」

「うん、でも役所は年度末で忙しいから、今はこっちでよろしく頼むって。それに、お父さん正勝兄さん仕事が大変だから、今はまだ知らせなくて良いつて」

美和は少しうつむき加減に言った。

「兄貴は親父のいや、我家の自慢だったのに。こんなときに、親父も何も遠慮しなくたって」

幸一は不満げに言った。

正勝は、幸一たち家族の誇りであった。特に父は男手一人で育てただけに、妻への恩返しもできたかのように、正勝の成功を喜んでいた。

だが、正勝がエリートノ階段を昇るほどに、何か目に見えない壁のようなものができていた。

母が亡くなった後、正勝を中心に三人で父を助け、皆で家族を支えあって生きてきた。かつて、あんなに家族を大切にしていた正勝の心の内を、今は幸一と美和も読み取ることができなかつた。

やがて、車は父の入院する札幌の病院へと着いた。

その病院は幸一にも見慣れた病院であった。道路を挟んで向こう側には、かつての職場である札幌ファクトリーが見えた。

「この病院に入院しているんだ」

「うん、お父さんの病室からは、札幌ファクトリーが見えるのよ」
美和も事情をのみこんで答えた。

父は六階の内科病棟に入院していた。

「お父さん個室にいるのよ。最後の贅沢だから、周りに気を使わずに過ごしたいって」
エレベーターを降りると美和が言った。

「最後の贅沢か。親父お袋亡くしてから、道楽も遊びもせず、俺たちのためにだけ生きてきたようなものだったからなあ」

幸一はぼつりと言った。

美和はノックをすると病室のドアを開けた。父はいつものように、笑顔で幸一たちを向かい入れた。

幸一は父の笑顔を見た瞬間、たまらない懐かしさが蘇ってきた。杉沢忠勝は、どんなときでも幸一たちの父親であった。母が亡くなった後も、こうして病に犯されていても、父親の深さを秘めていた。

「幸一、急に呼び出して悪かったなあ。父さん、どうしても幸一に頼みたいことがあつてなあ」

窓辺に置かれたカーネーションの赤い花が、手稲山に沈もうとする夕陽に輝いていた。「何言ってるんだよ、こんなときに。父さんに力貸せるなんて、俺とつても嬉しいよ」

「そう言ってもらえると、父さんもありがたいなあ」

父はそう言うと、ベッドの横のロッカーから、少し色褪せた手紙を取り出した。

「この手紙覚えてるか。いつか、おまえたちにも話したことあるけど、閉山するとき、高校生たちから、十年後に配達するって預かったんだけど、どうしてもこの二通だけが配達できなくてなあ。お父さん、大夕張の郵便局長だったからって言うより、何かあの街で暮らした人間として、どうしても、子供たちに届けてやりたくてなあ。だから、幸一にこの手紙を頼みたくて」

父は幸一の目を真っ直ぐに見ながら言った。

「ああ、この手紙って、閉山の翌年卒業していった高校生たちの」

美和は懐かしそうに言った。

あの年の七月に、炭鉱は石炭を掘るのを止め、街の繁栄も一瞬で崩れて行った。

去る者も、残る者も互いに辛い別れであった。小学校から高校まで、夏休みが終わってみると、全校生徒の半数以上が転校していた。

そんなとき、地元の高校生が卒業記念として、未来の自分への手紙を思いついた。生徒の代表二名が杉沢郵便局長を訪れた。

「こんなときだからこそ、十年後の自分に向かって、何かメッセージを送れたらと思いついて。僕たちもう数えきれないほど沢山の友達見送って、本当は心がくじけそうになっているんです。でも、ここに残って卒業できるだけまだ幸せだと思ったりして自分を励ましているんです。局長さん、ぜひこの企画に協力してください。お願いします」

閉山により街はざわつき、人の心もどこか空ろになっていた。こんなときだから、あえて十年後の自分にメッセージを残す。そんな子供たちのひたむきさに、杉沢忠勝は郵便局長というよりも、一人のこの街を愛する個人として、申出を受け入れた。

その翌年の三月、杉沢局長は、十通の手紙を十年後に届けると約束し、子供たちを見送った。

その夜幸一は、岩見沢の家に泊まった。この家には美和夫婦が同居していた。

「ねえ、正勝兄さんに電話してみようか」

美和は思い立ったようにそう言うと、受話器を手にした。

「もしもし、正勝兄さん、私。今ここに幸一兄さんがいるの。今日、皆でお父さんの病院へ行ってきたの」

美和は病院での父の話をした。

「じゃ、幸一兄さんに変わるから」

美和は受話器を幸一に渡した。

「兄さん、そんな訳で、後の二通の手紙俺たちが届けることになって。できれば、親父が生きているうちに、届けたいと思って。だから、兄さんも協力頼むよ」

幸一は少し遠慮がちに正勝に言った。

「そうか、親父がそんなことを幸一に頼んだのか。でも、いくらあの街で郵便局長やっていたからって、親父もそこまでやるとはなあ」

正勝は言った。

「俺、今日親父の話を聞いて、感動したよ。あんな山奥の夕張の炭鉱の街だって、そこに家族がいて、友達がいて、沢山の人たちの生活があったんだよ。だから、俺は親父の願いを叶えてやりたいんだ。そんな素晴らしい父親が俺たちの親なんだから、俺たちも何とかしたいと思って」

幸一は少し興奮しながら言った。

「そうか、わかった。今、仕事もって帰ってるから、悪いけど、後でこっちから電話するよ。じゃ、親父にもよろしく伝えてくれなあ」

そう言うのと、正勝は電話を切った。

幸一は受話器を置いた。

「お兄ちゃん、何って」

美和は幸一の顔を覗き込むように言った。

「うん、協力するって。それで、今仕事中だから、後で電話するって」

幸一は力なく言った。

「お兄ちゃん、今回は正勝兄さん頼るのはよそう」

美和は溜息をつきながら言った。

「うん、そうだなあ。二人で何とかしよう」

幸一がそう言うと、美和の夫の昭夫が言った。

「あの、私で良ければ、手伝わせてください。閉山で大変なときに、子供たちが卒業記念に十年後の自分に書いた手紙を届けるなんて、凄いことじゃないですか。何だか、私はお父さんの気持ちわかるなあ」

そんな夫を美和は嬉しそうに見ていた。

幸一は、木頭村に帰ると、父との約束を妻の綾子に話した。

綾子は身重の体を揺すりながら

「それって、とても素敵な話じゃない」と言つて幸一を励ましてくれた。そして

「何とかお父さんが生きているうちに、このお腹の子見てもらいたいわね」と言つた。

「そうだなあ、親父が生きているうちに、手紙も赤ん坊も間に合えばいいなあ」

その夜、幸一は今でも音信のある同級生たちに、手紙を書いた。

それから一週間ほど経つたある夜、電話がかかつてきた。幸一が受話器を取るなり、相手は一方的に話し始めた。

「幸一しばらく。いやあ、おまえの手紙読んで、泣けてきたねえ。それにしても、おまえの親父、いや杉沢大夕張郵便局長、大したもんだわ。俺、感動したよ」

声の主は山村昭次であった。

「あの二人、山口順一さんと小倉みどりさん、きつと上か下に兄弟がいるはずだよ。俺たち、東京で高校の会作っているから、その連中にも声かけてみるよ」

昔と変わらず、人なつっこい声で山村は言つた。

それから、何人かの幸一の同級生から、電話がかかつてきた。皆何よりも、未だにあの頃の高校生たちとの約束を、死の直前まで守ろうとしている、杉沢大夕張郵便局長のひたむきさに感動していた。

数日後再び山村から電話があつた。

「幸一、山口順一さんのことだけど、意外なところに接点があったんだ。順一さんには三つ上のお姉さんがいるそうだ。そのお姉さん、明美さんは、正勝さんと同級生で、当時二人は付き合っていたらしいって」

「兄貴は、家の仕事と勉強ばかりかと思っていたら、そんなことがあったんだ」

幸一は、早速岩見沢の美和に電話をした。

「そういえば、中学生の頃、手編みの手袋を届けてくれた女の子がいたのを覚えてるわ。正勝兄さんもその手袋大切に、高校に行っても使っていたわ。多分、そのひとなのね」

「でも、どう話したら良いのか」

正面から切り出すには、正勝は幸一にとっては、あまりにもためらわれた。少し間をおいてから、美和が言った。

「じゃ、お兄ちゃん、私から正勝兄さんに聞いてみようかしら」

その夜遅く、正勝の自宅に電話があった。

「あなた、美和さんから電話。お父さん、どうしかしたのかしら」

正勝は受話器を受け取ると

「親父の様態急変したのか」と美和に言った。

「こんな、夜遅くごめんね。お父さんなら今のところ変わらないわ。この時間なら、お兄ちゃんも役所から帰って来ているかと思って。あの、お兄ちゃん、山口明美さんの消息知らない」

美和は、幸一から聞いた話を正勝に伝えた。

「そうか、彼女の弟さんが、親父が探していた卒業生の一人だったんだ。わかった、こつちも何とか調べてみる。彼女なら友達も沢山いたから、きつと消息がつかめると思う」

正勝は、その夜妻が寝た後、一人でウイスキーを飲んでいた。グラスの向こうには、中学生の頃の山口明美が、雪の中立っていた。

中学校の帰り道、山口明美が途中の坂道で待っていた。既に日は暮れ、街路灯が灯されていた。

冬の街路は、雪明りで淡く照らし出されていた。そんな光の下で、山口明美は佇んでいた。

「やあ、待ったかい」

正勝は、白い息を吐きながら言った。

「いや、私も向こうの道から今来たばかりだから」

明美はそう言うと、正勝の手を見た。

正勝はそれに答えるように、両手を明美の目の前に突き出した。

「この手袋、とつても温かい。高校生になつても、大切に使うから、ありがとう」

三月になると、明美は母親を助けるため、愛知へ働きに出る。そして、定時制高校へ通うことになっていた。

父を亡くした少女と、母を亡くした少年は、いつしか互いに引かれ合っていた。この春は、正勝と明美にとっても、辛い別離の季節であった。

二人は歩きながら、取り止めのない話をしていった。言葉の数だけ思い出が沢山残れば良い。そんな想いで、二人は別離の影を追い払おうとしていた。

だが、突然会話は途絶えてしまい、二人は立ち止まってしまった。静まり返った街の中で、降り積もる雪の音が聞こえてくる。

二人は、空を見上げた。街路灯に浮かび上がり、大きな雪の結晶が次から次へと舞い降りてくる。見上げている明美の目からは涙が流れ出していた。

「本当は、幸一さんとも離れずに、皆と一緒に夕張の高校へ行きたかった。でも、弟もいるし、母さんにも、これ以上苦労はかけられないから。どうしようもないって、分かっているんだけど。だけで、辛くて」

誰が悪いのでもない。だが、どうしようもないことが、世の中にはある。そんな、現実には押し潰されようになっている二人であった。

正勝はどうすることもできず、明美の手をしっかりと握り締めた。そんな二人をいたわるかのように、降り積もる雪が優しく包み込んでいた。

それから間もなく、幸一のもとに山口明美の所在が知らされた。山口明美は以外にも幸一の近くにいた。兵庫県の淡路島に住んでいて、姓は今でも山口であった。

幸一は早速山口明美に電話をした。

幸一は手紙のことを話すと、是非お会いしたいと伝えた。明美は、幸一の申し出を快く承諾した。

高速バスを降りると、明石海峡大橋が陽に照らされ赤く輝いていた。山口明美の住まいは、バス停から五分ほどのところにあった。

明美は幸一を温かく迎かい入れてくれた。明美がお茶の用意をしている間、居間を見渡すと、大きな仏壇が目に入ってきた。老人の写真と一緒に三十代ぐらいの男の人の遺影も置かれていた。

幸一が仏壇を見ていると

「若い方が、うちの人よ。自分だけささっと三途の川を渡ってしまつて」

明美は急須にお湯を注ぎながら言った。

「うちの人も山口って言つてね、それで、私結婚しても姓が変わらなかつたの」

「そうですか。よっぽど縁があつたのですね」

幸一は出されたお茶をすすりながら言った。

「でもね、こんな近いところに、大夕張の人がいたなんてね。それも正勝さんの弟さんだなんつて」

「明美は懐かしそうに言った。」

「あの、兄とは中学校時代の同級生でしたね」

幸一は、少し遠慮がちに聞いた。

「今だから言えますけど、正勝さんは、私にとっては初恋の人だったんですよ。そして、仲間だった」

「仲間って、どういうことですか」

「私のところは父を炭鉱事故で亡くしていて、正勝さんはお母さんを病気で亡くしていた。お互い片親を助けて、弟や妹の面倒を見ながら生きてきたの。だから、本当はまだ子供なのに、早くから大人になることを求められていたのね。そんな毎日の積み重ねで、ときどき自分が押しつぶされそうになってね。そんなとき、心の重荷をお互いに少しずつ、軽くなるように励ましあっていたの。特に正勝さん、勉強ができた分、周りの期待も大きくて、それで、また頑張ってしまう。本当に大変だったと思うわ。正勝さんお元氣かしら。北大出て、中央官庁の公務員をやっているって聞いたけれど」

「兄は、家族の自慢でした。でも今はあの頃のことには、あまり触れたくないようで」

幸一は少しためらいながら言った。

「わかるわ、正勝さんの氣持。私もそうだけど、私たち子供時代がなかったのよ。自分の本音を言える場所がなくて、本当はわがまま言いつたり、もっと甘えたかつたりしたかったの。だから、とつても懐かしいんだけど、思い出すと、どこか重いよね」

明美の話の中には、幸一も美和も知らなかった正勝の姿が語られていた。

その後二人は故郷の話をしながら、心を通わせていた。そして、話が途切れた頃、幸一は父から預かってきた山口順一の手紙をテーブルの上に差し出した。

「この手紙が、先日電話で話したものでありますが、何とか順一さんに渡したいと思ひまして」

「この手紙、高校生の頃の順一が書いたんだ」

明美は大切そうに手紙を手にした。色あせた封筒が、ときの流れを語っていた。

「あの子、私が愛知に働きに出るとき、男の癖に涙ぼろぼろ流しながら、駅から見送ってくれてね。後で母に聞いた話では、汽車が見えなくなつて、汽笛の音が遠ざかつても、いつまでも手を振つて、私のこと見送つてくれていたんだつて。しまいには、母も辛くない、二人で泣きながらプラットホームに立っていたつて。今の豊かな時代から言えば、遠い昔話のようなものだけど、あの街はとつても懐かしい故郷であると同時に、父が事故で亡くなつてからは、生活が大変で苦勞もしたわ。順一は、一度も中学も高校も同期会に出たことがないのよ。だから、いつのまにか名簿からも名前が消えてしまつて。局長さんには、苦勞かけたわね」

明美はそう言つと、手紙をテーブルの上に置いた。

「あの子、今神戸に住んでいます。でも、幸一さんが連絡を取つても、多分会わないと思つわ。だから、この手紙は、私からちゃんと話して届けさせてもらつわ」

幸一にもそれが一番良い方法だと思え、順一への手紙を明美に託した。

それから、五日ほどして幸一の家に手紙が届いた。差出人を見ると、山口順一からであつた。

側にいた綾子も

「この手紙、あの山口順一さんから」と幸一の肩越しに尋ねた。そして、ハサミを取り出すと、幸一に渡した。

幸一はうなづく、封を切つて、綾子と一緒に読みはじめた。

杉沢局長さん、幸一さん、手紙確かに受け取りました。姉から聞いたと思いますが、僕は、今まで大夕張との繋がりをずっと避けてきました。でも、最近よく夢に見るようになりました。そんなとき、姉から手紙を受け取りました。早いもので、あの手紙を書いてから十八年になります。この時間の長さは、僕がああ街で生まれ育つた時間と同じなのです。そして、亡くなつた親父の年齢も超してしまいました。本当はあの街のことが好きでたまらない。でも、一番大切な父を奪い、姉までも引き離してしまつたのも、あの街なのです。好きなんだけど、恨めしい。そんな気が持がずつと重くのしかかつていたのです。でも、夢に見るたびに、たまらなく帰りたくなつて。そんな

ときに、十八の自分が書いた手紙が戻ってきました。今からみれば大したことは書いていませんが、やはり、あの頃の自分もあの街のことが好きだったんだと、しみじみ思いました。これからは、僕なりに故郷と向かい合っていたいと思います。そんな気持ちを、杉沢局長さんと幸一さんが届けてくれました。もし、この手紙が届かなかつたら、僕は一生故郷と和解できなかつたと思います。本当にありがとうございます。

「あなた、良かったわね」

綾子は目をうるませながら言った。

「うん、この手紙すぐ親父に読ませなくちゃなあ」

そう言いながら幸一は綾子の肩をそつと抱き寄せた。

数日後、幸一のもとへ美和から電話がかかってきた。

「あの手紙、お父さんとでも喜んでいたわ。私も感動しちゃった」

美和の嬉しそうな声が、幸一の心にも染み渡ってきた。

「来週出張で東京へ行くから、そのとき正勝兄さんに会ってこようと思って。山口明美さんと会ったとき、俺たちが知らなかつた兄貴のこと色々聞いてなあ。何か急に会って話がしたくなってきた」

幸一は明美から聞いた話を美和にも伝えた。

「そういえば、正勝兄さんって、兄弟というよりも、いつもお母さんの代わりであったり、お父さんの代わりであったりして、子供の顔って持っていないかったわね。私たち正勝兄さんに甘えて面倒見てもらって来たけど、本当はどこかでずつと我慢してきたのかも知れないわね」

「そうなんだ。今までも感謝しながらも、それが当然だどこか思っていたけど、兄貴にとつては結構大変だったんだろうなあ。だから、昔の話を避けていたのかなあ」

「そうなのかもね。私たちには懐かしいことでも、正勝兄さんには少しまだ重いのかも知れないわね」

幸一が新橋駅近くの居酒屋に入ると、正勝は先にビールを飲んでいた。

こうして、二人だけで飲むことは珍しいことであった。考えてみれば、他人が入らず兄弟だけで膝を交えること自体が、初めてのこともかもしれない。

正勝は幸一を待っている間に、そんなことを考えていた。

二人はビールで乾杯した。

「どうせこつちに来たなら、ホテルなんか取らずに、家に泊まれば良かったのになあ幸一」

正勝は少しほてった顔をして言った。

「うん、ありがとう。でも、たまには、兄さんと二人だけで飲みたいと思って」

幸一は少しはにかみながら言った。

「そうだな、それもいいだろう。さつき思ってたんだけど、幸一とこうして二人だけで飲むなんて初めてじゃないかなあ。大夕張にいた頃は、俺が高校生で、幸一はまだ中学生だったし。大学へ行ってからは、俺もアルバイトが忙しくてあまりゆつくりと話もできなかったからな。でも、あの頃幸一は高校生だから、どっちにしる無理か」

正勝は笑みを浮かべながら言った。

「でも、兄さんは高校生の頃、時々親父と飲んでいたろう。俺何回か夜中に見たことあったから」

炭鉱住宅を借り上げた郵便局官舎の台所で、父は良くテーブルを置き飲んでいるときがあった。正勝が側に行くとき

「おまえも、一緒に飲むか」と声をかけることがあった。そんなとき、正勝は父と一緒にコップを傾けていた。

幸一は、台所の電気の下に浮かび上がる二人の姿を見て、正勝がとても大人びて見えたことを覚えていた。

「ああ、そんなこともあったな。親父は昔から晩酌はしなかったが、寝る前には毎日少しだけ飲んでいたんだ。お袋が生きていた頃は、良く二人で楽しそうに飲んでいたな。お袋が死んでからは、しばらくは飲むのを止めていたんだ。ある夜、親父が背中丸めて一人で

飲んでいる姿見ていると、何か俺の方が無性に寂しくなってきたなあ。ああ、この家からお袋は本当に消えてしまったんだって、切ないほど思い知らされたようで。それで、俺がお袋の変わりに酌したりして。それから、時々、親父の寝酒の相手するようになったんだ」

「そんなことがあったんだ。同じ家族でも、俺も美和もまだ子供だったんだなあ。親父のそんな姿って、知らなかったもなあ」

「幸一はそう言いながら、背中を少し丸め独酌をしている父の姿を思い浮かべてみた。『そうだな、幸一とは三歳違いだけど、あの年頃の三歳って大きいのもしれないな。でも、あの親父は、大夕張郵便局長としてはもちろんだけど、妻を亡くし、夫としても子供たちのことも含め良く頑張ってくれたと思うよ。そんな親父が病気でもうじき死ぬなんて、本当にたまらないな』」

正勝は天井を見上げながら切なそうに言った。そして、一気にビールを飲み干した。

「あの兄さん、山口順一さんの手紙、明美さんに手伝ってもらって、本人に渡すことができたんだよ。そしたら、順一さんからお礼の手紙が来て、親父に送ったらとても喜んでくれたって、美和が言っていたんだ」

「そうか、山口順一さんの手元にやっと届いたのか。親父も喜んだか。本当に良かったな、幸一」

正勝も嬉しそうに言った。

「実は、俺順一さんに手紙届けるために、淡路島の明美さんの家を訪ねて行ったんだ。兄さんのこととても懐かしがっていたよ」

幸一は控え目に言った。

「そうか、明美さんに会って来たんだ。彼女に最後に会ったのは、二十歳の頃だったかな。もう一度会ってみたいなあ」

正勝はそこまで言うのと

「今夜は少ししゃべり過ぎるな」と少し酔った頭の中で考えていた。

「明美さん、元気だったよ。ご主人は大分前に亡くなってしまったんだけど、娘さん二人と幸せそうに暮らしていた。中学時代の兄さんのこと少し話してくれて。片親になつたら、お互い子供時代がなくなつたって」

幸一は、明美から聞いた話を正勝にも話した。

正勝は幸一の話の聞くと

「そんなこともあつたな。でも、あの頃は振りかえる余裕もなくて、必死だったからな。そうか、明美さんはそんなことを言っていたか」

正勝の脳裏には、雪の夜、涙を流していた明美の姿が浮かんできた。

「俺、明美さんの話を聞いているうちに、一緒に暮らしていながら、兄さんのこと一面的にしか見ていなかったなと思って。だいたい、俺も美和も兄さんはいつも立派過ぎて、愚痴一つ聞いたこともなかったし、そうだな、スーパーマンのように思っていたんだよ」

幸一はそう言うと正勝のコップに日本酒を注いだ。

「そうか、スーパーマンか。俺、少し頑張り過ぎたのかな。でも、お袋亡くしてから元気がなかった親父の喜ぶ顔見たら、手が抜けなくなってしまうてなあ。なんか、あの頃思い出すと懐かしいんだけど、どこか切なくてなあ。だから、大夕張を出てから、逃げ出せたような気がして。でも、最近良く夢に見てなあ。お袋がまだ生きていて、親父も若くて、俺が小学生で、幸一はまだ鼻をたらしっていて、美和はオムツをしているんだ。夢だとわかってはいるんだけど、家族四人が揃っているのがとても嬉しくてなあ。あの頃が、俺にとっては一番良かったなあ」

正勝は心底懐かしそうに言った。

「兄さん、ごめんな。俺も美和もそんな兄さんの気持も知らず、甘えてばかりでぬくぬくと暮らしていたけど。なんか、兄さんのこと踏み台にしていたようで」

「何言っているんだよ。母さんが死んだのはとても辛かったけど、あんな、良い親父がいて、お前たちみたい可愛い弟と妹がいたから、俺だって頑張ってこれたんだよ。だから、ごめんなんて言うなよ」

正勝は、幸一の肩を引寄せながら言った。

「うん、ただ、感謝の気持だけは、伝えたいと思って」

幸一も正勝の肩に腕を回しながら言った。

「でも、手紙の件、親父が幸一に頼んだのわかるな。お前の周りには、いつも友達が沢山いて、人が集まってきたものな。俺今だから言えるけど、そんなお前が羨ましかったなあ」

「何言っているんだよ。兄さんは秀才で、皆から信頼されていたし、俺なんか兄さんに比べられて散々だったよ」

そう言いながら、幸一と正勝は互いの顔を見合わせると、声を出して笑った。

その夜、正勝と幸一は夜も更けるまで飲み明かした。父杉沢忠勝から託された手紙は再び兄弟の絆を結びつけてくれた。

正勝、幸一、美和の三人は、最後の一人小倉みどりを探し出すため、動き出した。

三人は心当たりを全て当たってみたが、依然として手がかりはつかめなかった。

そんなある日、正勝から幸一のもとへ連絡があった。

正勝は夕張市役所にいる同級生に頼み込み、戸籍上での小倉みどりの足取りをつかむことができた。閉山後間もなく、一家は札幌へ転出したが、翌年みどりの両親は交通事故で亡くなっていった。その後、みどりの消息も途絶えてしまった。みどりは一人っ子であったため、姉妹等のつながりはなかった。

小倉みどりの父方の出身が山形県酒田市であることを突き止め、親戚筋に当たってみたが、北海道へ渡って以来付き合いは途絶えていた。炭鉱へやって来た男たちは、津軽海峡を隔てた故郷では食べていけない、それぞれの事情を抱えていた。

仕事が多くても逃げ帰る場所もない。そんな境遇があればこそ、男たちは、真つ暗な地の底で、女房子供たちのために、石炭を掘り続けることができた。

三人は、父の命を気遣いながら、必死で小倉みどりの行方を探したが、これ以上の手がかりを得ることはできなかった。

早春の頃に、余命三ヶ月といわれた杉沢忠勝の命も、熱い夏を何とか乗り越えることができた。

だが、秋を迎えナナカマドの実が赤く色づいた頃、元大夕張郵便局長杉沢忠勝は、愛する者たちに見取られ、静かに息を引き取った。

その年の暮れに、視聴者の公募による「ふる里」を特集するテレビ番組が企画された。その番組に、あの山口順一が、杉沢郵便局長と手紙のことを応募し、番組で取り上げられた。

その番組が契機となり、小倉みどりの手紙も遂に配達することができた。小倉みどりは、異国の地ドイツで家庭を築き、幸せに暮らしていた。

届けられた手紙は、それぞれの卒業生たちの心に、懐かしさとともに、故郷への想いを呼び起こした。

そして、正勝、幸一、美和の三人は、再び家族としての絆を、結びつけることができ
た。こうして、杉沢忠勝の想いは、人々の心の中で、永遠のいのち生命を得ることができ
た。

「お父さん、この手紙ポストに入れたら、天国のおじいちゃんのところへ届くかな」

泰樹は、木頭村を出るときに書いた手紙を、大切そうにコートポケットから取り出し
た。

「大丈夫、届くさ。だって、ここはおじいちゃんの郵便局なんだから。神様が必ず配達し
てくれるよ」

幸一は、泰樹の頭を撫ぜんがら言った。

泰樹は嬉しそうに頷くと、ポストの口に手紙を入れた。すると「ポトン」と、手紙がポ
ストの底に届いた音が聞こえてきた。

幸一と泰樹は、ポストに背を向けると、車の方へ歩き出した。すると「カサツ」と、雪
が崩れる音がした。

二人が振り向くと、春の陽射しの中で、赤いポストは嬉しそうに輝いていた。

バ
ス
停

そこには、寝息を立てて横たわっている七二歳の父がいた。

ここが病院のベッドでなければ、まるで安らかに睡眠をとっているかのようであった。屈強な体で、かつて石炭を掘り続けていた父が、今は病院のベッドの上で生死の境を彷徨っていた。

今朝方、父はスキー場の倉庫で意識不明の状態で見えられた。昨日の夕方頃から父は行方不明になってしまった。妹の恭子のところへも行っていないかった。九時を過ぎた頃、恭子とも相談し警察に届けた。

「兄さん、父さんに何かあつたら、どうしよう・・・」
不安そうに恭子が言う

「大丈夫だよ。親父は元先山やっていたぐらいだから、一晩でどうってことはないさ」
と私は自分に言い聞かすように言った。

あの街の炭鉱が閉山になった後、両親と妹は恵庭に住むことになった。その年の春、地元の高校を卒業すると、私は千葉で働きだしていた。

それから五年後、私は札幌に仕事を見つけ、北海道へ帰って来た。

妹が旭川に嫁いだ後も、両親は恵庭に居を構え二人で暮らしていた。三年前に母を看取った後、父は呆け始めた。

「お父さん、家に来てもらいましょようよ」

そんな妻の思いやりの一言から、父はこの春から私たちと一緒に暮らすようになった。

父は呆けたといつても、今までは徘徊することはなかった。むしろ、昔の記憶は誰よりも確かであった。

父がいなくなつた夜、妻はビデオに気がついた。

「お父さん、外に出るまで、このビデオ見ていたみたい」

それは、父が母と暮らしていたころ録画した夕張が舞台になつた「幸せの黄色いハンカチ」であつた。もう三〇年前の映画であつた。

夕方妻がパートから帰ってくると、テレビとのビデオの電源が入つたままで、父が消えていた。ビデオを見た後、父は急にどこへ行くかとしていたのだろうか。

その疑問は、翌日警察の事情聴取の後明らかになつた。父のことをタクシーに乗せてくれた山本さんが、父の様子に異変を感じ機敏な対応してくれたお陰で、父は凍死せず済んだ。

警察から連絡先を聞き、私は山本さんにお礼を言うべく、タクシー会社へ尋ねて行つた。

「年の瀬といいなながら景気が悪いもんですから、大通りの辺りで車を待機させお客さんを待っていたんですよ。そうしたら、おじいちゃんが同じところ何度も行ったり来たりしていたんで、何か気になってねえ。それで声を掛けてみたんですよ・・・」

山本さんの話によると、父は何かを探しているように、テレビ塔近くのビルの前を何度も行ったり来たりしていた。

山本さんがタクシーを降りて

「おじいちゃん、何か探しているのと聞くと

「三菱バスの停留場が、この間までこの辺にあっただのに、見つからないんだ」と父は答えた。

「三菱のバス停ね。この辺り何年もタクシー流しているけど見たことないな。おじいちゃん、そのバス乗ってどこへ行くのさ」

「大夕張だよ。おっかと子供が俺の帰り待っているから」

父は山本さんの質問に目を細め嬉しそうに答えた。

「そりゃ、早くバス停見つけなくちゃねえ」

山本さんはそう言うのと、無線でタクシー会社の運行指令にバス停を探してもらうことにした。それまでの間、外は寒いからと言って、父を車の中に乗せてくれた。

しばらくして会社から連絡が入った。

「おじいちゃん、困ったねえ。三菱のバス停この辺りにはないって。それと、大夕張って、あの炭鉱のあったところかい」

「そうだ。三菱大夕張だ。俺そこで先山で石炭掘っているから・・・」

父は誇らしげに言った。

「そうなんだ。おじいちゃん石炭掘っていたんだ。それなら、うちの運行指令も美唄の出身なんだけど、その大夕張は、もう三〇年も前に閉山になって今は何にもないはずだって言ってたけど・・・」

「閉山・・・あれえ、ついこの間まで、バスに乗って行ったんだけどな・・・」

山本さんは、父とそんな会話をするうちに、家まで送り届けた方が良くと考え、何度も父に住んでいるところを聞いたが答えはなかった。

その内、父は思い出したようにスキー場まで行ってくれ言い出した。そこが家のそばだと山本さんに言った。方向を聞くと

「あつち」と言つて藻岩山の方を指差した。

車の中で、山本さんが炭鉱での暮らしや仕事のことを聞くと、父は嬉しそうに、まるで、今でもそこで暮しているかのように、正確に生き生きと話し出した。父の記憶は完璧であった。

タクシーがスキー場の手前まで来ると

「この辺でいい」

と言い、父は丁重に山本さんに礼を述べ、料金も支払った。そこにはもう恍惚としている父の姿はなかった。

「おじいちゃん、タクシー乗りたいときここに電話くれればすぐ来るから。また、よろしくね」

山本さんは父に名刺を渡した。

父が歩き出した後も山本さんは家に入る父の姿を確認し車を出した。それでも、山本さんは気になり、父のことをスキー場の事務所にも連絡しておいた。

父はビデオで夕張を見ているうちに、昔の時間に引き込まれてしまったのかもしれない。それで、急に思い立ち、バスで大夕張へ行こうとしたのだと私は考えた。

でも、バス停が見つからなかったので、スキー場まで行ったのだろう。私たち親子四人は、スキー場の近くの住宅に閉山まで住んでいた。あの頃の時間へ迷い込んだ父は、大夕張に一番近い場所を求めて彷徨っていたのだ。

病院へ行くと妹の恭子がいた。

私は、山本さんから聞いた話を伝えた。

「そうか。父さん、大夕張へ帰ってたんだ・・・」
恭子は溜息をつくように言った。

「仕事は大変だったけど、あの頃が、父さんと母さんにとっても、一番思い出が深いのかもしいないなあ」
私も懐かしむように言った。

その夜、私は父に付き添うことにした。

父は集中治療室の隣の病室にいた。二人部屋であったがもう一つのベッドは空であった。

消灯時間が過ぎたので、隣のベッドに横になった。今日は長い一日であった。体は疲れているのに、頭は妙に冴え寝付くことができなかつた。何度も寝返りをうつが、眠ることができなかつた。

そんなとき背中越しに父の声がした。

「眠れないのか」

振り向くと、隣のベッドには服に着替えた父が座っていた。そして部屋の明かりをつけながら言った。

「さあ、英男も早くアノラック着て」

父は立ち上がると既に外套を着ていた。その外套は、昔父が大夕張で着ていたものであった。さらに、明かりの下で良く父の顔を見ると、それは大夕張にいた頃の、四〇代の顔であった。

私が何か言おうとすると、父は病室のドアに手を掛け

「母さんと恭子が待っているから、行くぞ」と私に言った。

私は慌ててコートを着ると、父の後について行った。病院の裏口から外に出ると一本の道がテレビ塔の方へ続いていた。

車も人の往来もない静かな道を父と二人で歩いていた。

「ああ、大通りのバス停まで行くんだなあ」

私がそうつぶやくと

「皆で雪祭り見に来たけど、すっかり遅くなってしまった。明日、英男も恭子も学校あるのになあ」

静けさの中、父の長靴が雪を踏みしめる音が響いている。中学の頃の冬の夜、父が二番方で坑内の仕事から帰ってくる時、良く聞いていた懐かしい音であった。

やがて、母と妹の姿が見えてきた。妹は中学校の制服にアノラックを着ていた。

「母さん、恭子、すっかり待たせてしまったな」

父は白い息を吐きながら言った。

「なんも。こつちも恭子ともう一度雪像見てきたところだから。ねえ、恭子」

母は笑顔で恭子の顔を見ながら言った。

そこには、まだ三〇代後半の母が懐かしい緑色のオーバーを着て立っていた。

私たちの傍らには、あの三菱のバス停があった。

間もなく、急行大夕張行と書いたバスがやってきた。バスに乗り込んだのは、私たち親子四人だけであった。運転手さんの顔を見ると、昔お世話になった懐かしい顔であった。

「わあ、今日は私たちだけの貸し切りバスだ」
恭子が嬉しそうに言う

「本当だね。雪祭りだけの、深夜の臨時便だから、外にお客さんいないんだね」
母も声を弾ませていった。

私も何だか嬉しくて、気持ちが高ぶってきた。

「こうして、四人で札幌まで遊びに来るなんて、何だか懐かしいな」

私がそう言うと

「そうだな。たまには皆でバスに乗って、こうして、札幌へ来るのもいいもんだなあ」と
父も嬉しそうに言った。

深夜の札幌の街を後に、バスは大夕張へと走り出す。

私たちは、近所の人の話や、学校の話など取り留めのない話をしていった。父も母も恭子も皆がとても幸せな顔をしていた。

「ああ、いいなあ、こうして親子でバカ話できるのは・・・」私は嬉しそうに言った。

「こいつ、高校生になってから生意気になったなあ。バカ話ときたもんだ」父はそう言うと、当時テレビではやっていて、プロレスのヘッドロックを私にかけてきた。

「痛いよ、父さん。腕力ではまだまだかなわらないんだから」私は必死に父に抵抗した。

「そうだよ、あんたが何ほ勉強できたって、それは父さんが命がけで石炭掘ってくれてい
るお陰なんだから。だから、かなうわけないよ。でも、父さんもいい加減にしなさいよ」
当時炭鉱では、かかあ天下の家が多かったが、我が家もそうであった。

「母さん、お腹空いたなあ」父がそう言う

「お握り、沢山作ってきたから、皆で食べるべさ」

母はナツプサクからお握りを出し、皆に渡した。

札幌へ行けばいくらでも食堂があるのに、あの頃はどろいという訳か必ずお握りを持って
行った。食堂といつても、行くところはテレビ塔の上の食堂ばかりであった。今から思え
ば、都会の食堂は気後れがして、入ることが出来なかったのかもしれない。

お握りを食べ終わると、バスの窓からは懐かしいシューパ口湖駅が見えてきた。いつの
間にか夜も明け、朝の光がさしていた。

「まだお兄ちゃんと私が小学校の頃、父さんと母さんとで汽車に乗ってきたことあったよ
ね。四人でボートに乗って遊んで、昼ご飯は湖畔亭でジンギス汗食べて」

恭子は懐かしそうに言った。

「そんなことあったね。でも、父さん隣のテーブルに佐藤さんが来ると一緒に飲みはじ
め、夕方汽車で帰る頃、酔いつぶれて大変だったよね」母がそう言う

「そうだよ。俺なんか佐藤さんのおじさんと父さんをおかわるがわるかっいで駅まで運んで
いたんだから」私は父の顔を見ながら少し意地悪そうに言った。

「いやあ、あのときは悪かった。でも、今日はこうして皆を雪祭りに連れてきたんだからもう、勘弁してくれよ」

父は頭をかきながら言った。

私の父は酒飲みであった。父ばかりではなく、坑夫たちは良く酒を飲んだ。でも、私たち家族は父の酒が好きであった。父の酒はいつも楽しく、笑い声が絶えなかった。

見慣れた故郷の街並みを見ながら、私たち親子四人は笑ったり、冗談を言ったりしながらバスに乗っていた。本当に、楽しいバス旅行であった。

宝町を過ぎると鹿島小学校の大きな校舎が見えてきた。

「あれが見えると、帰ってきたって気がするね」母が溜息をつくように言うと

「そうだな。この学校はこの自慢だからなあ」

父も頷きながら言った。

私と妹の入学式のときは、母と一緒に校門のところまで、父に写真を撮ってもらったことがあった。四月だというのに、まだ雪が沢山あって、皆買ったばかりの、真新しい長靴を履いていた。

やがてバスは終点大夕張へ着いた。

父母の後について、私と妹も降りる支度をしていると

「ここからは、父さんと母さんしか行けないんだ。お前たちは、元いた場所に帰りな。なあ、英男わかるだろう」

父が名残り惜しそうに言った。

私はそのとき、父は母がいる世界へ行くのだと瞬時に理解した。

「英男、恭子、今日はどうもありがとう。皆で一緒にいれて、とても楽しかった。父さんも、母さんも、英男と恭子の親で、本当に良かった。今日は忙しい中、ここまで一緒に来てくれて、本当に、ありがとうね」

母も涙をこらえながら、それでいて、嬉しそうに言った。

「父さん、母さん、おれもとても楽しかった。本当にありがとう。なあ、恭子」

私がそう言うと

「これからも兄ちゃんと仲良く助け合っていくから。雪が解けたら、二人でまたここに来るから。だから・・・」

恭子はそのままで言うと言葉をつまらせ泣き出した。

私は、恭子の手をぎゅっと握ると、深々と二人に頭を下げた。そして、涙が止め処もなく流れ出した。

両親は静かにバスを降りた。傍らには三菱バス大夕張と書かれたバス停がしっかりと立っていた。

やがてバスは、大夕張駅の前で旋回すると、静かに走り出した。

二人は、あの懐かしい大夕張の街並みと一緒に、笑顔で私たちを見送ってくれた。妹と私は泣きながら、二人の姿が見えなくなるまで、手を振っていた。

「父さん、母さん」

私は自分の大きな声で目を覚ました。いつの間にか寝入っていた。今見たのは夢だった。でも、それは、あまりにも、暖かくて切ない夢であった。

その日の夕刻、父は最期に

「皆で、大夕張さ、帰るべ・・・」と私と恭子に言うと言静かに息を引き取った。とても安らかな顔で、父は大夕張へと帰って逝った。

著者略歴

夕輝文敏（ゆうき ふみとし）

夕張市鹿島生まれ

生まれてから高校卒業までの18年間を夕張市鹿島（大夕張）で過ごす。『ふるさと大夕張』というHPにはしばしば投稿をすることがある。しかし、その素顔は謎が多く、ほとんど知られていない。札幌在住であるらしく、現在も執筆活動を活発に行っている。次回作が待たれるところである。

夕輝文敏短編集

イリュージョン／大晦日の奇跡

| | | |
|-------|-------|-------|
| 2007年 | 1月12日 | 初版発行 |
| | 1月13日 | 第2版発行 |
| | 1月14日 | 第3版発行 |

著者 夕輝 文敏

発行所 ふるさと大夕張会

http://www.2f.biglobe.ne.jp/~mst_iida/

発売元 大夕張購買会文藝部

定価 2000円（本体1942円）

印刷 ふるさと大夕張印刷部

©Fumitoshi Yuki 2007 Printed in Japan

ISBN5-7777-7777-1A0082 Q2000E

落丁・乱丁があってもお取替えできかねます（笑）。

ISBN5-7777-7777-1A0082 Q2000E 定価2,000円（本体1,942円）

発行 ふるさと大夕張会

発売 大夕張購買会文藝部

過去を 忘れさるのでなく 向き合い大切に
生きることが 私たちに勇気を与えてくれる。
それは 誰もがもつ 心の古里なのだから…。
著者が贈る 心あたたまる大人のファンタジー